



When I lie down, I go to sleep in peace;
you alone, O LORD, keep me perfectly safe.

平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。
主よ、あなただけが、確かに
わたしをここに住まわせてくださるのです。

詩編4編9節

教会学校教案誌

2010.10.11.12月号

No.39

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2010年10～12月カリキュラム (第39号)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月3日	葦の海を渡る	出エジプト14章	出エジプト14:14
	神ご自身がたたかって、勝利された。神の大きなみわざをほめたたえよう		
10月10日	天からのパン	出エジプト16章	申命記8:3 (一部)
	神がご自身の民を養われる。神に養われる幸い、また七日目の祝福を知ろう		
10月17日	十戒を授かる	出エジプト 19:1-20:21	詩編119:105
	神は愛と恵みの言葉として十戒を与えられた。律法を持つ幸いを味わおう		
10月24日	金の子牛の事件	出エジプト32章	出エジプト20:3, 4 (前半)
	神は偶像礼拝をしりぞけられる。神に喜ばれる礼拝をささげよう		
10月31日 宗教改革記念	幕屋の建設	出エジプト40章	出エジプト40:16
	神礼拝を中心として共同体が形成される。栄光に満たされる礼拝をささげよう		
11月7日	荒れ野の放浪	民数記13-14章	民数記14:9 (後半)
	人を恐れてしり込みする者を主はさばかれる。主なる神をこそ恐れよう		
11月14日	ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章	ヘブライ11:1
	主が共にいてくださることがわたしたちの勇気である。試練と向かい合おう		
11月21日	約束の地カナンへ	ヨシュア6章	エフェソ6:10 (後半)
	主が先立ち、たたかってください。勇気をもって立ち向かおう		
11月28日 アドベント	待降節・アブラハムの子	創世記15:1-6	ガラテヤ3:7
	アブラハムへの約束はキリストによって私たちにも及ぶ。その幸いを知ろう		
12月5日 アドベント	待降節・ダビデの子	イザヤ11:1-10	イザヤ11:1, 2 (前半)
	主を恐れ敬う霊に満たされて生きる幻。真実の王を待ち望もう		
12月12日 アドベント	待降節・捕囚からの解放	イザヤ40:1-11	イザヤ40:1
	神ご自身が民を慰めてくださる。御子イエス・キリストの到来に備えよう		
12月19日 降誕祭	降誕祭・主イエスの降誕	ルカ2:8-21	ルカ2:10 (後半)
	羊飼いに告げられた救い。キリストにおいて成就した神との平和を喜ぼう		
12月26日 年末	神殿で献げられる	ルカ2:22-35	ルカ2:30-32
	律法の成就として献げられたキリスト。このお方を見て安息をいただこう		

も く じ

2010年10・11・12月カリキュラム

まえがき	二宮 創	4
巻頭説教	相馬伸郎	5
日曜学校・教会学校訪問		
東仙台教会教会学校の紹介	吉永肇小	8
特別寄稿		
聖書は歴史をどう語るか（第2回）	牧野信成	11
特集「信仰の継承」（第2回）		
信仰の継承について	梶浦和城	14
信仰の継承について	草野 誠	16
信仰の継承について	町野義也	18
コラム		
「ひとりにかける」—教師のビジョン—	相馬伸郎	20
副読本のご案内		21
自由募金のお願い		22
聖書研究・説教展開例・分級展開例		23
10月 3日		24
10月10日		31
10月17日		38
10月24日		45
10月31日		52
11月 7日		59
11月14日		66
11月21日		73
11月28日		80
12月 5日		87
12月12日		94
12月19日		101
12月26日		108
2011年1・2・3月カリキュラム		115
2010年度年間カリキュラム		116
執筆者よりひとこと・あとがき		118

まえがき

二宮 創（太田伝道所宣教教師）

「はじめくん！ キレイに塗るねえ！」50歳を迎える私の耳に、今も鮮明によみがえる先生の声。教会堂の玄関階段を机に、手渡された白い紙を端から端まで、一心に青クレヨンを走らせる幼稚科生。本人は青空を描いているつもりだが、お世辞にも上手とは言えない絵。それでも先生は、澄みわたる青空のような清々しい声で褒めてくださいました。生徒はその言葉を、心の青空に刻みつけて、いつまでも大切にしています。先生！あなたの声は、母なる教会の声でした。本当にありがとうございます。おかげさまで、私は今も、神さまの子どもです。

「やあ！ おはよう！ よくきたね！」日曜早朝の書道塾を早引けして、教会学校に駆け込んでくる小学科生を、校長先生は玄関で待っていてくださいました。生徒がやって来るのを、とにかく喜んでくださった。頭をなで、背中をさすってくださった。「うふふ」とほほ笑みかけてくださった。校長先生！あなたこそ教会学校でした。あなたの心の温かさ、手の温もりを、今でも想い起こします。本当にありがとうございます。私もCS教師に成りました。教会堂の玄関で、生徒ひとりひとりを迎えること、声かけることに大きな喜びを感じます。

「さあ！ みんなあつまって！」礼拝と分級が終わると、説教壇の周りは友だちでいっぱい。日曜日にひとつずつもらえる宝物、聖句カードとお星のシール。優しいお姉さん先生が、順番に渡してくださいました。シールを舐めて出席表に貼り、帳面にカードをノリづけする。それが日曜学校の儀式でした。礼拝堂に漂うノリの香り、舌に残るノリの味。それが安息日の味と香りでした。姉さん先生！本当にありがとう。カードとシールはないけれど、パンとワインの色と香り、生徒に届けたいと思います。

中学生になった途端、友だちは来なくなりました。女子数人の中で、男子はひとり。淋しげな私を見るに見かねてか、中学科は男女別のクラスになりました。「使徒信条を唱えて分級を始めましょう。」先生とひざつきあわせる厳かな雰囲気は、大人への入り口でした。ザークイの回心物語、小説氷点と原罪の話、信教の自由の権利。これらの教えは、信徒への道すじでした。中学を出て、遠くの学校に入った私のために、祈りつづけてくださった先生。19歳の信仰告白を本当に喜んでくださった先生。あなたこそ私の信仰の父、生涯の恩師です。

懐古趣味だと笑われるかも知れません。危機意識が希薄だと叱られるかも知れません。でも私には感謝と確信と希望があります。目の前には神の恵みの歴史が広大な地平となって広がっています。小さな私の歩みにも本当に沢山の愛が注がれてきた事実が刻まれています。はるかなたの教会学校での恵みが、確実に今の自分を形造っていることへの感謝があふれます。そして足元には、違わされている教会学校の今があります。数の多い少ないが問題ではありません。教会学校が本物の教会かどうか問われているのです。主イエスが、生徒一人ひとりを選び招いておられ、喜び迎えてくださる。心から褒めておられ、安息日を共にしてくださる。人格として扱っておられ、弟子の道を示してくださる。その恵みを教師も親も信じ抜くこと、その恵みに仕えて子どもたちを愛し抜くこと。そこには、主のゆるぎないご支配が存在すると確信しています。生徒は必ず、聖霊を注がれ、主イエスに結ばれ、御父を崇めるようになる。その約束された未来を、背中にひしひしと感じながら、希望をもって祈り続けます。

（中部中会日曜学校委員会委員）

「神のことばと教育、そして祈り」

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

イエスはお答えになった。

「人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つひとつの言葉で生きる』

と書いてある。」

（マタイによる福音書4章4節）

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。（ヨハネによる福音書1章1～4節）

そう言うってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

（ヨハネによる福音書20章22～23節）

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

（創世記2章7節）

私どもは主の日のたびに、説教を聴いて、神を礼拝します。子どもも大人も、御言葉の説き明かしである説教によって主イエス・キリストとの出会いに導かれます。主イエスとのいのちの交わり、愛の絆は新しくされ、深められ、喜びと平和に満たされます。

たとい、どれほど荘厳な音楽、美しい礼拝堂、整えられた式次第によっても、それだけでは、私どもの信仰は起こされず、生ける主イエス・キリストとの出会いも起こりません。

まさに、礼拝式のいのちは、「ことば」（記された神の言葉である聖書の朗読、語られる神の言葉としての説教、そして目に見える言葉としての聖餐の礼典）にあるのです。

しかも、それらは、教会じしんが、「こうすれば、伝道も教育も一番効果的になる、これで行こう」と考え抜いて、決めたことではありません。

せん。これは、言わば、神の方法であり、神の決定です。

神は、天と地と、目に見えるものと見えないもの、それら一切を御言葉によって創造されました。創世記は「『光あれ。』こうして、光があった」(1:3)から始まり、「神が言われた。そうなった」と繰り返します。読者は、神の言葉が発せられたら、そのまま出来事となるという、言葉の力を印象付けられて行きます。

そもそも聖書全巻が、主の言葉の威力を証しています。旧新約聖書の全歴史とは、つまるところ、神の言葉の成就の歴史に他なりません。こうして実に、信仰とは、神とその御言葉に信頼し服従すること、それ以上でもそれ以下でもないことが明らかにされてまいります。

さてしかし、被造物の中で、人間だけは、「人間よ、あれ」と、言わば一回の御声で造られたわけではありませんでした。人間は、地のちりで作られました。しかし、その後、神が、その鼻にいのちの息を吹き入れられたとき、「生きものとなった」と創世記第2章は告げています。つまり、他の被造物より時間がかけているのです。言わば、手塩にかけて、創造されたという意味なのでしょう。あるいは、人間が人間になるには、時間が必要だということでもあるのでしょう。

牛や馬は、生まれて1時間の内に、自分の足で立ち上がり、歩き始めます。いったい、人間の赤ちゃんほど、育ちに時間がかかる動物はいるのでしょうか。これは、体の成長に要する時間の問題のことだけではありません。

今、心（人格）の成長の問題として、思いを巡らして見ましょう。いったい、赤ちゃんが喋りはじめるには、どれほどの時間が必要でしょうか。どれほど、人の声を聴く必要があることでしょうか。

そこに大切な真理が秘められています。人間が人格として成長するためには、つまり、人間の教育には、多くの時間が必要であるということです。人格教育には、時間を節約する促成栽培は不可能なのです。

そこにすべて子育て、教育に携わる者に忍耐が求められる必然性があります。

何よりも、神の忍耐（ヘブライ12:7！）を思います。私どもこそ、この忍耐の恵みによって生かされ、聖化へと導かれているのです。

さて、このことを、なお深く考えるならば、このことにも、気づけるのではないのでしょうか。「誰でも、言葉をしゃべれる人は、必ず、誰かに愛され、誰かに優しくされたことがあるはず」ということです。

赤ちゃんは、肉親はもとより、たとい、施設

の職員方であっても、必ず、抱っこされ、見つめられ、名を呼ばれ、語りかけられることによって、母語を語り始められるようになります（聴覚障がい者は、文字によるのでしょうか……）。

つまり、人は、人に触れられ、愛され、言葉を掛けられてはじめて、人として育つことが出来るのです。それは、ミルクを与えてもらうことと同じように、人間のいのちの成長に不可欠のことです（マタイ4:4）。

さて、そうであれば、神は、人間の創造の際、神のいのちの息をアダムに吹き入れられたとき、そこでは、何が起こっていたのでしょうか。

そのために、復活の主イエスさまが、弟子たちに息を吹きかけられたときのことを、重ね合わせて、黙想してみましよう。

確かに、創造のときには、神のいのちの息が吹き入れられたとだけ記されています。しかし、ご復活された主イエスは、弟子たちに、息を吹きかけられました。それは、明らかに、アダムの創造を意識してなされ、また、聖霊降臨の出来事を先取りして、その意味と目的とを明らかにするためにもなされたはずです。「彼らに息を吹きかけて言われた」（ヨハネ20:22-23節）。ここでは、息だけでは終わっていません。息に言葉が伴ったのです。

神が、アダムを創造された時、神は、ご自身の胸に抱き、彼の目を見つめ、彼の名を呼び続け、愛の言葉を語り続けられたのではないだろうか。そう、思うのです。これは、聖書に記されていませんから、わたしの想像です。

少なくとも、私ども人間は、言葉を伴う愛、語りかける神の愛によってこそ、まことに「生きるもの」、本来の、本当の人間（人格）となりえる、この理解には、間違いありません。

それならどうして、このような空想を広げられるのでしょうか。それは、私どもが、現に今、ここで繰り返しこれを体験しているからです。

つまり、神の民の祈りの家である教会の中で、信仰の母なる教会の中で、キリストの臨在する礼拝式の中で、神が、私どもをしっかりと抱き、私どもに御顔を向け、愛のことば、いのちのことばを語り続けていくくださることを経験しているからです。また祈禱会や諸集会のたびに経験し、これを深めることが許されて来たからです。

だからこそ今、目に見えない神を信じ、どんなに目に見える確かなものよりはるかに確かなものとして神を認識できるのです。こんなにも主を愛し、知ることが許されているのです。

実に、聖書の神は、物言わぬ神ではありません。私どもに向かって、何度でも、愛を持って優しく語り続けてくださる、生ける神なのです。

実に、ことばによって、いのちは造り出され、愛の交わりは始まります。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」とヨハネによる福音書は告げます。イエス・キリストご自身が、ことばそのもの。つまり、神のいのちそのもの、又、愛そのものなのです。

そうであれば、そもそも、人間にとって言葉を学ぼうとするとき、何を第一にすべきなのか、何をこそ目指してなされるべきなのかは、明らかになるはずです。

それは、言葉そのものでいらっしゃる神ごじしんとその御言葉を理解するためです。人間のことばの第一の使い道とは、神との交わりのためです。人間が、言葉を用いるべき第一の相手は、人間ではなく神なのです。

私どもは、説教を聴くキリスト者であると同時に、子どもの教会の教師として、説教する務めをも与えられています。

それは、神の子たちを、神の言葉によって養い育てることであります。つまり、神御自身が神の民を教育し、養育する働き、神の働きに招かれ、召されているのです。私どもは既に、「神

の人間教育」への奉仕者として立たされているのです。

私どものまわりには、いよいよ、意味のない言葉、空しいことば、力のないことばが横行しています。おしゃべりやつぶやきが流行しています。

しかし、そもそも人間とは、神の語りかけに聴くことができる存在として造られたのです。同時に、神に語りかけることができる存在として造られたのです。ここにこそ、人間の人間たるゆえんがあるのです。人間が、本来の人間に立ち返る道が備えられているのです。

父と子と聖霊にいましたもう神は、私どもと全人格的な交わりを求めてくださいます。私どもは、父なる神からの「愛する子よ」との呼びかけに、聖霊に導かれ、主イエス・キリストによって、「愛する天のお父さま」とお応えします。さらに、御言葉（御心）を聴いて、自分のことば（意志）で応答し始めます。こうして、豊かな愛の交わりが育てられ、神の像としての私どもの本来の姿が取り戻されて行くのです。

ここに弊誌が、信仰教育の目的を、「自分の言葉で祈ることが出来る子に育てる」と主張してきた理由があります。何故なら、人間にとって祈るということは、当たり前のものであり、また必須のことでもあるからです。神の人間教育の目標、それを、祈ることができる人間として育てることと言えるでしょう。同時に、それこそ、私どもの教育の目標に他なりません。

今このときも、神の懷に抱かれ、やさしく名を呼ばれ、み言葉をもって育てられている私どもの幸いを思い、感謝と感動、感激を覚えます。

私どもに託された子らに、そしてすべての人々にこの幸いと喜びを届けるために、主よ、私どもの拙い奉仕を、豊かに用いてください。（「説教黙想」として……）

（名古屋岩の上伝道所宣教教師）

東仙台教会教会学校の紹介

吉永肇子（教会学校校長）

東仙台教会は、仙台の中心部から車で20分程東に位置する地域にあり、JR東北本線東仙台駅からは歩いて5分程です。

駅前からまっすぐ3分程歩くと、右の方に大きな十字架のある屋根が見えてきます。その十字架を目指して細い坂道を歩いていくと教会に着きます。



1. 子ども学生礼拝

東仙台教会では、10年ほど前から教会学校の礼拝を「子ども学生礼拝」として行うようになりました。礼拝の主な対象は、契約の子どもたちとミッションスクールに通っている学生たちです。

9時15分から9時45分まで行われる子ども学生礼拝は、立石彰牧師を中心に7名の教会学校教師が司会、説教、奏楽、受付、献金などの奉仕を分担して行います。

ほとんど休まないで毎週の礼拝に出席しているのは、3名の契約の子どもたちです（小学1年生1名、3年生2名）。とても小さな礼拝……と思われるかもしれませんが、毎週、ミッションスクールに通っている中学生や高校生たちが出席するので、礼拝全体の人数は20名前後に

なります。ただ、学期末の時期になると、50名前後の学生たちが集まることもあります。その時はちょっと緊張感のあるにぎやか(?)な礼拝になっています。子ども学生礼拝として礼拝を守り、毎週週報を発行するようになって数年たちますが、感謝なことに、昨年頃から学生が来ない主の日はほとんどありません。毎週学生の誰かが来てくれることを期待しながら、礼拝の準備をしています。

そのような中で、契約の子どもたちは、礼拝の週報や讃美歌を配ったり、献金を集めたり、説教の質問に答えたり、礼拝後の片付けを手伝ったりと小さな奉仕を一生懸命してくれています。

中学生、高校生になると教会から足が遠ざかる地域の子どもたち。クリスマスやキャンプに来ていた子どもたちも、中学生になると教会から足が遠ざかります。しかし、その中から、ミッションスクールに入り、再び教会の礼拝にくる学生も見られます。

徐々に教会に慣れ、リラックスしている学生や初めて保護者や小学生の弟妹と礼拝に出席する学生がいたり、学生たちの中でもだんだん知っている顔も増え、大人の礼拝やクリスマス礼拝などに導かれている学生たちがいることも感謝しています。

その中で、契約の子どもたちが、いつも新しい人たちと共にちょっと緊張感も覚えながら礼拝を守っています。毎週小さな伝道集会のような子ども学生礼拝。ミッションスクールで教えられている主の祈りは、太い声が響き（9割方男子なので）、讃美歌は契約の子どもたちのか

わいい声が響きます。毎週入れ替わる学生たちの中で、子どもたちは、しっかり守られ、成長していることを感謝しています。

子ども学生礼拝の後、子どもたちは分級の時間をもちます(9時45分頃から10時15分まで)。ゆったりとした雰囲気の中で、お祈りし、聖書の話の聴き、話し合い、制作やゲーム、畑作業などのびのびと笑ったり泣いたり楽しい時間を過ごします。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」。
(コヘレトの言葉12章1節)

2. 教会学校行事

2009年度の教会学校行事は、仙台市内合同の活動と東仙台教会独自の活動がありました。仙台市には改革派教会が六つあり、ピクニックやキャンプなどを合同で実施しています。これらの機会をとおして、契約の子どもたちは、他の教会の契約の子どもたちと一緒に過ごし、そこで信仰者同士の交わりを経験し、成長する機会が与えられています。



①3月29日、ピクニック(市内合同)

教会から車で30分程の加瀬沼公園というところに遊びに行きました。この時には、全体で30名の子どもたちが参加しました。東仙台教会の近所の子どもたちも約10名参加してくれました。

②6月27日、ピクニック

この日は、大きな湖(ダム)のある「みちのく湖畔公園」という所に出かけました。近所の子どもたちが集まり、全体で16名の子どもたちが参加しました。

③8月4~6日、サマーキャンプ(市内合同)

カトリック・ドミニコ修道会の施設「ドミニコの家」で市内合同のサマーキャンプを行いました。全体で50名(子ども24名)の参加でした。

この二泊三日のキャンプでは、青年のメンバーが多く参加し、キャンプの様々なプログラムを支えてくれます。参加した子どもたちにとっては、とても思い出深いキャンプになり、また新しい出会いとなります。



④9月12日、キャンプ報告&夕食会

サマーキャンプに参加した子どもたちを招待して、ゲームをした後にみんなで夕食を食べ、最後にキャンプの写真や映像を観ます。楽しかった夏キャンプを振り返りながら、秋の活動につなげていく大切な行事です。去年は42名の参加でした。

⑤10月11日、収穫感謝会とピクニック

このときには、10時30分の公同礼拝は子ども中心の礼拝です。子どもたちは、礼拝堂の一番前に座って礼拝を守ります。

礼拝の後は、教会の庭で焼き芋や焼き鳥などを教会員と一緒に食べます。そして、食後は子

どもたちは、公園へ。「県民の森」という大きな公園で、他の教会の子どもたちとも合流。子ども13名、東仙台の子どもは5名の参加でした。

⑥12月23日 子どもクリスマス礼拝

クリスマスには、地域の三つの小学校に、クリスマス集会のちらしを配布します。毎年参加する子どもたちもおり、友達を誘って教会に訪れます。去年は、近隣の教会の子どもたちも集まり、子どもだけ48名参加。

キャンドルサービスの後、人形劇やゲーム、ケーキ作りをして午後1時30分から4時30分まで楽しく過ごします。

クリスマスは、地域の子どもたち（乳幼児、小学生）が多く参加する礼拝。そしてクリスマスに参加した子どもたちが、キャンプやピクニックにも参加しています。

仙台市内の教会は、合同でピクニック、キャンプなど行っており、契約の子どもたちが自然に他の教会の子どもたちや青年たちとの交わりを持つ良い機会となっています。その中で、祈り、交わり、学ぶことは多く、子どもたちが、他の教会の子どもたちとの中で小学校、中学校、青年になるまで繋がりをもち続けながら成長していけますようにと祈っています。

3. 課題

教会学校活動では、毎週の礼拝奉仕者や行事の時の奉仕者などいろいろな形で、教会の方々が関わってくださいますが、課題も多々あります。

現在、教師が全員集まり、定期的に話し合い、祈り合い、学ぶ時はほとんどなく、いつも短い時間の中で話し合い活動を進めている現状です。十分な準備もできない時も多々あり、毎

回反省し、祈りながら勤めています。

2010年度の教会学校の課題は、

◎牧師、教会学校教師の働きが尚、整えられていくこと。働き手が与えられ、教師会が定期的にもたれ、教師が祈り学び合う場が与えられますように。

◎契約の子どもとその家族への伝道、信仰生活が導かれること。教会での交わり、家族伝道が整えられますように。

◎地域の小学生、中学生、高校生への伝道が継続され、教会に継続してくる人が与えられること。子ども学生礼拝後の交わりができますように。

◎市内教会での活動が一層祝福されること。契約の子どもたち同士の交わりが祝福されますように。

東仙台教会は、小さな教会であり、契約の子どもたちも少ない教会ですが、神様がこの教会に地域の子どもたち、学生たちを招いてくださっていること、私たちの知らない、気づかないうちにたくさんの人々を教会に送り、契約の子どもたちを守り、恵みと祝福を沢山与えてくださっていることに感謝しています。

神様の声に耳を傾けつつ、開かれた、優しい教会になれますように、旅人をもてなすように、教会を訪れる人、出会う人に喜びの福音をもたらすことができますように祈っております。

「子どもたちをわたしのもとへ来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない」。

(マタイ福音書19章14節)

聖書は歴史をどう語るか (第2回)

牧野信成 (神戸改革派神学校教授)

聖書に記されたイスラエルの歴史を考える場合には、一般的な世界史と救済史の両面から考えてみる必要があります。

まず世界史の中にイスラエルを特定しようとするれば、イスラエルが民族としてどこから始まったかは難しい問題です。歴史家たちの考えでは紀元前13世紀～12世紀頃にパレスチナで幾つかの部族が集合してイスラエル民族が誕生します。イスラエル12部族による連合体は、古代ギリシャの宗教都市連合との比較から「アンフィクテオニー」と呼ばれたこともありました。そして、世界史へのイスラエルの登場がより明瞭になるのは王国が成立してからです。資料は聖書に限定されますが、紀元11世紀初頭にペリシテ人の脅威にさらされたイスラエルは、サウル王を擁立して王制を導入します。このイスラエル王国はダビデ・ソロモンの下でカナン統一を果した後、南北二つの王国へ分裂して北の王国が「イスラエル」を名乗るようになり、それが国家の名称として定着します。「イスラエル」という名称が世界史の中で明確な実体を取るのには、まずはこの北王国の出現によります。

聖書以外の資料によってイスラエル王国が確認されるようになるのは紀元前9世紀頃からです。有名なものに、ルーブル博物館に所蔵されている「メシャ碑文 (モアブ碑文)」があります。これはイスラエルに隣接するヨルダン川東岸のモアブから出土した碑文で、モアブの王メシャが記させた王の事跡を記したものです。前850年ごろのものとして推定されますが、そこには「オムリ」「アハブ」などイスラエル王の名が見出されます。

世界史としてイスラエルの歴史を調査する場合は、こうして聖書と考古学的な資料を比較しながら事実関係を検討します。聖書外の資料といっても数が限られていますから、それだけではイスラエル史を十分に再構築することは不可能です。歴史家にとっても、聖書そのものが第一級の歴史的資料です。

イスラエル王国は紀元前722年にアッシリアによって解体され、それ以降「イスラエル」の実体は南部のユダ王国に移行・吸収されます。そのユダ王国も紀元前587年にはバビロニアによって滅ぼされることになり、国家としてのイスラエルはそれ以降 (中間時代の一時期を除いて)、20世紀に至るまで歴史の舞台に上ることはありません。

旧約聖書の時代に、国家が消滅した後も「イスラエル」という民族の概念は存続しました。「イスラエル」は歴史的であると同時に、「神に選ばれた民」という神学的な概念を帯びた民族名となり、その後、ユダヤ教・キリスト教に分岐した形で歴史の中で継承されます。本来それは、土地との結びつきが強いものでしたが、ユダヤ人が世界に離散していったために、土地も相対的に理念化するようになりました。キリスト教にとって「イスラエル」は教会の暗喩となり、「エルサレム」は来るべき終末の都、もしくは天国を指すようになりました。

* * *

旧約聖書そのものが語る神の救いの歴史 (救済史) には、イスラエル民族の自己理解に欠かせない重要な出来事が、幾つかの段階を経て記されます。現代の歴史家たちの仕事は別にし

て、聖書そのものが語るイスラエル民族の歴史は創世記12章にあるアブラハムの選びを発端としています。創世記に物語られているアブラハム・イサク・ヤコブの歩みは「族長史」とも呼ばれますが、この時代にイスラエルは「世界を祝福する」という神の約束を担った家族となります。結末はヤコブの12人の子らがエジプトに結集して、神がヨセフを通してエジプトを救い、イスラエルの家族に平和を与えた、と結ばれます。

「五書（律法）」の中心にある出来事は「出エジプト」です。エジプトで奴隷となっていたイスラエルが、神の僕モーセの出現によって自由へと解放された、というイスラエルの救済の原体験がそこにあります。ただ、忘れてはならないのは、出エジプトの出来事というのは、エジプトを出て海を渡っておしまいでなくて、そこからシナイ山に辿り着いて神の掟である十戒をいただき、神と契約を結んで一つの民族が出現する、というところまで来て一区切りつきます。ですから、「出エジプト」は単なる「脱出」ではなくて、民族形成の一段階を示します。それに続く「荒野の四十年」と、乳と蜜の流れる地、カナンの土地取得という出来事もイスラエルの原体験として重要です。

『ヨシュア記』以降の歴史は、イスラエル王国がカナン、今日のパレスチナに成立する経過と、その衰亡とを語ります。その時に、イスラエルの歴史を記した歴史家や預言者たちは、王国の衰亡の歴史を、律法に記された民族の原体験と重ね合わせて記します。例えば、バビロン捕囚という出来事が起こる。これは南ユダ王国がバビロニア帝国によって滅ぼされた時の事件です。それは、神がそこにおられると約束されたエルサレムの都からユダヤ人たちが連れ去られることですから、罪を犯したアダムとエバが楽園を追放された原初の出来事の再現になります。また、今度はバビロンでの捕囚という状況は、エジプトでの奴隷時代と比較されるもの

で、ペルシャ時代に捕囚から解放が果された時は、預言者たちがそれを第二の出エジプトとして語りました（イザヤ書40章以下参照）。また、エルサレム＝カナンへの帰還に向かうユダヤ人たちは、ヨシュアに率いられた民がアブラハムに約束された土地へ入っていく「カナン入植」を遙か後の時代に地で経験することにもなりました。

そのように、イスラエルの救済史は、トーラーの原体験を中心にして、イスラエル民族の形成と再形成を段階を追いながら記している、と言えます。このことを念頭に旧約聖書を読むと、各書物が深い関連をもって記されていることが分かりますし、その背景にあるメッセージが明瞭になってきます。

旧約聖書は多様な文学形態の書物によるアンソロジーです。けれども、以上素描したような歴史的な枠組みが全体にはめ込まれています。ちなみに、ユダヤ教の聖書とキリスト教の旧約聖書ではその正典的枠組みが若干違います。しかし、どちらも、旧約聖書は全体として歴史を語ります。

* * *

聖書は世界の古典であって、確かに人類のものと言えないこともありません。ですが、キリスト者がユダヤ人と共に信じているのは、この書物は神が人間に与えた言葉であることです。信じて読むのと、信じないで読むのでは聖書の意味が全く異なります。この書物は、第一義的に、聖書を神の言葉と信じた者たちが神に従うための書物であり、もともとそういうものとして一冊に纏められました。印刷術が発明されて以来、聖書は誰でも手にとって読める書物となりました。そして、誰でも読んで理解するように招かれているとさえ言えます。しかし、信仰なくしてこれを読んでも、本来の目的に沿った理解は生まれません。

聖書は神の教えとして歴史を語ります。また、

それは人間が綴ったものに違いありません。しかも、イスラエルという特殊な民族の形成史を語ります。旧約聖書の歴史記述は、いわば人間が神に向って信仰の格闘をしながら綴られていった貴重な記録です。そして、教会はそこに神の「啓示」を見てとります。こうして、聖書の歴史は神を語ると同時に、一民族の眼鏡を通して人間を語ります。歴史を生きた人間のありのままの姿がそこに描かれます。

救済の歴史は共同体の記憶として語り継がれました。聖書の物語はファンタジーではありませんが、今日の世界史のような、科学的に正確な事物の羅列でもありません。しかし、それは確かに人間によって経験された滅びと再生の記憶です。歴史を通じてイスラエルは神と向き合い、人間の愚かさ、世界の脆さを経験しました。そして、彼らはそれをそのまま書き留める英知を授けられたのです。信仰者はそこに「靈感」を認めます。神に直面しながら罪の歴史を隠す

ことはできません。何故なら、神ご自身が歴史の主催者だからです。ですから、罪を隠し通すことで救われることもありえません。神の御前に生きざるを得なかったイスラエルは、そこから歴史を記す英知を与えられます。歴史は神と人間を語ります。そこではやはり、救済の歴史は人間の創作ではなく神の啓示と言わざるを得ません。だから、何にも増して、聖書は生きた言葉として読まれます。神がそこから語りかける言葉がそこにあります。

私たちは歴史をどう振り返るでしょうか。旧約聖書のイスラエルが示すように、ありのままの歴史を振り返って、自分自身を知ることが、将来を切り開くのではないか。目先の「歴史観」で贖われる未来はありません。また聖書は、人間の誇りを回復するのは神であると語ります。神を失う人間はそうした知恵を失うとも聖書は語ります。(了)



信仰の継承 (第2回)

教会学校教師の多くは契約の親でもあり、日夜、我が子の信仰告白を祈り求めつつ奉仕を重ねておられることと思います。時に焦り、不安になることもあるでしょう。その時こそ、神の約束を明るく信じ、熱心に祈り求めて参りましょう。「信仰の継承」と題して、第二回は子の立場から。子どもたちの戦いの声に耳を傾けましょう。

信仰の継承について

梶浦和城

私の場合、信仰告白をすることに、ほとんど何も抵抗はありませんでした。当然のこととして、信仰告白をしたように思います。疑問があったとすれば、なぜ改めて信仰告白なるものをする必要があるのか、という思いの方に比重があったかもしれません。それほどイエス様を信じて、教会に通うことは、体に染みこんでおりました。当時は当たり前のように考えていたのですが、しかしそこには親と教会の方々の多くの祈りとサポートがあったんだなあ、今更ながら思います。この場を借りてお一人おひとりに感謝したい気持ちでいっぱいです。

私の母教会は津島教会です。私の世代は、第二次ベビーブームに当たりますし、キリスト教ブームみたいのもありましたから、CSにも近所の子どもたちがたくさん来ていた記憶があります。クリスマスにした劇や出し物も、とても楽しいものでした。アルバムを見て、ああ、こんなだったなあと思出すこともあります。たぶんその時代は、青年会の黄金時代だったと思うのですが、青年の方々も多くおられて、いろいろな活動をしておられたので、小さい私にとっては憧れの的でした。僕も将来、こんな風になるんだろうなあという漠然とした期待感を持っていたように思います。そういう周りの時代なり環境なりを通して、神様が知らず知らずの内に、私の信仰を育ててくださいました。

クリスチャンとして生きる、という自分の信仰の歩みについて言えば、小学校時代のこんな出来事を思い出します。確か小学4年生頃だったと思いますが、ちょうど社会の授業でキリストンの話があったのででしょう。私がクリスチャンであることを知っていた友だちが、体育の授業の始まる前だったかに、地面に踏み絵のようなものを書いて、「これ踏める？」と冗談交じりに聞いてきたことが、記憶に残っています。

中学校時代は、思春期ということもあって、部活のことで大変悩みました。部活(剣道)の試合で日曜日に行かなければならない時は、どうしたらよいか苦しみました。部活の友だちは、「試合会場の近くにも教会があるんだから、その礼拝に出ればいいじゃない」と言ったものですが、当時の私にとっては考えられないことでした。そんなこんなで剣道部は辞めて、美術部に転部することになりました(あ、絵がうまくなった訳ではないです(笑))。

同じ中学時代の話で、クラスの友だちを教会に誘った時の面白いエピソードがあります。教会にいざ入ろうとした時、友だちが、「ねえ、どこから入るの？」と言うので、「そんなの玄関からに決まってるじゃん」と思いながら、「こっちだよ」と指さすと、彼は言うのです、「だって、『狭い門から入りなさい』って書いてあるから」と。そうなのです、確かに玄関の看板に、この御言葉が掲げてありました。でも、まさかそんな風に読まれようとは思っていなかったもので、驚きと共に、新鮮な思いもいた

しました。今、改めて牧師の立場から考えてみると、看板の大事さを思わせる大切なエピソードになっています。

高校に入る前の春休みに、初めて中会の行事に参加しました。雀のお宿で開催された連合高校生会の春の修養会に出て、そこからどンドンと中会・大会の活動に参加するようになりました。そこで出会っていったクリスチャンの友だちが、後に次々と献身して、今同じ牧師として、あるいは牧師夫人として主の業に仕えていることを思うと、本当に神様の不思議な御業をほめたたえずにはおれません。でも、同時に縁遠くなってしまった友人もいて、今どうしてるかなあと思いながら、また再び会えるのを、主にあって期待しているところです。

さて、私の信仰の歩みは、大学に入るまでぐらいいは順調でした。母が心の病で入退院を繰り返すということはあったものの、自分の信仰自体が揺らぐということはありませんでした。ですから、私自身について言えば、信仰についての悩みや葛藤は、信仰告白をしてからのほうが遙かに大きいものでありました。

大学で聖書研究会やKGGKの活動に加わるようになって、いろんな教派のクリスチャンと出会ったことは、大きな感謝であると共に、やはり初めは私の信仰に衝撃をもたらしました。様々な点で理解や考え方に違いがあるのを知って、戸惑ったものです。カトリックの方もおられましたから、随分と信仰の幅が広がられました。超教派の集會に参加することも何度かあり、これまで体験してきたものと全然肌色の違う礼拝のあり方に、驚きを感じつつも、魅力的なものも感じました。

大学ではまた、仏教の方々と対話する機会が与えられました。親鸞の浄土真宗に属する若者の集まりだったのですが、とにかく福音を伝えることの難しさを、と言うより、自分の言葉の貧しさを覚えたものです。でも、その時の経験は貴重なものでした。その後の私の信仰に少な

からぬ影響を及ぼしたと思います。

大学生活の後半、いろいろ事情があって、家を出ました。家を出ただけでなく、教会も離れました。自分でもまさか自分がそんなことをするようになるとは夢にも思っていませんでしたが、とにかく現実には家と教会を離れたのです。いわゆる遅い反抗期のようなもので、自分の信仰を客観視し、独り立ちをするためには、必要な作業だったのかもしれませんが。いつかは、キリスト教信仰を捨てようと思ったときもありました。そんな時にも、親や教会の多くの人々の祈りが私を支えてくれました。家や教会を離れ、一度は信仰を捨てようと思った私が、放蕩息子のように戻り、また妻との出会いを通して牧師になったのですから、主のご計画と導きは本当に人間の思いを遙かに超えたものだと思います。自分のことでありながら、何か自分のことではないような、そういう壮大な神様のご計画を感じます。

以上、まことに素描程度のことしか記すことができませんでしたが、信仰を受け継いだ側の人間として、主の恵みと導きを証しさせていただきました。貴重な機会を与えてくださって、ありがとうございました。親から受け継いだ信仰を、神様が実に計り知れない仕方でも、祝福し、広げてくださったのだなど、感慨深く思います。今、6年間の祈りが答えられて、子どもを授かり、今度は信仰を継承させる側に立ってみると、何か不思議な感じがいたします。主の御手によって与えられた子どもが、これからどんな人生を歩むのか、全く分かりませんが、一つ確かだと思えることは、私が親や教会の方々、また人生で出会った多くの人たちを通して、主の莫大な恵みに与ってきたように、この子も主の恵みに包まれて生きて行くであろう、ということです。今現実にそうですし、これからはっきりとそうであると固く信じています。

(豊明教会牧師)

信仰の継承について

草野 誠

私事ですが、先日息子の幼児洗礼式がありました。幸い、杉山明引退教師に司式をお願いできましたので、純粹に親として立つことが許されました。また、教会員の皆さまが自分のことのように喜んでくださる姿を見て、このような幸せの中に自分も育ってきたのだとあらためて実感することができました。かつてお世話になった教会員お一人お一人の顔を思い出しつつ、また恵那教会の会員のお顔を見ながら、たくさん受けた恵みの中から、いくつかのエピソードをご紹介します、これからも信仰が、御霊によって教会のなかで受け継がれていきますよう、心から願い、祈っていきます。

幼少期の記憶はあまりありませんが、古い写真を見ますと、どの写真も安心して教会員に囲まれて写っており、教会で愛情をいっぱい与えられて育ったことが分かります。また、母が牧師婦人に洋裁を習っていたことから、平日でも牧師館にお邪魔し、諏訪武臣牧師一家にかわいがっていただきました。今になって見ますと、そういった経験が、教会に対する信頼、教会員に対する安心と愛情として、今の牧師として教会に仕える基礎になっているように思います。

小学生時代の思い出はたくさんありますが、今一番記憶に残る楽しい思い出が、教会堂を家族で掃除したことです。母が掃除当番の時、私と二人の妹も一緒に行って掃除を手伝いました。誰もいない礼拝堂はがらんとしていて、いつもより広く重く感じました。そこを順番に掃いたり拭いたりしていくと、会堂全体が少しずつ趣を変えていくのですね。ちょうどアイロンがかかった父親の仕事着のように、明日の日曜日の礼拝を待つように整えられていくのです。母が花を生けて完成ですが、その時には日曜日にみんなが来るのが待ち遠しくなっていました。ひと月かふた月に一回のことでしたが、礼

拝のために奉仕する喜びを子どもなりに誇らしく感じていたことを今でも思い出します。ただし、それはいつもではなく、時にはめんどくさいと思って、いやいやしていたこともあったことは特に記録しておきます。でも今思い出すのは、そのときの清々しい気持ちだけです。

小学生時代にはこの世の誘惑もたくさんありました。その中でも鮮明に記憶にあるのが、近くのお寺であった餅まきです。もともとお寺が近くにあって、祭りも盛んな土地でしたが、祭りのあるときは他の教会員のお宅を訪ねるなどして、子どもの目にふれないように親同士が配慮していました。ですから4、5年生になって下校時に友だちから、「今日、餅巻きあるんやっ」と言われたときも、「それ、なに」と問い返しました。「お菓子がただでもらえるんや、知らんの？」とわざわざ教えてくれたので、私はそんなラッキーなことがあるのなら、行かないわけにはいかないと思い、彼と集合時間まで約束して、ランドセルを置きに家に帰りました。

家に帰るなり、母親に「今日、餅巻きあるんやっ、ただでお菓子がもらえるから、〇〇君と行ってくる」。そう言って行こうとすると、母から呼び止められました。「餅まきって、何か知っているの?」「ただでお菓子がもらえるんやろ」。そう言うと、「ただのお菓子ではなくて、仏さんにお供えしたお菓子を分け与える意味があって、みんなに配るのよ。偶像に備えられたお菓子が欲しい?それでも行きたい?」と、そう聞かれました。餅まきの意味など考えていなかった私は、考えがまとまりませんでした。とりあえず約束したので行きました。

お寺に行くと、そこにはお年寄りから子どもまでたくさんの方がいました。友だちが、「最初はつまらんから、後ろのほうにいたほうがいいよ」と言うので、僕たちは後ろから人の群れを見ていました。こんなにたくさんの方がお寺に来るなんて信仰深い人たちなのだな、と思っていました。私はその間も、母から言われたこ

とを自問していました。「偶像に備えたお菓子を自分は欲しいのか?」。やがて太鼓の音やお坊さんらしき人の声がしたあと、友だちが「それ、始まるよ」と言うので後について人ごみに入っていました。お寺の屋根から勢いよく菓子袋がまかれると、周りの大人たちは菓子袋の方向に合わせて、左右にゆれます。みんな上を見ているから、小さな私たちはあやうくつぶされそうです。友だちは慣れてるようで、下に落ちた菓子袋をすばやくつかんでいました。私も同じようにしようと、大人の体重を我慢しながら落ちたのを拾おうとすると、おばあさんが奪い取るようにつかんでいきました。普段は人のよさそうなおばあさんのそのような姿を見た私は、もうお菓子なんかどうでもよくなって、人込みから出てきました。そしてその後はただじっと、降ってくる菓子袋に翻弄される人たちを見ていました。「この人たち、本当にお菓子が欲しいのやな」。そう思う自分は、もう欲しくもなんともなくなっていました。やがて、友だちが5袋ほど抱えて出てくると、1袋もらって帰りました。帰ってから、母に「どうやった?」と聞かれたので、「もう、行かない」とだけ答えました。そして部屋に入って、机の上に置いたお菓子を見ながら、偶像に備えられたものの意味を、人々の群れに見たような気がしました。

それ以来、宗教行事に誘われたり、中学では部活動で神社にお参りに行くことが当然視されたりしましたが、私は、自分はしないし、した

くないと言えるようになっていました。

エピソードの紹介が長くなってしまいました。が、信仰の継承者ということと言えますと、このような思いが与えられたことが信仰の継承者の最も大きな恵みであると思います。つまり良いことと悪いことを自分で判断する心、神さまに喜ばれることを好み、喜ばれないことを嫌う心、そういう心が聖霊によって育まれてきたことです。それは単に親のしつけの事柄ではなく、まさに聖霊の御業なのだと思います。そのことは礼拝出席についても言えるでしょう。親に無理やりではなく、自分の心に正直に行動し、聖霊によって育まれた自分の意志で礼拝に出席する。もちろん時には間違った選択をすることもあるでしょう。しかしそれも、間違ったことを聖霊によって気づかされたときに、勇気を持って変えることができる心が与えられる。そのように、聖霊によって信仰の継承者とされてきたことを、心から主に感謝します。

しかしこのことは親になった今、とても大変なことだと思いつくづきます。そのとき両親は、忍耐と祈りの日々であったのだとあらためて気づかされています。しかしそのとき、家族だけでなく、教会の祈りによって家族が支えられてきたことを思います。今、牧師とされて、信仰の継承が教会の事柄として、親とともに祈り、悩み、忍んでいきたいと心から願っています。

(恵那教会牧師)



信仰の継承について

町野義也

主の名をほめたたえます。

私自身の信仰の歩みと、親からの信仰の継承についての証をするように、とのことでした。恵みをおぼえて証を申し上げます。

私の両親は、改革派教会の別々の教会の会員であり、私はその家庭に生まれ育ち、今に至ります。二世のキリスト者であります。兄弟は姉と私の二人です。私のふるさは岐阜の田舎町で、地域内の住民の結びつきは強く、互助の精神が培われた温かい風土と人柄が特色です。祖父が始めた商売の家に長男として生まれた父は、確か20歳の頃に自ら教会の門をたたき入信し、その後同じ改革派教会の会員であった母と結婚しました。母は奈良県出身で、見ず知らずの土地にやってきました。自分で覚えている最も古い記憶には、当時家族が営んでいた雑貨店のお客さんや、従業員の方に抱かれて世話をしてもらったこと、レジの前の台に座って、外や壁にかけられている時計を眺めていたことが思い出されます。私が幼い頃にはまだ商売が大変忙しく、今振り返りますと両親とも大変な苦勞をして、勤勞・子育てに追われる毎日だったのではないかと思います。家族で出かけたりした記憶もそれほど多くはありません。ですので、そういう記憶は鮮明に残っています。

さて、教会生活については、父も母も、言葉で教会に行くよう強制したりすることはなく、ただ日曜日になりますと、姉や私を連れ、当然のように教会に行きます。まだ幼いうちは何の疑いも持たずについて行きますが、しかし段々成長し保育園・小学校となりますと種々の疑問を抱くようになります。例えば地域の神社等で行われる祭のことで、私のふるさは先述したように田舎ですので、地域の行事は神社仏閣と深い関わりを持っており、例えば子ども神輿を子供会で担う、町内や区内で神社の維持管理

を共同で行い費用を集める等、地域に暮らしていく上ではどうしても信仰の戦いがあります。地域の中で一人前として認められ、きちんと周りとの関わりを持とうとまじめに考え、行うほど、その戦いは苛烈なものとなります。小さい子どもにとってそれを理解するのは難しく、私は、何故周りの友だちがはっぴを着て楽しそうに神輿を担いでまわっているその仲間に入れないのかと、父や母に泣いて訴えたこともあったように思います。しかしそのような時には、父も母も頑として譲らず、姉や私を教会へと導いてくれました。信仰の戦いを戦う姿を、子である私たちに示してくれました。また教会は、自分にとって二つ目の家のようなものでした。多くの親や、おじいちゃんおばあちゃんがいるような、安心できるような感覚が今でもあります。生まれるときから、その前から教会に導かれることの大きな幸いを思います。

もう少し大きくなり思春期を迎え、信仰や教会生活、また両親への反抗という別の問題が出てきました。姉はだんだんと教会生活から離れて行きました（今でも信仰の種は残っているようです）。幸いなことに私自身は、教会において牧師のご子息との出会いをはじめ、高校生会、学生会、青年会と、主の不思議な導きによって教会と離れること無く今まで導かれました。信仰告白は高校二年の時です。信仰告白式をした際、父も母も確か泣いていました。それまであまり、口やかましく信仰のことを言われたことも無かったのですが、自分の信仰告白を、二人がそれほど喜んでしたことにとっても驚いた記憶があります。今ではその気持ちが少しは理解できる気がしています。その後キリスト教系大学に進学し、他教派の友人を得ることも出来ました。

わたくしはどちらかと言えば内向的な性格ですので、いじめる、いじめられるといったトラブルに遭ったり、種々の要因によって落ち込む時が何度もありました。父も母も、そのような

時には、あまり多くは語りませんが、その信仰と、励ましとそしておそらく祈りとは、自分にとって大きな助けとなりました。

その後、大きな恵みとして同じ改革派教会の会員である妻と結婚し、引き続き教会につながることをゆるされました。妻がキリスト者であることは、信仰弱き私にとって大変な支えとなっています。そして現在では我が家には、4歳になった娘と、2歳半になる娘二人がいます。出来る限り礼拝を守るよう心がけ、家族で出かけます。二人とも生まれた年に幼児洗礼をいただくことができました。感謝です。子どもたちは教会学校に自ら喜んで行き、暗唱聖句も一生懸命に覚えて、親の私たちが驚くような長文を暗唱しています。娘たちの純粋な信仰は、子どもから成人になっていく過程でいろいろなところを通してきた自分にとっては、眩しく映り、日々教えられる思いです。子どもたちの様でなければ天の国に入れたい、と仰った主のことばを想います。自分自身は、仕事上や地域の中での暮らしにおいて、多くの誘惑や矛盾、多忙による疲れなど、日々信仰の戦いがあります。多

くの兄弟姉妹が同じ労苦や困難を覚えておられるのではないかと思います。

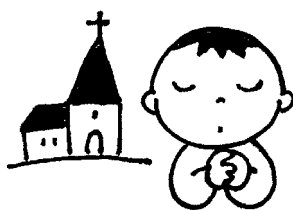
一体、自分が子どもたちにどのような信仰を伝えていけるのかを想う時、それは私にとって、父と母がその身をもって示した「教会とその主に仕える姿」だと思います。特に父は、いわば「我が国籍は天にあり」を地で往くような教会生活、信仰生活を送って来ました。私が父から受けた最大の信仰継承です。私にはそれと同じことが出来ていません。出来るかどうかの自信もありません。あるのは自らの力でなく、ただ主の恵みと感謝、主への信頼、安心であって、それを芯に持って毎日の生活をしていくことが、信仰の継承につながるのではないかと思います。

子どもたちの成長につれ、自分が幼かったころからの歩み、そこにあった主の恵みと導き、おそらく両親が感じていた、わが子の信仰が導かれることへの感謝、喜びをたどっていく、そのことを期待し信じて、祈っていきたいと思います。

主に感謝をささげます。

栄光在主。

(恵那教会執事)



コラム 「ひとりにかける」—教師のビジョン—

筆者の子どもの教会は、つい数年前まで、地域の子らで溢れる状況が続きました。しかし今、契約の子中心の営みとなってしまいました。教案誌の責任を担うひとりとしても大きな責任を覚え、痛みを伴う祈りを捧げています。

しかし、このときこそしっかり見えてくる真理もあります。それは、人間（人格）教育、信仰教育の業とは、徹底して「ひとり」へと集中しなければならないという真理です。

たしかに福音伝道の方法は、いくつもあります。すぐに思いつくのは、特別伝道集会かもしれません。コンサート伝道、講演会、大ホールなどで大伝道集会を行うこともあるでしょう。また、マスメディアによる伝道もあります。中部中会も西部中会もまた東部、東関東を中心に多くの説教者が参加して担われているCRCメディアミニストリーも「ラジオ伝道」を行っています。

しかし、それでも、人が洗礼入会へと至るためには、牧師と膝を突き合わせるようにしての学び（霊的対話）を経ることが必須であると思います。何故なら、福音は人格的真理だからです。したがって、一対一の対話が求められるのです。わたしも、洗礼入会式の前後1年近く、マンツーマンでの学びの時を設けています。

さて、ヨハネによる福音書第4章には、主イエスの「個人伝道」（霊的対話）の実例が記されています。伝道相手は、サマリアの女性、ただ一人です。しかもその名は、聖書に記されていません。しかし、この女性は、決

して大げさではなく、歴史の変革者となりました。彼女は、主イエスをメシアとして信じたことによって、主イエスからいのちの水を注がれ、自分の内に救いの喜び、驚きとが泉となって湧きあがり、抑えることができなくなります。わざわざ人々の目を避けて井戸水を汲みに来た彼女が、今、大切な水がめを置いて、人々の真ん中に出向いて、キリスト・イエスを紹介するのです。サマリア人の多くが、彼女のこの伝道によって、ユダヤ人イエスを信じることとなりました。まさに、サマリアの歴史が動き、変わったのです。やがて、キリスト教伝道の足場をつくることにつながったはずです。つまり、ひとりの人が、その魂のもっとも深い部分に主イエス・キリストを迎え入れるとき、これほどまでの変容が起こるという実例です。彼女は、新しく創造され、そればかりか、そこでまさに歴史をつくりかえるような事件すら起こるのです。聖書と教会史には、そのような実例に溢れています。

あなたのクラスには、もしかするとたったひとりの子「しか」いないかもしれません……。けれども、そのひとりの子の最も深いところに福音を、生ける主イエスを届けることに励むとき、礼拝堂の隅で、小さな教室で、驚くべき変容（救いの御業）が起こり、後の歴史を変革するような大事件となるかもしれません。このようなビジョンをもって、毎週の準備、主の日の信仰教育に取り組むことができたなら、実に幸いです。（相馬伸郎）

副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

● 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを禱にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満9年となり、第39号まで発行して参りました。中部中会では8割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈背景と文脈〉

贖いは救済史の大きなテーマのひとつであるが、出エジプト記にはそれに関する出来事が記されている。

主はご自身の民をエジプト人の奴隷の身分から贖うためにモーセを召された。これはアブラハムになされた約束の成就であった（創世記15:13-14）。主は十の災いをもってエジプト人に審判をくだされたが、最後の災いとして、エジプト人のすべての初子を撃たれた。それによって、王ファラオはイスラエル人がエジプトを去ることを許可した（12:29-32）。過越^{すきこし}（12章）の出来事はイエス・キリストによる贖いを指し示すものとして重要な意味を持つ。それに続く葦の海の奇跡（14章）は、イスラエルの民によって記憶され続けるべき歴史的出来事として、詩編や預言書などで、繰り返し言及されている。これにより、イスラエルの民はエジプト人の支配から完全に解放されたのである。

〈ファラオの心変わりと追跡〉（14:1-12）

イスラエルの人々はモーセに導かれてラメセスから出発した。このとき壮年の男子だけで60万人いた（12:37）。主は、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らを導かれた（13:21）。主の大きい御手に導かれてエジプトを出発した彼らに待ち受けていたのは、大きな試練だった。

主は指導者モーセに、「バアル・ツェホンの前に、それに面して、海辺に宿営する」（2節）よう民に命じなさい、と言われた（詳細な場所に関してはわかっていない）。それには主の目的があった。主はエジプト人に対する最後の決定的な審判を下そうとされていたのである。

イスラエルの民がエジプトを去るのを許可したファラオは、彼らの逃亡について聞くと、心変わりをした。それはイスラエル人がエジプト人の奴隷として有益な存在だったからである。ファラオは自ら軍勢を率い、イスラエル人のあとを追った。

強大な軍事力をもって、再び彼らを奴隷としようとした。しかしこのことが主のご計画のなかにあったことは、次から明らかである。「わたしはファラオの心をかたくなにし、彼らの後を追わせる。しかし、わたしはファラオとその全軍を破って栄光を現すので、エジプト人は、わたしが主であることを知る」（4節）。

ファラオの軍勢がイスラエル人に追いついたとき、彼らは非常に恐れた。前は葦の海、後ろはエジプト軍という絶体絶命の状況のなかで、イスラエル人は、主がエジプトの地で彼らのためになされた数々の不思議なみわざを忘れ、モーセを責めた（11-12）。

〈イスラエルの民のために戦われた主〉（14:13-31）

そのとき、モーセは民に答えた。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。……主があなたたちのために戦われる。あなたがたは静かにしていなさい」（13-14）。

主ご自身が彼らのために戦われるので、彼らがなすべきことは、主に信頼することであった。前は海、後ろはエジプト人という絶体絶命の状況でも、全能の神はご自身の方法を持っておられる。モーセが杖を持ち、その手を海に向かって差し伸べたとき、奇跡は起きた。主は激しい東風をもって海を押し返されたので、水は分かれ、海は乾いた地が変わった。この出来事を単なる自然現象と考える学者もいるが、海の水を押し返すだけの強烈な風が吹いている中をイスラエル人が渡ることは不可能である。たとえ自然現象を用いられたとしても、それを支配されているのは主ご自身である。エジプト人が後を追って海のなかに入ったとき、海の水は元に戻り、ファラオの全軍は全滅した。

主はイスラエルの民のために自ら戦われ、栄光を現された。主は、主権者としてご自身の民のために戦ってくださる生ける全能の神である。

（後藤公子）

テキスト 出エジプト記 14章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11,13,41,42

〔単元のねらい〕

この出来事をおして、主なる神は、イスラエルの民に、勝利の神としてご自身をお示しになった。そして、イスラエルの民からの信頼を勝ち取ろうとされたのである。ここには、神をなかなか信頼することのできないわたしたち人間に対する憐れみ深い取り扱いがある。参照カテキズムには、十戒の序文の問答を挙げた。過越のみわざも不可欠であるが、この出来事をおして、主なる神はイスラエルの民をご自分のものとされたのである。

「神さまの勝利を見よ」

前回、イスラエルの民がエジプトから脱出したところまで学びました。エジプトの全地に悲しみと苦しみの叫び声が起こり、「イスラエルの人たちがこのままエジプトにいと、かえって災いばかり起きて、エジプトは滅びてしまう」と思われるようになって、ファラオは、イスラエルの民がエジプトを去ることを許しました。イスラエルの民は、追い立てられるようにして、エジプトから脱出しました。

さて、そのイスラエルの民は、エジプトから脱出して、アブラハム、ヤコブ、ヨセフのふるさどであるカナンを目指します。けれども、主なる神さまは、イスラエルの民をまっすぐにカナンへと導かれるのではありませんでした。シナイ半島の荒れ野の方向に向かうのかと思えば、地中海近くの湖や沼地が広がるところに導かれて、イスラエルの人たちは、自分たちはいったいどこに向かうのだろうかと思つたかもしれません。先祖の住んでいた場所、わたしたちのふるさどであるカナンを目指すのではないのか、けれども、右に行ったり左に行ったり、いったいこの先どこへ向かうのかと思つたでしょう。イスラエルの人たちは、エジプトで奴隷として生きてきましたから、エジプトの外のことはまるで分かりません。モーセはエジプトを離れてミディアンの荒れ野で生活したこともあったので、モーセなら荒れ野の道が分かるはずだと思つていたのですが、本当に

モーセに従って行って大丈夫だろうか。そんなふうにも思い始めたかもしれません。

実のところ、イスラエルの民を導いていたのは、モーセではなく、主なる神さまでした。モーセは、主なる神さまが命じられることに従って、イスラエルの民を導いていました。そのことを教えるために、神さまは、昼は雲の柱、夜には火の柱で照らし出して、イスラエルの民を導かれました。そして、神さまは、ご自身の力強い御力を示して、大きな出来事を行っていただきました。

イスラエルの民が荒れ野に向かう道を右に左にしていた頃、エジプトのファラオは、考えを変えていました。「奴隷としてとても役に立っていたイスラエル人を追い出してしまうとは、いったい何と愚かなことをしてしまったのだろう」。そのとき、イスラエル人が、湖や沼地の広がる葦の海のほうへと向かっているとの連絡が入りました。「道に迷っているのだな」。そう思つたファラオは、エジプトの全軍に号令をかけて、出発させることにしました。「イスラエル人を追いかけて、エジプトに連れ戻せ」。ファラオ自身も、馬にひかせた戦車に乗って、出発しました。

それから数時間して、海に面した場所に宿営していたイスラエルの人たちは、突然、妙な音に気がつきました。遠くから地響きのような音がして、しかも近づいてくるのです。「いったいこの地響

きは何だろう」と思っていると、遠くにエジプトの軍勢が姿を現しました。「たいへんだ！ エジプトの軍隊が追いかけてきたぞ」。イスラエルの宿営は、大騒ぎになりました。

何ということでしょう。エジプトの軍隊が迫って来るというのに、イスラエルの人たちの前には海が広がっています。前は海、後ろはエジプトの軍隊に囲まれて、もはや逃げ場所がありません。イスラエルの人たちはモーセにくっかかりました。「わたしたちを連れ出したのは、この荒れ野で死なせるためですか。こんなかたちで死ぬのならば、エジプトで奴隷のままいたほうがよかったですではないですか」。

けれども、モーセは言いました。「恐れてはならない。今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」。モーセは、恐れたり不安になったりする必要はないこと、イスラエルの神さまである主なる神さまがイスラエルのために戦ってくださることを教えて、「静かにしていなさい」と命じました。

主なる神さまは、イスラエルのために、どのように戦ってくださるのでしょうか。そうこうしている間にも、エジプトの軍隊はどんどん迫ってきます。と、突然、イスラエルの民に先立って導いていた雲の柱が、イスラエルの人びととエジプトの軍隊の間をさえぎるかのように、イスラエルの人びとの後ろに動いていきました。真っ黒な黒雲が立ちこめ、ちょうど夜になり、あたりは暗闇に包まれ、稲光も光り始めました。エジプトの軍隊は、動くことができなくされてしまいました。

もう一方で、主なる神に命じられて、モーセは海に向かって手を差し伸べます。すると、主なる神さまが激しい風を送って、海の水が押し返されました。一晩中、強い風が吹き続けて、とうとう海の中に乾いた地面が見えるようになりました。海の水が右と左に壁のようになって分かれたのです。「それっ！ 今だ！」と言って、イスラエルの人たちはみな、海にできた乾いた道を通して、向

こう岸に向かいました。それに気づいて、エジプトの軍隊も、海の中の乾いた道を通して追いかけてようとします。けれども、火の柱と雲の柱がエジプト人の目をくらまして、思うように進めません。重たい戦車も、車輪がぬかるみにはまって外れてしまい、なかなか前に進めません。ついに、イスラエルの人たちがすべて向こう岸に渡り終わりました。主なる神さまは、再びモーセに、海に向かって手を差し伸べるよう命じます。モーセが再び海に向かって手を差し伸べると、右と左に分かれて壁のようになっていた水が元の場所に流れ返りました。エジプト軍は、海の水から逃げようとしたましたが、一人残らず、水に飲み込まれてしまいました。夜が明ける頃には、海はすっかり元のよう

に穏やかな様子になっていました。

こうして、主なる神さまは、イスラエルの人たちに、ご自身の大いなるみわざを見せてくださいました。エジプトのファラオや、エジプトの神々に勝利する、力強い神さまであることをお示しくださいました。イスラエルの民は、これからいったいどなたに導かれて、荒れ野を旅するのか。それは、この力強い神さまに導かれて旅をするのです。この神さまに信頼して、おまかせして、ついて行けばよいのです。イスラエルの人たちは、この出来事をおして神さまの力強さを知り、神さまに信頼して従うことへと導かれました。

この神さまが、十字架と復活のイエスさまによって、わたしたちの神さまでもあられます。エジプトに勝利された神さまは、イエスさまの十字架と復活のみわざによって、罪と死に打ち勝つ大きな力をお示しくださいました。神さまはご自身の勝利を示して、わたしたちの神となってくださいました。そして、今も、わたしたちに約束してくださっています。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」。わたしたちも、この大いなる神さまに信頼して、与えられている人生の旅路を神さまに導かれて歩んでいきましょう。 (望月 信)

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記 14章 14節

主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。

〈ねらい〉

前は海、後ろはエジプト軍、という絶体絶命のピンチの中で、主がご自分の民のために先頭に立って戦ってくださるお方であること、海をも分けて民を導かれる力のある、全能の神であることを覚える。

〈展開例〉

神さまは、イスラエルの人々をエジプトから救出するために、十の災いを起こされました。最後の災いとして、エジプト人のすべての初子が撃たれたとき、災いがイスラエルの家を過ぎ越すようにされました。大きな悲しみがエジプト中を覆ったのを見て、ファラオは、「これ以上イスラエル人がいて災いが続くとはエジプトは滅びてしまう」と思い、イスラエル人が出て行くのを許したのです。

イスラエルの人々は、モーセを先頭に、昼は雲の柱、夜は火の柱に導かれながら進んでいきます。しかし、その頃エジプトでは働き人である奴隷がいなくなったのを後悔し、ファラオは「イスラエル人を連れ戻せ」と命じ、大勢の軍隊を仕立て、自ら先頭に立ち出発しました。

イスラエルの人々は荒れ野をさまよいながら進んでいましたが、ちょうどその頃、海辺でキャンプを張っていました。そのうちの誰かが「あの音は何だ?」「地響きのような音がするぞ」と気づき、お互い顔を見合わせていると、「エジプト人だ、エジプトの軍隊が押し寄せてくるぞ」という声が聞こえ、見ると大勢のエジプト軍がどんどん近づいてくるのが見えます。

何ということでしょう、後ろからはエジプト軍が迫ってくるし、目の前は海です。「どうしよう、どうしよう!」。中にはモーセにくっついてかかる者が大勢いました。「どうして我々をこんなところへ連れてきたのだ」、「こんな荒れ野で死ぬくらいなら、エジプトで奴隷だった方がよかった」。口々

に勝手なことを言います。

しかし、モーセは、「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」、「静かにしていなさい」と命じました。

そうしている間にも、後ろからはエジプトの軍隊がどんどん迫ってきます。すると、突然、イスラエルの民の先頭に立っていた雲の柱が後ろに回り、軍隊との間に割って入りました。軍隊は思うように前に進めません。モーセは主に命じられたように海に向かって手を上げました。するとどうでしょう、激しい東風が吹き、その風に海の水が押し返されて、海が二つに分かれて道ができました。驚いている暇もありません。イスラエルの人々はモーセを先頭に乾いた海を渡り始め、全員が無事に向こう岸にたどり着きました。そして今度は、それを見ていたエジプトの軍隊が渡ろうとしたとき、再びモーセが海に向かって手を上げると、左右に分かれていた海が元のように戻りました。エジプトの軍隊は一人残らず水に飲み込まれ、夜が明けると元の穏やかな海に戻っていました。

海を目の前にしてエジプトの軍隊に追い詰められたとき、誰が海の中を渡って逃げるなどができるなどと想像したことでしょう。でも、神さまはそれをしてくださったのです。

イスラエルの人々は、軍隊に追い詰められたときモーセに文句を言うのではなく、その先にいらっしゃる神さまに信頼すべきだったのですよね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、神さまにはおできにならないことはありません。どのようなときにも、神さまのお力を信じ、神さまに心から従っていくことができますようお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈ねらい〉

神様の力強い導きを信頼して従う。

〈はじめに〉

秋を迎えました。これからクリスマスに向かって、日曜学校行事の計画・具体的な準備も始まるのでしょうか。私たち分級の奉仕者は、子どもたちを教え、導き、クラスをまとめ、チャレンジを与え、また子どもたちとの信頼ある関係を築きあげることを通して、子どもたち一人一人の信仰の成長のためにこの働きにつかせていただいています。短い時間の中にあっても尊い働きです。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①エジプトの王様の名前は何か。
- ②イスラエルの人々がみんないなくなった後、ファラオ王様は、どうしましたか。(8節)
- ③後ろから追いかけて来たエジプト軍を見て、イスラエルの人々はどう思いましたか。(10節)
- ④怖がったイスラエルの人々に、モーセさんは何と言いましたか。(13、14節)

〈展開例〉

イスラエルの人々は、長いエジプトでの奴隷の生活から抜け出すことができました。モーセさんと一緒に、長い長い旅を続けました。昼は雲の柱、夜は火の柱が、長い行列の先頭にあって、イスラエルの人たちは、道に迷うことなく、前にどんどんと進んで行くことができました。神様がそのように導いて、みんなを守ってくださったのですね。でも、大変な事が起きたのです。エジプトのファ

ラオ王様の心が変わったのです。神様から何度も恐ろしいわざわいにあい、やっとやっと、奴隷を解放したことも忘れて、また、あの奴隷たちを自分のものにしたくなって、追いかけることにしたのです。たくさんのお戦車、馬、兵隊を連れて追いかけてきたのです。

それを知った、イスラエルの人たちは、あまりの恐ろしさのため、これまで、神様がエジプトを連れ出してくださって、守ってくださっている神様のことをすっかり忘れて、モーセさんに文句を言い始めました。ついにイスラエルの人たちの目の前には海、後ろには捕まえに来たエジプトの兵隊たち。もう駄目だ、つかまってしまおう、またあの奴隷の苦しい生活に戻されてしまおう、と誰もが目の前まっくらな思いになった時、モーセさんは、みんなに「怖がってはいけません、静かにしなさい」と言われました。そして神様はモーセさんに「あなたの杖を高く挙げ、手を海に向かって差し伸べ、海を二つに分けなさい。そして進んで行きなさい」と言われました。モーセさんがその通りにすると、海の水が二つに分かれ、道が出来て、みんなはその道を通って、向こう岸に渡ることができました。後から追ってきたエジプト軍はみんな水の中に沈んでしまいました。イスラエルの人々は、神様に守られて助かったのです。

みんなはどんなにうれしかったでしょう。神様の「力」をどんなに知ることができたでしょう。今まで文句をモーセさんに言ったことをどんなに反省したでしょう。イスラエルの人々は、神様を恐れ、神様とモーセさんを信じました。

〈お祈り〉

神様、私たちのあなたに対する信頼が、ますます豊かに、大きく成長しますよう、お導きください。アーメン。



〈ねらい〉

絶体絶命の危機にも、神さまは共におられることを学ぶ。それがたとえ重大事件のときだとしても、「主が私のために戦われるのだ、心静かに主を待ち望もう」と、みことばによる励ましによって主により頼む者となりたい。

〈ワーク〉

【5節】 ファラオはイスラエル人たちが出かけた後どう思っていましたか？

A：イヤなやつらがいなくなって嬉しい

B：仕事をする人がいなくなって困った

【8節】 そこでファラオはどうしたのでしょうか？

A：追いかけた

B：自分が働くことにした

【9～12節】 どうとうエジプト軍はイスラエルの人々の近くまで追いついてしまいました。イスラエルの人たちはどうしましたか？

A：迎えに来てくれたので帰ろうとした

B：恐ろしくなって大騒ぎになった

【14節】 モーセはイスラエルの民に何と言いましたか？

「主が□□□□のために戦われる。あなたたちは□□□□していなさい。」

……それは、恐れたり不安になったりする必要がないからなんだよ。だって、神さまが戦ってくださるから。神さまは今も私たちに同じように約束してくださってるんだよ。

【21～22節】 イスラエルの民たちの後ろにはエジプト軍がいて、目の前には□があったので、彼らは前に進むことができなくなりました。で

も、モーセが手を海に向かって差し伸べるとどうなりましたか？

()

【23～28節】 追いかけてきたエジプト軍はどうなりましたか？

()

〈祈り〉

私たちが造ってくださった神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。私たちは困ったことがあると、誰かに文句を言いたくなったり誰かのせいにしたくなったり、ああすればよかったこうすればよかったと、大騒ぎをしてしまいます。でも神さまは「静かにしていなさい」とおっしゃいます。私たちのために戦ってくださる、という神さまからの約束を私も忘れないようにさせてください。あなたにおゆだねします。

〈答え（例）〉

【5節】 B

【8節】 A

【9～12節】 B

【14節】

「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」

【21～22節】

海（海は乾いた地に変わり、水は分かれ、水は彼らの右と左に壁のようになった）

【23～28節】

死んでしまった、海に飲み込まれた、など。



〈ねらい〉

神様は、力強い勝利によって御自身を信じさせてくださる方であることを感謝する。

〈展開例〉

①先週皆は、神様は皆に御自分を信じさせてくださる方であることを学んだ。今週も、神様とはみんなの中に、御自分を信じる心をつくり上げてくださる方であることを学びたい。「また、同じ話か！」なんて思うかもしれないが、これは何回繰り返しても皆に覚えてもらいたいこと。先生が思うんじゃない。神様が皆にそう思っておられる。大切なことだから、神様は何度も何度も「私はお前の中に信じる心をつくるのだ」ということを聖書から語られる。

②今日の話で、まず注目したいのはイスラエルの人の心。先週の話で、イスラエルの人達はエジプトに起こされる災害から何度も守られたことを聞いた。彼らの心は「あぁ、神様は私達を守ってくださる方だなあ」こんな信頼が生まれたはず。でも、今日の箇所でエジプト軍が自分達に向かって来たとき彼らの心は神様を頼ることを見失ってしまう。

Q. 皆も似たようなところがないだろうか？「神様は自分を守ってくれているような気がするなあ」こんなことを感じながらも、この先が不安になるような問題、神様に従うことが難しく思える事態が起こると「神様を信じてるのに、なんでこんな目にあうんだ！ こんなんだったら教会になんか行かないほうがまし。神様を信じない人達と同じ毎日のほうがましだ！」こんな風に思うことがあるかもしれない。また、人によっては困ったことがあっても神様に頼ってお祈りするということが、頭に浮かびずらしい人もいることだろう。イスラエルの人達はま

さにそのような心境だった。

③神様からイスラエルの人を奪い返そうとするエジプト軍。神様に不信心をもって、神様の力を軽んじるエジプトへ戻ろうとするイスラエル人。その両方に、この世界を支配している御自分の圧倒的な力を示された。神様がここで奮われた力とは、御自分の愛する民に押し迫る脅威を減らす力。また、御自分の愛する民を安全なところへと導く力だった。神様はエジプトという本当の神様を知らない人々からイスラエルの人々を勝ち取られた。イスラエルはこれからエジプトの造りモノの神ではなく、生きていて自分達のために戦ってくださる本当の神様と一緒に生きていく。神様はイスラエルの人々の新しい人生の始まりに「私と一緒に生きていくことを不安がる必要はない！ お前達を幸せな日々へと導く私を疑う必要はない！ 愛するお前達を私から奪える者などいないのだから！ 私はお前達を嫌な目に合わせる者ではない！ 嫌な思いから救う者である」このことを示された。

④今日の話で、「エジプト軍」とはどんな勢力だったろう？ それは「神様から神様の民を奪おうとする勢力」である。聖書は、神様と人を引き離す力を「罪」と呼ぶ。皆もこの罪の力にふらつくことがあると思う。しかし、皆が教会にきて礼拝している神様、そしてその御子イエス様は、愛する者達を罪の勢力から勝ち取ってくださる御方である。皆の一週間が、神様の勝利が広がることを味わうときなるように祈りたい。

〈祈り〉

私達のために罪の勢力と戦い勝利されるあなたのすばらしさに感謝します。アーメン。

〈背景と文脈〉

イスラエルの人々は約束の地に向けて歩みだした。その旅は、彼らを導き、必要を満たして下さる主の御力を体験する機会でもあった。15章22～26節には、主が苦い水を甘い水に変えられた奇跡が記されている。その後、彼らはエリムという名のオアシスにたどりついたが、そこには十二の泉と七十本のなつめやしが茂っていた。彼らはそこに宿営した(15:27)。主は自然の恵みをもって彼らを養われた。

〈民の不平と神の約束〉(16:1-12)

イスラエルの共同体全体は旅を続け荒野に入った。エジプトを出てからちょうど一カ月が経過していた(1)。それまでは、エジプトの地から携えてきた食べ物や自然の恵みがあった。しかし、それが底をついたとき、彼らは主のみわざを思い出すことなく、荒野で飢え死にするぐらいなら、十分な食物があったエジプトで死んだ方がましだった、とモーセとアロンに不平を言った。彼らは、彼らを養うことのできる全能の神を信じなかった。しかし、彼らの不信仰にもかかわらず、主は、天からパンを降らせる、とモーセを通して約束された。これには二つの目的があった。ひとつは「わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す」(4)、と言われたように、御言葉に対する民の従順さを試すためだった。もうひとつは、「あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになるためである」(12)、と言われたように、主はこの奇跡を通して、主こそ彼らの神であることを民に知らせようとなさったのである。主はご自分の民が困難に直面することを許されるが、それによって彼らが主の御力を体験し、それを通して主が彼らの神であることを、深く知ることを望まれたのである。

〈天からのマナ〉(16:13-36)

主が約束されたように、夕方にはうずらが飛んできた(民数11:31を参照)。朝には、のちに彼らがマナと名付けたもの(31)が彼らの食物として与えられた。それは、薄くて壊れやすく(14)、色はコエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした(31)。民はそれを集め、臼で粉にひくか、鉢ですりつぶし、鍋で煮て菓子にした。それは、こくのあるクリームのような味がした(民数11:8)。主は彼らに、毎朝一人当たり一オメル(約2.3リットル)を家族の数に応じて集めるように命じられた。

マナが自然の産物であるか、あるいは主が与えられた特別な賜物であるかについては議論がある。しかし、それが自然の産物であろうと、主が民のために特別備えてくださった食物だったことには変わりはない。なぜなら、それが四十年もの間、多くの民を養うに十分であったこと、通常、翌朝には虫がついて臭くなったが(20)、安息日の前日に集めたものは翌日になっても臭くならなかったこと(24)、また彼らが約束の地カナンに入り、その地の産物を食べることができるようになったとき、マナが止んだこと(ヨシュア5:12)などは、このことが神の摂理によることを裏付けている。主はイスラエルの民の旅路の間、マナをもって彼らを養い通した。

マナは毎朝集める必要があった。何人かはモーセに聞き従わず翌朝まで取っておいたが、臭くなった。またモーセは、六日目には二日分を集めるよう命じた。それは、七日目の主の安息日を休むためだったが、そのときには臭くならなかった。後に主は、民の益のために、十戒で安息日を定められた。モーセに聞き従わず、安息日に集めようとした者たちがいたが、何も見つからなかった。主は、彼らが主の指示通りにするかどうかを試す、と言われた。主は、ご自分の民が御言葉に従順であることを求められる。(後藤公子)

テキスト 出エジプト記 16章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問69, 70, 71, 49

〔単元のねらい〕

天からのマナの出来事は、律法授与の出来事と重なっている。ただ肉体の糧を与えるだけでなく、霊的な糧によって日ごとに養われること、また、七日目の安息が不可欠であることが指し示されている。御言葉によって霊的に養われてこそ、神の民として、神に導かれ、信仰を養われて生きることができる。マナは、そのことを教える実物教育であったと言えるだろう。その点で、今日のわたしたちに与えられている、御言葉の説教と聖餐の礼典との関係に似ている。説教も聖餐も共に主イエス・キリストを指し示す。そして、聖餐は目に見える御言葉である。説教で示される神の恵みを目に見える仕方ですしづけ、保証しているが、同時に、見えない神の御言葉を不可欠としている。子どもたちには、マナによって肉体が養われるように、神の御言葉によって霊的に養われることの大切さをはっきりと教えたい。なお、暗唱聖句として申命記を挙げたが、ヨハネ福音書6章51節でもよいであろう。

「天からのパンによって生きる」

エジプト軍から逃れたイスラエルの人たちは、主なる神さまに導かれて、シナイ半島の荒れ野に分け入りしました。さて、エジプト軍が海の水の中でおぼれてしまうという、たいへん大きな出来事を見せられて、イスラエルの人たちは、主なる神さまに信頼して、荒れ野の旅を始めることができましたでしょうか。いいえ、イスラエルの人たちは、神さまに信頼していることができず、たちまち不平不満を言い始めたのです。

そのきっかけは、食べ物がないことでした。みんなも、食べ物がないとつらいですね。おなかがすいて、食べ物がないと、いらいらしてきます。イスラエルの人たちも、おなかがすいていらいらして、そして、荒れ野でどうやって食べ物を手に入れるのか、不安にもなったのでしょうか。イスラエルの人たちは言いました。「こんなところで飢えて死ぬならば、エジプトの国で死んだほうがましだった。エジプトでは、奴隷ではあったけれども、おなかいっぱい食べることができた。食べ物のことで心配することはなかったのに」。

けれども、荒れ野の旅をするのですから、イスラエルの人たちも、最初から、食べ物には不自由すると分かっていたでしょう。ですから、食べ物

がないというだけでなく、まだ神さまをそこまで信頼することができていなかったということでしょう。不信仰だったのです。

その不信仰にもかかわらず、神さまは憐れみ深いお方でした。主なる神さまは、モーセをとおしてイスラエルの人たちにおっしゃいました。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている」。神さまは、イスラエルの人たちに、マナと呼ばれる食べ物を与えてくださいました。明け方、宿営の周りに露が降り、その露が蒸発すると、地表を覆うように、薄くて壊れやすい白いものが残っています。蜜の入ったウェファースのような味がする食べ物であり、それがマナでした。

神さまは、マナを毎日与えてくださいました。イスラエルの人たちは、毎日、朝早く、外に出て、そのマナを集めました。集めてはかってみると、一人一オメルずつ、家族ごとに必要な分がありました。多すぎることもなく、少なすぎることもな

く、ちょうどよい量が与えられました。また、毎日、日ごとに与えられ、その日の分を次の日に残しておく、虫がついたり腐ったりして、食べることができませんでした。さらに、六日目に集めてはかってみると、ちょうど二日分与えられていました。六日目に二日分与えられて、七日目の朝はマナは与えられませんでした。イスラエルの人は、七日目の朝、外に出て探してみましたが、マナを見つけることはできませんでした。

このマナは、イスラエルの人たちの食べ物であり、空腹を満たすものでした。そして、それだけではありません。イスラエルの人たちに、御言葉に聴くことによって神さまに養われることを教えています。神さまは、とてつもないに、ご自身の御言葉をもってマナの集め方を教えられ、七日目には休むことまで教えられました。イスラエルの人たちは、このマナをとおして、神さまの御言葉に養われることを学びました。

神さまは、申命記で、こうおっしゃいました。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」（申命記8:3）。このマナの出来事ののち、イスラエルの民は、神さまから十戒の御言葉を与えられました。その神さまの御言葉に聴き従わなければならない、それに先だって、日ごとに神さまに養われることを教えられました。すなわち、肉体のことだけではなく、霊的にも、日ごとに神さまに養われるべきなのです。天からのパンであるマナは、この意味で、神さまの御言葉に養われることを指し示すしるしでした。イスラエルの人たちは、エジプトから導き出され、神の民とされたのであって、神さまの御言葉に聴き従う生活を始めます。御言葉に聴き従って歩むときに、人は、神さまに信頼して、神さまに導かれて歩むことができるのです。

わたしたちのために十字架につけられ、復活してくださったイエスさまは、こうおっしゃいました。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」（ヨハネ福音書6:51）。このイエスさまが来てくださって、今や、十字架と復活のイエスさまが天からの命のパンです。わたしたちが生きるためには、この霊的な糧、イエスさまの御言葉こそが必要です。イエスさまの御言葉に養われて、わたしたちは、神の民として、神さまに導かれて歩むことができます。

イスラエルの人たちが、日ごとにマナによって養われたように、今のわたしたちも、天からの命のパンであるイエスさまの御言葉によって養われます。一日一日、その日ごとに、聖書の御言葉を読み、祈りをささげましょう。とくに、朝早くマナを集めたように、朝起きてすぐに御言葉を聴き、祈ることができるならば、その一日、神さまの祝福が豊かでしょう。そして、神さまの祝福は、日ごとにわたしたちに十分であることを知しましょう。神さまは、一日に必要な分だけマナを与えて養ってくださいました。次の日のためにマナを取っておいても、それは無駄になってしまいました。そのように、わたしたちも、次の日のことを思い悩むのではなく、むしろ神さまに期待して、神さまに祈り求めることが大切です。

また、七日目には二日分与えられました。それは礼拝するためです。今、わたしたちは、週の最初の日に教会に集まります。お友だちと一緒に神さまの御言葉を聞き、礼拝をささげます。礼拝をとおして神さまと出会うことへと導かれます。

わたしたちには、このような命の糧が必要です。神さまの御言葉の糧に養われ、イエスさまの御声に聴き従って、神の民として歩み続けることができます。わたしたちには、そのために、天からの命のパンが与えられています。何と感謝なことでしょうか。（望月 信）

[今週の暗唱聖句] 申命記 8章3節 (一部)

人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる。

〈ねらい〉

神さまが私たちの必要を満たし養ってくださること、また、体の食べ物だけでなく、御言葉によって養われることの必要を覚える。

〈展開例〉

みんなに質問です。お空から降ってくるものがあったら、何が思い浮かびますか？

雨。そうだね。雪。そう、冬にはきれいな雪が降りますね。他には？ 光。すごい！ よく気がついたね。明るくてあったかい太陽の光。

きょうのおはなしの中にも、天から降ってきたものがでてきたよね。そう、なんと、お空からパンが降ってきたんだって！ びっくりしたよね？

奴隷として働かされていたエジプトから、神さまはイスラエルの人たちを救い出してくださいました。でもイスラエルの人たちはね、食べ物もなんにもない荒れ野に入ったときに、とってもおなかが空いてしまって、神さまに不平、文句を言い始めたんです。「こんなところでおなかが空いて死んでしまうなら、エジプトにいたほうがよかったです！」

それをお聞きになった神さまは、怒ってしまわれたかな？「お前たちのことなんかもう知らない！」と、お見捨てになったかな？

そうじゃないね。神さまはおっしゃいました。「わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる」

たしかに荒れ野を見わたしても、食べるものがなんにもなかったかもしれない。でもイスラエルの人たちは天を見上げることを忘れていたんだ

ね。私たちが生きるのに必要なごはんを与えてくださるのは、天にいらっしゃる神さまなんだね。

神さまはみ言葉通り、毎朝パンを与えてくださいました。朝起きてテントを出たら、荒れ野いちめんを白いマナが覆っていたんだって。それでイスラエルの人たちはどうしただろう？「わーい！ やったー！」と叫びながら、めいめい自分の好きなだけとればよかったのかな？

ちがったよね。み言葉をしっかり聴いて、神さまのおっしゃった通りにパンを集めたんだね。毎日決められた分だけ、きっちり。七日目は安息日だから、その日ちゃんと休むために、六日目には二日分。み言葉をちゃんと聴かなかった人は七日目にパンを取りに出たんだけど、その日はなんにも見つからなくて困ってしまいました。

イエスさまは、人はパンだけでなく、神さまのみ言葉によって生きる、と教えてくださいました。だからわたしたちも、神さまのみ言葉をちゃんと聴くことを大切にします。わたしたちを養ってくださる神さまのみことばをちゃんと聴くこと、それを忘れないでいようね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、いつもわたしたちにごはんを与えてくださってありがとうございます。聖書を読むこと、こうして教会でみ言葉を聴けることをありがとうございます。いつもしっかりみ言葉を聴いて、それに従えるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。



〈ねらい〉

私たちは、神様のお言葉によって、目に見えない魂が豊かに養われる。

〈はじめに〉

分級の奉仕は、子どもの信仰教育のために神様に用いて頂く愛の働きです。ここに集う全ての子どもに、神様の愛が伝えられ、愛して下さる神様がどういうお方なのか、ますます知ることができるよう、今日の分級も主が祝福して下さるよう祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イスラエルの人々は、モーセとアロンにどんな不満を言いましたか。(3節)
- ②神様はモーセに何を約束されましたか。(4節)
- ③神様が与えてくださった天からのパンを何と言いましたか。(31節)

〈展開例〉

私は今、この右手に何かを持っています(クッキーでもパンでもいいです)。今はこのハンカチでカバーしているので、みなさんには分かりません。何でしょう？ 何があると思いますか？

(カバーを取る)「これは一体何でしょう？」今、これを見て、みなさんも「これは何だろう？ これなあに？」と言いました。さてさて、今日読んだ聖書にも同じ言葉が出てきましたね。15節「これは一体何だろう」。イスラエルの人々は、何を見て、これは一体何だろう？ と言いあったのでしょうか？ 聖書にはちゃんと、その理由が書いていましたね。

イスラエルの人々は、神様に助けられて、エジプトを脱出しました。エジプト軍が追いかけてきても、神様が助けて下さって、海を渡ることが

出来て、逃げることができました。どんな時も神様が助けて下さることを体験して、その都度、神様は素晴らしいと喜んでいたのに、またまた、その喜びが消えて、不満ばかり口にするようになりました。

「お腹がすいたあ、こんな事だったらエジプトにいたほうが良かった！ 私たちを殺すつもりなのか！」とぶつぶつモーセさんとアロンさんに言い始めたのです。ついこの間、神様に助けていただいたのに、神様に信頼することをもう忘れてしまったのです。

それを知った神様はその願いを聞いてくださいました。神様はモーセに「あなたがたのために天からパンを降らせよう」と言われました。朝早く目を覚ますと、地面に白い薄いパンのようなものが一杯落ちていました。「これは一体何だろう」。みんなは言いました。モーセは「これは神様が用意して下さった食べ物です。今日一日分だけ集めなさい。余分に集めると腐ってしまいます」と言いました。みんなは喜んで集めました。それをマナと呼びました。

毎朝毎朝、朝起きるとこのマナを集めることができたので、お腹がすいたあと不満を言う必要はなくなりました。六日目は二日分集めて、七日目はお休みしました。このマナを通して、イスラエルの人々は神様の御言葉に養われることを教えられました。

「これは一体何だろう？」今、私たちは、神様から、いのちの御言葉が与えられています。毎朝毎朝、期待と信頼を持って、この神様のいのちの御言葉をいただくことが、私たちが神様の子どもとして成長する大事なことです。

〈お祈り〉

神様、私たちは小さな子どもですが、神様を知る心は、どんどん大きく成長できますように。神様のお言葉をありがとうございます。アーメン。

〈ねらい〉

わたしたちには、ご飯やおやつや飲み物が必要なように、いのちの糧（神さまのことば）が必要だということを、子どもたちと共に教師も今朝、御前にひざまずいて教えられたい。

〈ワーク〉

【3節】 イスラエルの人々はモーセとアロンに不平を言いました。どうしてかな？

()

【4節】 そこで神さまはモーセに「天からパンを降らせる。」と言われ、また彼らを「試す」とおっしゃいました。

何をテストされるのかな？

()

【13・15節】 夕方になると□□□が飛んできて人々は肉を食べることができた。朝には□□が降りてきて食べるすることができた。

【18・20節】 テストに合格したのはどちらの人だと思いますか？

A「多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、必要な分を集めた。」(18節)

B「何人かはその一部を翌朝まで残しておいた。虫が付いて臭くなった」(20節)

【22・23節】 安息日の前日は、パンを特別に何日分集めてもよかったでしょう。□日分。なぜですか？

A：なまけるため

B：礼拝するため

【31節】 イスラエルの人々はそのパンを何と呼びましたか？

□□

【35節】 イスラエルの人々はそれをどのくらいの間食べたのですか？

□□年

【決心】 私たちにも、神さまからのいのちのパンを与えられています。朝早くマナを集めたイスラエルの人たちのように、私たちは朝早く起きて何をすべきでしょうか？

()

〈祈り〉

私たちに毎日必要なものを与えてくださる神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。私たちはおなかがすいたり明日のことで心配なことがあったりすると、すぐに文句を言ってしまいます。でも神さまは一日に必要な分だけマナをくださったことを勉強しました。明日のことを心配するのではなく、きっと神さまが私を養ってくださると信じて歩み続けることができますように。あなたにおゆだねします。

〈答え(例)〉

【3節】

おなかがすいたから、明日のことが心配になったから、奴隷でいたほうがよかったと思ったから、など

【4節】

神様の言うことをキチンと聞けるかどうか。心配になって必要以上にとってしまったりしないか、など

【13・15節】 うずら マナ(パン)

【18・20節】 A

【22・23節】 2日分 B

【31節】 マナ

【35節】 40

【決心】

ここは自由に。「みことばを聞く、聖書を読む」といった答えでもよいが、それに固執するものではない。

〈ねらい〉

神様は、愛する者達の必要を満たして成長させられる方であることに感謝する。

〈展開例〉

①今日は不満をもらす子供のようなイスラエルの人達に、神様が恵みを与えて成長させてくださったお話し。不満とは何だったか？それは空腹。「腹が減った！ 飯がない！ 神様に従って飢え死にするくらいなら、神様を知らないエジプト人達と腹いっぱいですごすほうが良かった」イスラエルの人達は、荒れ野を通して神様の約束の地を目指す旅の中で、「あれがない！ これがない！」と不満をもらす。

Q. 皆も神様が約束された天国へ向かう人生の旅を歩んでいる。そんな中で「あれがない。これがない。神様を大切にしている生活をしていたら、欲しいモノが手に入らない！」こんな思いを抱くことはないか？ 学校の成績、部活のポジション、恋人との時間、友達との時間、「これが無かったら自分の人生は台無しだ！」血気盛んな中学生なら、色々と欲しいモノがあって当然だ。

②今日の箇所ではイスラエルの人達が欲しがったモノは「食べ物」。神様はその必要を満たしてくれた。食べ物というのは生きるために本当に必要なモノ。神様と言う方は、みんなが神様と一緒に生きていくのに必要なモノを与えてくださる、そういう御方である。ただ、今回、神様はイスラエルの必要な「毎日のパン」をポーンと手渡したわけではない。今回、神様がイスラエルに与えたパンには特別なネライがあった。

③それは「神様の語る言葉に従うことで、人生は守られるのだ」とイスラエルが知ること。だから、

神様はパンをもらうための色々なルールを設定された。単純に欲しい者を与えて食いつなぐだけの生活ではなく、神様の思いに従うことで、必要が満たされていく、そういう生活を神様は与えられた。神様が与えられたのは、体が必要とするモノだけではない。「神様に従えばすべて大丈夫！」という人間にとって一番必要な心、神様を信じる心を神様は与えられた。神様を信じて生きることが、まだまだ初心者で子供みたいなイスラエルの人達を神様は大人な信仰者へと育ててくれる。それは「神様の言葉に従う毎日」の中で培われていく。

④君達も大人になる旅の途中にいる。「あれがない！ これがない！」君達は毎日に足りないものを数え上げるかもしれない。「〇〇を得るためには神様に従ってなんかいられない！」こんなことを思うかもしれない。だが、神様を無視して手に入れるモノなんていうのは必ず最後には手元から無くなる。生きている間に失う人もいれば、死んですべてを失くす人もいる。欲しいモノがあること自体は悪くない。成績や交友関係は君達にとって生きるか死ぬかの大問題だ。しかし、大事なことは神様に従うことによって、それらを手に入れること。神様は君が生きるのに何が必要か、学校の先生以上に、君の親以上に完璧にわかっている。そして、君達が生きるのに必要なすべてのことは神様の言葉である聖書の中にある。神様の言葉に従うことで子供から大人へと育てられていく、君達にそんな毎日が与えられることを願い祈りたい。

〈祈り〉

私達の必要を知っておられる神様。欲しいモノは色々ありますが、神様に従う中で本当に必要なモノが満たされますように。アーメン。

テキスト 出エジプト記 19章1節～20章21節

〈シナイ山で神と出会うイスラエルの民〉

エジプトから救い出された神の民イスラエルは三ヶ月目、シナイの荒れ野に到着し、その山で神と契約を結び、主との新しい関係に生きる者とされました。神の民は山に向かって宿営し、モーセは神のもとに登って行きます。そこで、主なる神は言われました。「あなたたちは見たでしょう。わたしがエジプト人にしたこと、また、あなたたちを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れてきたことを」。神は大いなる御手と御業によってご自分の愛する民をエジプトの支配、奴隷の地よりお救いくださったのです。それゆえに今、あなたがたはわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守りなさい。そうすればあなたたちはすべての民の間にあってわたしの宝となる。あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。強大なエジプトの支配と力の下にあっていと小さき民であったイスラエルの民を救い、彼らをご自身の宝の民とすると言われるのです。驚くべき言葉です。そうであればこそ、この神の御声に聞き、契約の言葉に従う聖なる民であるべきです。

主はご自分と出会う民が自ら汚れを洗い、聖別するよう命じられました。臨在の前での聖さを求められたのです。また、民が山に近づかぬよう命じ、ただ仲保者として立てられたモーセだけが主の臨在に近づくことが許されました。

こうした中で、雷鳴と稲妻と厚い雲、激しい嵐のような異常な光景と現象の中で主はシナイに降られ、モーセを通してご自分の民イスラエルに契約の言葉をお与えくださったのです。

〈十戒、十の恵みの言葉を主から受けて〉

こうして、与えられたのが十戒です。十戒は十の言葉と言われる契約の法です。契約の法ですから、契約の主が誰であるか、どのような意図をもってこれが与えられたか、そして契約の内容とそれを守った者に対する祝福、これに背く者に対する審き、呪いが語られています。

まず、序言と言われる部分で神の自己紹介が語られます。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。これは契約の法である十戒をお与えくださった方がどのような方かを示す言葉です。この序言は十戒全体を支えている重要な宣言です。これを抜きに本文を読むことは、まさに律法主義への危険な落とし穴があると言えるでしょう。

十戒は前半、3節から11節までは神と人との関係、後半12節から17節までは人と人との関係が教えられています。主ご自身が、律法の中心は「神を愛することと隣人を愛すること」であると要約されました。

第一の戒め、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」は、十戒の根本的な戒めです。これは、「あなたには他の神があるはずがない」という強い排他性、神とイスラエルとの深い契約的結びつきの中で語られる言葉です。だからこそ、第二の戒め、「あなたはいかなる像も造ってはならない。……わたしは熱情の神である」も、意味を持ってきます。「熱情」は「妬み」とも訳され、神のご自分の民に対する主権と熱愛が擬人的な仕方で示されています。第三の戒めは神の啓示への畏敬。第四の戒めは礼拝日の聖別。

後半、人と人との関係の最初に第五の戒め「あなたの父と母を敬え」が語られています。それは十戒の前半と後半を結ぶ橋渡しの役割を持っています。両親は子を養育し、信仰に導くための神の代理者です。子は親を通してみ言葉に聞き従うよう訓育を受けるのです。第六の戒めは命の保持。第七は結婚関係の聖さの保持。第八は所有関係の保持。第九は偽りの証言の禁止。第十の戒めは隣人の所有を巡るむさぼりの禁止です。

恐るべき光景と異常な現象の中で、十戒の言葉を受け、恐れる民に、モーセは言いました。「神はあなたたちの前に神を畏れる畏れをおいて、罪を犯させないようにするためである」と。

(国方敏治)

テキスト 出エジプト記 19章1節～20章21節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問39,40

〔単元のねらい〕

「単元の目標」に「律法を持つ幸いを味わおう」とある。そのために求められることこそ、十戒が「愛と恵みの言葉」であることをあらためて確かめることであろう。その際に大切なことは、十戒の「前文（序文）」とおのおのの戒めとを切り離さないことである。あわせて、十戒が（旧約のイスラエルにだけ語られたというのではなく）今わたしたちの命を守り支える言葉であることをもしっかりと語りたい。

「十戒—愛の言葉」

エジプトを出てから三か月め、シナイの荒れ野に着いたとき、神さまはご自身をイスラエルの民にあらわしてください、シナイ山からみ声を聞かせてくださいました。このときに、十の戒めを授けてくださったのです。

日曜学校の礼拝でも、みんなで十戒を唱えることがあるかもしれません。今日は十戒について学びたいと思います。

十戒は子どもカテキズムにも記されていますから、そこを開いてもういちど確かめてみましょう。十の戒めは、次のとおりです。

1. あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。
2. あなたはいかなる像も造つてはならない。
3. あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
4. 安息日を心に留め、これを聖別せよ。
5. あなたの父母を敬え。
6. 殺してはならない。
7. 姦淫してはならない。
8. 盗んではならない。
9. 隣人に関して偽証してはならない。
10. 隣人の家を欲してはならない。

これらの戒めを読んでみて、あるいは声に出して唱えてみて、皆さんはどのように感じたでしょうか。「～してはならない」「～してはならない」と続きますから、もしかすると厳しい、堅苦しい命令のように感じたかもしれません。

けれども、よく覚えておいてください。十戒は愛のみ言葉です。十戒には神さまを信じて生きる民へのあふれるばかりの愛がこめられています。

十の戒めを語られるにあたって、神さまはこのように仰せになりました—「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

エジプトの国にいたとき、イスラエルは奴隷の苦しみの中にありました。神さまはイスラエルをその奴隷の苦しみから救い出して、自由にしてくださいました。イスラエルを愛しておられたからです。

そして今、神さまが十の戒めをイスラエルに授けてくださったのも、愛のゆえです。神さまは愛する民を奴隷の苦しみから救い出してくださっただけではありません。愛する民が幸せに生きることができるよう、命の道を歩き続けることができるように、ご自身のみ言葉を与えてくださったのです。

今、イスラエルは荒れ野を旅しています。荒れ野は厳しい場所です。食べ物がなくて飢えたり、飲み水がなくて喉の渇きを覚えたりすることもしばしばです。突然、獣が襲ってくることもあるでしょう。もしもイスラエルが何も持たずに荒れ野の真ん中に放り出されてしまったなら、どうであったでしょうか。心細くてたまらなかったと思

います。

けれども神さまは十戒を備えてくださいました。これらのみ言葉に従って歩むなら、荒野の真ん中にあっても何の心配もないのです。どんなことがあっても、何が起ってもだいじょうぶなのです。神さまがみ手をもって守ってくださるからです。

十戒は厳しい命令などではありません。愛の守りのみ言葉です。もし皆さんが車のひっきりなしに通っている道路に飛び出そうとしたら、お父さんやお母さんは黙って見ているのではないでしょう。あぶないから気をつけなさい、と声をかけてくださるにちがいありません。それは、皆さんを愛していて、皆さんの命を守ろうとするゆえです。

十戒も同じです。神さまのみ声に聞き従うとき、愛の神さまはわたしたちの命を守ってくださるのです。

十戒は旧約聖書の時代のイスラエルの民だけに与えられたというわけではありません。今わたしたちにも与えられています（ですから、日曜学校で十戒を唱えることはとてもすばらしいことです）。神さまはわたしたちをも愛しておられます。

神さまに救われたわたしたちは、救いの喜びに満たされ、感謝の思いにうながされて、神さまのみ声に聞き従います。神さまを愛するとは、十の戒めを守り行うことです。そのとき神さまはわたしたちの命を豊かに祝福してくださいます。わたしたちの人生の歩みを確かに守り導いてくださいます。
(木下裕也)

[今週の暗唱聖句]

詩編 119編105節

あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。



〈ねらい〉

神さまが十戒を授けてくださった経緯を学び、愛と恵みの言葉である「道しるべ」を与えられている幸いを覚える。

〈展開例〉

みんな十戒を覚えているかな。十戒は、「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」という言葉ではじまっていましたね。今日は「わたしはあなたの神」と言ってください。神さまが、私たちに十戒を与えてくださったときのお話です。

これまでお話を聞いてきたように、神さまは、モーセさんをリーダーにして、神さまを信じる人々をエジプトから救い出してくださいました。モーセさんたちがシナイ山というお山についてきたとき、神さまが与えてくださったのが十戒です。十戒は、神さまから離れて迷子になったり、人間どうしでけんかして進めなくなってしまうことが無いように、神さまが与えてくださった「道しるべ」です。

十戒は二枚の石の板に書いてありました。

一枚目の石の板には神さまについての戒めが書いてあり、二枚目の石の板には人についての戒めが書いてあったのだと思います。

十戒は、モーセさんが生きていた頃の昔の人だけに与えられた言葉ではありません。イエスさまに救われ、今、生きている私たちにとっても「道しるべ」となる、神さまの愛と恵みの言葉なのです。

〈やってみよう〉

十戒が記された二枚の石の板の絵を描いてバラバラに切り刻んだものを用意し、ジグソーパズルのように、子どもたちに元通り並べさせて見よう。

〈お祈り〉

神さま、私たちが間違った道に迷いこんでしまわないように、十戒を与えてくださり、ありがとうございます。神さまが十戒にこめてくださった愛と恵みをしっかり受けとめて、迷子にならずに生きていくことができるようにしてください。アーメン。



〈ねらい〉

神様の大きな愛のことばとして、この十戒を受け取る子どもになろう。

〈はじめに〉

毎週続けて子どもたちは出席しているでしょうか。下級クラスでも、塾やクラブに参加する子どもが増えてきつつあるように思います。久しぶりの出席の子どももいるかもしれません。心からの歓迎を、あなたの変わらない愛と笑顔で、今日来た子どもたち一人一人に伝えましょう。何よりもイエス様御自身が喜んでくださっているのですから。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イスラエルの人々はエジプトの国を出て三ヶ月たちました。どこに着きましたか。(1節)
- ②神様の所に行ったのは、誰ですか。(3節)
- ③20章2節をみんなで読みましょう。

〈展開例〉

イスラエルの人々は神様に助けられて旅を続けて3カ月ほどたちました。シナイの荒れ野に着きました。そこにはシナイ山と言う山がありました。モーセさんはそこに登って、神様とお話をしました。お話したことを山の下にいるイスラエルの人々皆に伝えました。みんなはモーセさんに言われて、体もお洋服もきれいに洗って清潔にして、神様にお会いする準備が始まりました。

山の周りに柵をぐるりと作って誰も入れないよ

うしました。三日たったその朝、あつい雲が山を包みました。雷がなって、稲妻も光って、山全体も激しく揺れて、みんなは恐ろしくて仕方ありませんでした。でも、モーセさんはまた山に登って行って、モーセさんを通して、神様は、「十戒」という神様の大事ないましめをお与えになりました。。これは今の私たちにも与えられている神様の変わらないいましめです。この十戒を覚えましょう。

今は車に「ナビ」という便利なものがついている車が多いです。お父さんお母さんの車にもありますか？ 教会の住所や電話番号を入力すると、自分の家から、教会までの地図が自動的に画面に映って、行き方を教えてくれます。全然知らない所でも住所さえ分かれば行く道をちゃんと教えてくれます。

神様が私たちにくださった「十戒」もそれと似てるかもしれませんね。神様とずっと一緒に生きるために、天国まで連れて行っていただく道、私たちがちゃんと、神様がおられる道を進んでいるかどうか、この十戒があることで知ることが出来ます。十戒は私たちが神様の子どもとして進む正しい道を示してくださるものです。十戒を私たちにくださるほどに、神様は私たちを愛して、大事に守ってくださるお方です。私たちがあっちに行ったり、こっちに来たり、フラフラ迷子にならないように、確かな道を教えてくださいました。神様ありがとうございます。

〈お祈り〉

神様、十戒をくださってありがとうございます。そして私たちを愛し、お守りくださるお方であることを心から感謝します。アーメン。



〈ねらい〉

イスラエルの民も、私達も神によって愛され、救われている。だからこそ、神を愛し十戒を喜びを以て守って行く。

〈ワーク〉

1. モーセさんは、() 山で、何を授かりましたか？
() の () です。
2. イスラエルの人たちは、() で、どんな生活をしていましたか？
() の生活でした。
3. その生活から () が () ってきて、() を目指して、旅をしています。
それは、神様が、イスラエルの人たちを () いたからです。
4. 十戒の前半は、() ～ () で、わたしと () の関係です。
十戒の後半は、() ～ () で、わたしと () の関係です。
5. わたしたちも () と () の中にいました。

そのようなわたしたちを神様は、() 様の () によって、() ってくださいました。

わたしたちは () に向かって生きています。神様は、わたしたちも () しておられるからです。

6. 救われた、わたしたちも () を愛して、() を喜んで () っていきましょう。

〈祈り〉

神様、私たちを愛して、主イエスによって救ってください、有難うございます。そのことを覚えて、神様から与えられた十戒を守り、神様の御国を目指して生きて行けますようにしてください。

〈答え〉

1. シナイ、十、戒め
2. エジプト、奴隷
3. 神様、すく、約束の地またはカナン、愛して
4. 一、四、神様、五、十、隣人
5. 罪、滅び、主イエス、十字架、すく、天国、愛
6. 神様、十戒、守



〈ねらい〉

十戒をくださった神様の愛に感謝する。

〈展開例〉

①「あれをしろ!」「これをしろ!」頭ごなしの命令とういのは気分の良いものではない。今日読んだ十戒もここだけスッパ抜けば、ただの命令調の文字である。法律や校則の命令文にはそんなニュアンスがあるかもしれない。でも、今日の十戒は神様の気持ちが込められた命令。なんで、神様はこんなことを命令されるんだろうか? 聖書にはたくさん神様からの命令があるが、言葉の裏にある思いを知ることが大切。

②まず、十戒の序文に注目しよう。ここで言われているのは「私はあなた達を救いだしたあなたの神だ」という神様の自己紹介だ。神様は自分にとってどうでもいい者を救ったりはしない。神様と一緒につき合い続けたい相手を救われる。そして、この神様はどこか自分と遠い存在ではない。神様は「私はあなたの神だ」と言われる。「私は大切なあなた達を救いだして、あなたの神となった存在だ」このような前置きのあとで十の戒めが語られる。

Q. 皆は「戒め」という言葉の意味を知っているか? どんなイメージがあるだろう? 懲らしめるとか、禁じる、こんな意味を思い浮かべるかもしれない。そういう意味もあるが、国語辞典を引くと「前もって注意すること」とある。つまり神様は「何か」に「前もって十の注意」を与えられたということ。「何か」とは何だろう?

③イスラエルは神様が約束された土地へ向かう途中であった。そこで神様はイスラエルの人々と一緒に最高の毎日を過ごそうとされていた。つまり「何か」とは神様と一緒に過ごす最高の日々

である。そのために前もって注意された10の戒めが「十戒」というわけだ。ということは十戒とは「あれはダメ、これはダメ」と生きることを縛りつける教えではない。人が神様と一緒に最高の毎日を過ごすための道標、喜びの日々をつくりだす最高の教えというわけだ。

④聖書は他の箇所でも、十の戒めは「神様を愛すること」と「人を愛すること」の二つにまとめられている。だが「愛する」というのはわかるようで、わからない言葉かもしれない。「愛すること」の中心は「相手を自分のように大切にすること」である。その大切にしている仕方が十戒には込められている。君が誰かを大切にすること、君が神様を大切にすることが君の人生を左右する。

⑤最初に十戒の序文は君達を大切にしている神様の自己紹介だといった。私達は天地を創られそれを支配しておられる、驚くような御方とお互いに大切にしようとする道が与えられている。そして、そんな神様に大切にされている者どうしもまた愛し合う道が与えられている。神様は私達が互いに大切にしようとするのを求められる御方である。君が神様を大切にするとき神様は喜びを覚えられる。君が人を大切にするとき、神様は嬉しさを覚えられる。君達も、大事な人が嬉しい顔をしていれば嬉しいだろう。大事な人が悲しい顔をしていれば悲しいだろう。神様が押してくださった神様が喜ばれるツボが十戒には秘められている。神様を悲しませるのではなく、神様が嬉しくなるような日々を求めたい。

〈祈り〉

愛することの下手くそな私達に愛し方を教えてください。ありがとうございます。日々の中であなたに喜んでもらう道を歩めますように。アーメン。

〈イスラエルの偶像礼拝の罪〉

シナイにおいて十戒、契約の言葉を与えられ、主なる神に従順を誓った民は、早速背きました。モーセが山からなかなか下りて来ないため、民はモーセの兄アロンに訴えます。「我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトから我々を導き上った、あのモーセがどうなったのかわからないからです」。「我々に先立つ神々」、それはモーセが山から下りてこない中での不安から求めた神々です。アロンは民に妻や息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、持って来るように言いました。すると、彼らは着けていた金の耳輪をはずし、持ってきました。それを受け取ったアロンは、若い雄牛の鑄造を造り言いました。「イスラエルよ、これこそ、あなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と。それは、後に北イスラエル王国のヤロブアム一世がベテルとダンに金の雄牛の像を安置して言った言葉「見よ、イスラエルよ、これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神である」を暗示しています。

「彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた」と言われています。そこには、エジプトの奴隷の地から救い出してください、生けるまことを神を捨て、金の雄牛を神と崇め、その異教祭儀に興ずるイスラエルの不信仰の姿があります。彼らは、契約の法、十戒のみ言葉を畏れをもって聞いたばかりです。偶像礼拝が罪であることはよく知っていたに違いない。だが、彼らは、そしてアロンにしても、金の雄牛、偶像を造ることを止めようとしなかったのです。それはこのような像を媒介として、生ける霊なる神に触れることができる、そうでなければ生ける神に近づくことができないうかのようなのです。そこにあるのは世界とそこにあるものを手段とし、それをを用いて神に触れようとする汎神論的な考えです。第二戒、偶像礼拝の禁止は、このような考えに対する反対にほかなりません。

〈神の怒りとモーセの執り成し〉

このようなイスラエルの民の背信に対して、神は激しい怒りをもって言いました。「わたしはこの民を見てきたが、実に頑な民である。わたしは彼らを滅ぼし尽くす」と。頑な民という言葉は「うなじのこわい民」とも言われ、不従順な背きの民を表す象徴的な言葉です。

このような激しい神の御怒りに対して、モーセは激しく神に詰め寄って訴えました。①なぜ、ご自分の民に怒られるのか。②あなたがエジプトから救われた民ではないですか。③エジプト人に、あの神は悪意をもって滅ぼすために民を導き出したと言わせるのですか。④あなたの僕、アブラハム、イサク、イスラエルと結ばれた契約（創世記12:1-3, 17:1-8, 26:2-5, 28:13-15）を思い起こしてください、と。モーセは契約の主の真実に訴えました。こうして主は、民にくだすと言われた災いを思い直して下さったのです。

モーセは神の契約の言葉を記した、二枚の掟の板を持って山を降りました。すると金の雄牛を囲んで行われる異教祭儀に興じる民の歌が聞こえてきます。モーセは激しく怒って、契約の板を投げつけて、砕いてしまいました。また、雄牛の像を取って火で焼き、粉々に砕いて人々に飲ませました。神の契約が破棄され、その処罰が行われたのです。責任逃れをするアロンに対して、モーセは神の前に立って言いました。「この民は大きな罪を犯しました。今、もしも彼らの罪をお赦しくださるのであれば……。それがかなわなければ、このわたしをあなたが書き記された書（命の書）の中から消し去ってください」。民の為の、モーセの命をかけた執り成しです。

主イエス・キリストはモーセのような預言者と言われました（申命記18:15-22を参照）。わたしたちの一切の罪のためにご自身の命を十字架に献げて贖いとなって下さったのです。（国方敏治）

テキスト 出エジプト記 32章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問45,46

〔単元のねらい〕

この聖書箇所は、神の選びの民であっても偶像礼拝の誘惑にさらされるのだという事実を語り示している。モーセの留守はイスラエルにとって信仰の試練であり、そこではみ言葉を待ち望む姿勢が試されることとなった。真の神礼拝はみ言葉にもとづく礼拝であることをもう一度確かめておきたい。

「ほんとうの礼拝」

先週は荒れ野を旅するイスラエルに、神さまが十戒を授けてくださったことを学びました。神さまは十戒を教え示してくださった後に、なおイスラエルが聞き従うべき数々のみ言葉をお語りになりました。ただし人々は神さまのみ声を直接聞くことをおそれ、み前から遠ざかったので、イスラエルのリーダーであったモーセひとりが神さまに近づき、神の山でそのみ教えを聞くことになりました。

神さまはみ言葉を語り終えられると、モーセに二枚の石の板を授けてくださいました。あの十の戒めをご自分の指で直接書き記された板です。神さまは十の戒めのみ声をもってお語りくださっただけでなく、文字にしてイスラエルにお渡しくださいましたのです。

ところで、そのようにモーセひとりがみ言葉を聞き、二枚の石の板をいただいてくることになりましたので、モーセはその間イスラエルの人々から離れることになりました。そのモーセの留守中に、ひとつの事件が起こったのです。

モーセの留守は長引きました。それで、人々はだんだん心細くなってきました。モーセが帰って来ないということは、神さまがもうわたしたちのことを忘れてしまわれたということではないだろうか。そして、これからはこの荒れ野の真ん中に放り出されて生きていかなければならないということではないだろうか。

そのように心配し始めたとき、イスラエルは神

さまが自分たちをエジプトの国、奴隷の苦しみから救い出してくださいましたことを忘れてしまいました。岩から飲み水を湧き出させ、天からマナを降らせて養ってくださった恵みも忘れてしまいました。また、聞いたばかりの十の戒めの恵みも忘れてしまいました。

そして、神さまが自分たちから離れてしまわれた以上、自分たちの手で自分たちの旅路を守ってくれる神をこしらえなければならぬと考えたのです。

人々はモーセの兄であるアロンに、どうかわたしたちのために神を造ってくださいと願いました。アロンは人々に、あなたがたが身につけている金の耳輪をはずして持ってきなさいと命じました。そして人々から集めた金の耳輪で金の雄牛の像を造って、これこそがあなたの神々だ、と言ったのです。祭壇が築かれ、人々は金の雄牛の前で飲み食いし、立っては戯れました。このようにして、イスラエルはまことの神さまと偽りの神とを取り換えてしまったのです。偽りの神にひれ伏してしまったのです。

十戒のひとつめの戒めと、ふたつめの戒めとをもう一度思い出してみましょう。

1. あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。
2. あなたはいかなる像も造つてはならない。

この世界にはさまざまな「像」があります。神さまは目に見えないお方ですから、見える絵や像

に仕立てられるはずはありません。けれども、人は神の像を造ります。それは罪のゆえです。罪によってまことの神さまを見る目がくもらされてしまっているために、人々は神を見えるかたちにしようとするのです。

けれどもそれらの像は、神さまが造られたものを神にすりかえているだけです。人間が「雄牛」を神にして、その前にひれ伏すというのは、おかしなことですね。それでも、それをおかしなことだと思わなくなるほどに、人間の霊の目はくもらされてしまったのです。

こうした像のことを「偶像」と言います。神さまは自分勝手な願いから偽りの神を造る人間のいとなみをお嫌いになり、またお裁きになります。神さまはまことの礼拝をお喜びになります。そしてわたしたちがまことの礼拝に生きることができるようのために、十戒を与えてくださったのです。

神さまの選びの民であるイスラエルでさえ、偶

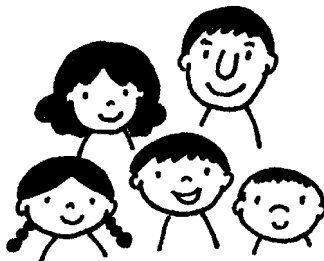
像礼拝のあやまちを犯してしまいました。それがモーセの留守中に起こったことを心にとめたいのです。モーセが神の山からいただいてきた二枚の石の板、すなわち十戒のみ言葉こそが大切であったのです。神さまはみ言葉を忍耐して待つ信仰をイスラエルにお求めになりました。けれどもイスラエルは待ち切れなかったのです。

偶像は命を持ちませんから、言葉を語ることもできません。神さまは目には見えませんが、生ける神であられ、み言葉をもってわたしたち人間と交わりを持たれます。み言葉をもってご自分のことをはっきりと教え示してください。モーセの留守中に、金の雄牛の前で人々がなした礼拝は偽りの礼拝でした。み言葉が語られず、また聞かれない礼拝は、それがどんな礼拝であってもほんとうの礼拝ではありません。神さまのみ言葉が語られ、聞き従われる礼拝こそがほんとうの礼拝なのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章3節、4節 (前半)

あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

あなたはいかなる像も造ってはならない。



〈ねらい〉

私たちが、神さま以外のものを神さまのように扱うことを、神さまはとてもお嫌いになる、ということを知る。

※地域の子どもたちの中には、家庭に仏壇があり、親がそれに手をあわせる姿を普通に見ている、今日の話がつまづきになる子どももいるかもしれない。まことの神礼拝についてきちんと語りつつも、偶像礼拝の問題はデリケートに扱う必要があることを忘れずにいたい。

〈展開例〉

今日のお話には「偶像礼拝」という難しい言葉が出てきましたね。そんな難しいことは大人のすることですよ、なんて思っははいけません。偶像礼拝は私たちにもとても身近な、こわいことです。

モーセさんは、神さまのみことばを聞くために一人で神の山へ行っていました。その間、イスラエルのみんなは、はじめはちゃんとリーダーであるモーセさんの帰りを待っていました。しかし、何日待ってもモーセさんは戻ってきません。困ったイスラエルのみんなは、どうしたでしょう？

なんと、自分たちをエジプトから救ってくださった神さまのことを知らんぷりして、別の新し

い神を造ろう！ と言ったのです。そうしてみんなの手で造られたのが、金の子牛の像でした。（像は象ではないですよ。置物のようなものです）イスラエルのみんなは金ピカの子牛を見て大満足。その上、金の子牛を拝み、それに向かって礼拝を始めました。神さまは、そのようすをご覧になって、とても悲しまれたと思います。そして神さまはたいへんお怒りになりました。

今日のお話で、イスラエルのみんながしてしまった嘘の神さまを造り、それを拝んだ金の子牛の事件、みなさんは、この金の子牛の事件についてどう思いますか？ 「造り物の牛を拝むなんて、バカな話だなあ」、「私は金の牛なんて造ったことないから大丈夫だもん」、そんなふうに思うかな？ でも“金の子牛を造る”のがいけないこと、というわけではありません。本当の神さま以外の、他のものを拝んだり、大切にしたりすることが、してはいけないことであり、嘘の礼拝をささげることなのです。

神さまのみことばだけを大切にす礼拝をささげましょう。

〈お祈り〉

ただあなたのみことばにのみ聞き従い、本当の礼拝をささげることができるよう。アーメン。



〈ねらい〉

神様が喜ばれる礼拝をささげよう。偶像礼拝の意味を知る。

〈はじめに〉

礼拝、分級を通して、子どもたちに毎週み言葉が語られています。この一週間の奉仕者の準備や祈りを主が用いてくださいます。奉仕者の尊い働きを通して、確実に次の世代へと、福音が受け継がれていることを感謝しましょう。主が今、目の前に置かれている愛する子どもたちを生涯導いてくださり、信仰を持って歩み、又その信仰が受け継がれていくために、今日の分級の時間も祝福してくださるよう祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①モーセさんが山に登って留守の間、人々はアロンさんに何を頼みましたか。(1節)
- ②アロンさんは人々に、何を持ってくるように言いましたか。(2節)
- ③金の牛を見たイスラエルの人々は、何と言いましたか。(4節)

〈展開例〉

モーセさんは、山に登って、神様といっしょに過ごしました。その間に神様はたくさんのお話をお話をモーセさんにしてくださいました。全て話し終わると、神様は、先週学んだ、十のいましめ、十戒を書いた二枚の石の板を、モーセさんにお渡しになりました。

モーセさんの帰りをずっと待っていたイスラエルの人々は、長い間モーセさんが皆のところに戻ってこないで、だんだんと心配になってきました。心配するだけでなく、またまた心の中に文句が出てき始めました。そして、ついに、人々

はアロンさんによってしまったのです。「モーセさんはもう帰ってきません。だから、私たちを導いてくれる神様を、アロンさんが造ってください！」こんな願いをしてしまったのです。アロンさんはどうしましたか？アロンさんはきっぱりと断りましたか？いいえ、アロンさんは「みんなが着けている金の耳輪を持ってきてください」と言って、みんなの間違った願いを引き受けしてしまったのです。アロンさんは、金を溶かして、金の子牛を造ってしまいました。

しばらくしてモーセさんが山から下りてきました。モーセさんはびっくりしました。なぜなら、人々が、金の子牛のまわりで、大声で歌ったり、踊ったり、騒いでいたからです。金の子牛を神様として拝んでいたからです。これを「偶像礼拝」と言います。モーセさんは激しく怒りました。そして、神様からいただいた二枚の石の板を地面に投げつけて、壊してしまいました。金の子牛も火の中に投げ込んで、粉々にして、人々飲む水の中に入れて、みんなに飲ませました。それから、「本当の神様に従う人は、私のところに集まりなさい」と言いました。そこには、金の子牛を礼拝しなかった、レビという部族がモーセさんの所に来ました。他にも自分たちがしたことが本当におわかったと神様にごめんなさいと言えた人々も集まってきました。最後まで悔い改めなかった人々は神様によって滅ぼされてしまいました。

神様は、人の手で造られるものではありません。神様は私たちの目には見えませんが、御言葉を通して、私たちを守り、導き、育ててくださるお方です。神様は私たちをいつも見てくださっています。このことを信頼してこの神様を礼拝しましょう。

〈お祈り〉

神様、目に見えないあなたを信じる子どもにしてください。そしてあなたが喜ばれる礼拝をさせてください。アーメン。

〈ねらい〉

霊であり、目に見えない神様を、聖書の御言葉に従って、正しく礼拝をする。

〈ワーク〉

1. モーセさんが、しばらくシナイ山から（ ）来なかったので、イスラエルの人たちは、神様に（ ）と思い（ ）になった。
2. 岩から（ ）を出してもらったり、天から降ってくる（ ）をいただいていることを忘れ、また、もらったばかりの（ ）の言葉を忘れてしまいました。
3. そして、みんなから集めた（ ）の耳飾りで、（ ）の（ ）を造りました。
4. イスラエルの人たちは、その（ ）が、私たちを（ ）から導いた（ ）だと言って、それに向かって（ ）しました。それを見た神様は、非常に（ ）になりました。
5. 人の手で造った像のことを（ ）と言います。それを礼拝することを（ ）（ ）と言います。（ ）の神様を礼拝していることになります。

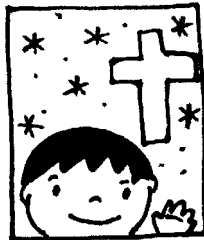
6. 本当の神様は（ ）ですから、目には（ ）ません。だから神様は、（ ）を非常に（ ）になります。
7. （ ）の（ ）を聞いて、それに従い、目には見えないけれども、（ ）ける（ ）の神様を正しく（ ）、礼拝しましょう。

〈祈り〉

神様、イスラエルの人たちは、金の子牛の像を造り、それに向かって偶像礼拝をしてしまいました。私たちは、目には見えませんが、聖書の御言葉に従って、正しく神様を礼拝することができますように。

〈答え〉

1. 降りて、見捨てられた、不安
2. 水、マナ、十戒
3. 金、金、子牛
4. 子牛、エジプト、神様、礼拝、お怒り
5. 偶像、偶像、礼拝、偽り
6. 霊、見え、偶像礼拝、お嫌い
7. 聖書、御言葉、生、真、信じ



〈ねらい〉

偶像礼拝を嫌われる神様を覚える。

〈展開例〉

①今日の箇所ではイスラエルは、自分達で金の子牛という「まがいモノの神」を造って、神様を怒らせる。人々が「まがいモノの神」を造りだした原因は何だろう？ それは「自分を導いてくれる存在が確認できない」という不安。人は自分を未来へと導く確かな手掛かりがないと不安になる。それは当然なこと。人は神様がいないと生きていけない者として創られたからだ。だが困ったことに人間は未来への確かな手掛かりを履き違える。墮落から芽生えた罪のせいだ。今回、イスラエルは不安にかられて、キラキラと輝いて、力強く見えて、快樂によって不安を忘れさせてくれる、そんな「神」を欲しがった。

Q. 皆はどうだろう？ 神様に従うことが人生の中心と教えられながらも、「そう言うが立派な仕事についてお金を稼がなくては。この世界はお金で動いているんだから。」「そう言うが、色々な能力を身につけなくては。この世界は強い者が勝ち上がるのだから。」「友達や恋人との楽しみを手に入れなくては。この世界は自分が楽しむためにあるのだから。」こんなふうに、自分の人生の確かな手掛かりをキラキラと輝いて見える「お金」や力強く見える「才能」、不安を忘れられる「快樂」に見出してはいないだろうか？

②もちろん「お金」も「才能」も「快い楽しみ」も神様がくれる恵みだ。でもそれは神様と一緒に生きることを味わうための恵みである。いかなれば神様との人生を喜ぶという目的のための手段だ。この手段が人生の目的、もしくは人生の確かな導きが変わるとき、君にとっての「神様」は造りモノのまがいモノにすり替わる。神

様は「わたしのほかに神があってはならない。」こう言って、自分達がひれ伏して従う人生の確かな導き手を人間が創作することを禁止された。

③「自分で神を造り出す」ことはなぜそれほどいけないのか？ ひとつは、人間は神様と親しく生きていくために存在しているのに、道理が成り立たなくなるから。だが、それだけじゃない。もっと神様を身近に思えばどれだけのことがわかるだろう。もし自分に世界のすべてを自由にできる力が在り、自分が身を投げ出して助け出した大切な人がいるとする。その相手は自分では生きていけない弱々しい相手だ。だから君がその相手に「私を信じろ！ 私はお前のことをこれからも絶対に守り抜く！」と誓ったとする。それなのに「いやあ、あなたでは物足りない。私はお金や自分の力を信じる。快樂に身を埋めていたほうが安心だ。」こんな返事が返ってきたら、どれだけ腹立たしく、悲しいか。その相手はどれほど愚かしいことか。誰でもわかる。

④イスラエルは神様の怒りを買った。しかし、神様は大切な者達を投げ捨てたままにしない。まがいモノの神ではなく、生きていてみんなを導く力ある本物の神は「私へと向きを変えるように」と何度も訴えかけられる。この訴えは礼拝の場で皆にも投げかけられている。私達の神様を見つめる目は弱い。それは一週間ももたないほどに。だから私達は週に一度、この場所で自分の神様を確認し力をもらうのだ。一週歩みの中で神様を見失うことがないように、この日、この心に神様の思いを刻みたい。

〈祈り〉

あなただけが私の神様です。アーメン。

〈神の指示に基づく幕屋建設〉

この40章では、神の幕屋建設についての命令が記されています。しかし、神は何の準備もなくイスラエルの民に幕屋建設を命じられたのではありません。神はモーセを通して35章4節以降、幕屋の建設のための準備について細かく指示なされてきました。そこでは幕屋がどのような材料でどのように作られるべきか、幕屋の内装に至るまで細かく規定されていました。幕屋の中に置く様々な祭具や備品、祭司の服についても細かく指示されました。神は事前の準備を民にさせた後、いよいよ幕屋の建設を命令されました(40:1, 2)。

しかし、ここでも神は既に準備させていた幕屋の備品や祭具について、それをどのように配置するかについて事前に指示をなさいました(40:3-8)。さらに、神はモーセに対して、「幕屋とその中のすべてのもの」を聖別するように命じ(40:9-11)、アロンとその子らに対しても油を注いで聖別するように命じられました(40:12-15)。このように神は、幕屋建設の準備からその最終的完成に至るまですべての面で細かく指示したのです。また、モーセも神の指示どおりにすべてを行ないました(40:16-33)。

〈幕屋建設から教えられること〉

幕屋はイスラエル共同体が神に礼拝を献げる場所です。しかし、神はその幕屋の建設において、このような細かい指示をイスラエルの民になさいました。ここからわたしたちは、神礼拝が人間の主観的な行為、恣意的な行為ではないということを教えられます。神を礼拝する目的は人間のためではありません。それは神の栄光のためです。だからこそ神は幕屋建設にあたって、神ご自身の意志をはっきりとイスラエルの民に示されたのです。また、神は幕屋とその中のすべてのものを聖別なさいました。これは幕屋がどんなに人間にとって重要であろうと、神のものであることを意味しています。幕屋も、幕屋での礼拝も神の栄光のためにあるのです。神は幕屋建設を命じること

によって、イスラエルの民を神の栄光をたたえる礼拝共同体として形成してくださったのです。

〈完成した幕屋における神の臨在〉

40章34節にあるように、完成した幕屋を雲が覆い、主の栄光が幕屋に満ちました。雲は神の臨在のしるしです。幕屋は単に神を礼拝する場所というだけでなく、神ご自身が臨在してくださる場所です(33:9を参照)。神は幕屋に臨在することによって、イスラエルの民のただ中に住んでくださり、民と共にあってくださいます。40章35節を見ると、主の栄光が満ちた臨在の幕屋にモーセが入ることができなかつたとあります。けれども、これは主の臨在に人間が近づけないということをお教えているわけではありません。主の臨在にあずかるには主の招きが必要であることを教えるものです。神は民を幕屋へと招くことによって、御自身の臨在の中に入れてくださるのです。

しかし、幕屋の中だけが神の臨在の場所ではありません。36節にあるように、雲は幕屋を離れます。神は幕屋の中だけでなく、全地に満ちています(詩編72:19、イザヤ6:3)。だからこそ神は、38節で、「昼は主の雲が幕屋の上であり、夜は雲の中に火が現れて、イスラエルの家のすべての人に見えた」とあるように、民がどこにいても共にいてその旅路を導かれたのです。けれども、民がどこにいても神の臨在にあずかることができるのは、彼らに主の栄光が満ち溢れる特別な場所である幕屋が与えられているからです。そして、彼らが幕屋において神を礼拝する民であるからです。イスラエルの民が幕屋での神礼拝を通して主の満ち溢れる栄光をたたえる民であるからこそ、どこにあっても神は民と共にいてくださるのです。

新約において神の幕屋とはイエス・キリストが共にいてくださる場所です。つまり、キリストの体である教会こそが神の幕屋です。わたしたちもまた主の日の礼拝を通して神の栄光をたたえ、神の臨在にあずかると共に、神の導きの中で一週間の旅路を神と共に歩むのです。(弓矢健児)

テキスト 出エジプト記 40章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問43～50

〔単元のねらい〕

宗教改革記念日であるので、できれば、それとの関連で語ることができればと願う。とくに神礼拝のすべては、人間が勝手に考え出したものでなく、神様からの啓示によることを子どもたちに知ってもらいたい。モーセが主の命じられたとおりに行ったことが繰り返し記されていることが重要であろう。なお、説教展開例は小学校高学年を意識した。

「神さまが命じられたとおりの礼拝」

愛する子どもたち、おはようございます。

今から490年以上の昔、ヨーロッパのドイツ、ヴィッテンベルクという町のお城の教会で、こんなことがありました。その教会の扉に、マルチン・ルターという修道士さんが、『九十五箇条の提題』という文書を貼り付けたのです。このことがきっかけとなって、教会を聖書の教えに従って改革して行こうという運動が広まって行ったのですが、今日の主の日は、そのことをおぼえる「宗教改革記念日」です。

宗教改革は、何よりも、教会改革で、とくに教会の“命”と言える礼拝を聖書の教えに従って改革しようという、礼拝改革の運動でした。要するに、その頃は、教会の礼拝が、聖書の教えに従って行われていない状況だったので、それをもう一度、聖書の教えに従って、神さまのすばらしさがたたえられるような、神さま中心の礼拝に戻そうとしたわけです。聖書の教えに従って、というのは、神さまのご命令に従って、ということです。それで、今日は、宗教改革記念日ですから、神さまのご命令に従って礼拝することがどんなに重要かということを、時代はもっともっとさかのぼりますが、今からおよそ3500年以上も昔だけでも、神さまによってエジプトから救い出されて、荒れ野を旅していた、モーセさんとイスラエルの人たちが、その荒れ野で、神さまのご命令に従って、礼拝するようになった様子を見ておきましょう。

神さまは、モーセさんに「臨在の幕屋」を建てなさいと命じられました。この臨在の幕屋は、荒れ野で、神さまがイスラエルの人たちと一緒にいてくださる場所、そして、イスラエルの人たちが神さまを礼拝して、神さまのすばらしさをほめたたえる場所として与えられたものです。神さまは、イスラエルの人たちがエジプトを脱出して二年目の元日、一年の最初の日に、今まで、やっぱり、神さまのご命令の通りに作って来た、いろんな品々を配置して、「臨在の幕屋」を組み立てるようにとお命じになったのです。

〈臨在の幕屋の絵などを見せながら〉

はい、これが、「臨在の幕屋」です。それで、特に大事な場所、幕屋の心臓に当たる場所ですが、それは、このような四角いテントの中に「至聖所」と呼ばれる場所が作られました。それで、モーセさんが神さまのご命令の通りに行ったことがこのように書いてあります。20節、21節です。「次に、彼は掟の板を取って箱に入れ、箱に棒を差し入れ、箱の上に贖いの座を置き、その箱を幕屋の奥に運び入れた。そして、至聖所の垂れ幕を掛け、掟の箱を隔てた。主がモーセに命じられたとおりであった」。至聖所の中には、掟の箱、普通、契約の箱と呼ばれる箱が配置されました。実は、その箱の上の「贖いの座」に、天から、神さまが降ってお出でになって、イスラエルの人たちに語りかけられ、イスラエルの人たちと一緒にいてくださ

るのです。この至聖所は、幕屋の他の部分と垂れ幕で仕切られました。それは、罪ある人間は、完全に聖なる神さまと直接にはお会いできない、お会いすると、罪ある人間は滅ぼされるしかないからです。しかし、この幕屋で、神さまのおそば近くで、神さまにお仕えする仕事をするように命じられた人たちがいました。その人たちが、モーゼさんのお兄さんのアロンさんとその子孫の人たちでした。祭司と言います。15節に、「あなたは、彼らの父に油を注いだように、彼らにも油を注ぎ、わたしに仕える祭司としなさい。彼らがこのように、油を注がれることによって、祭司職は代々にわたり、永遠に彼らに受け継がれる」という神さまのご命令が書いてあります。

さて、モーゼさんが、神さまのご命令の通りに、臨在の幕屋を組み立てて、それが完成すると、雲が幕屋を覆って、神さまの栄光、すばらしさが幕屋に満ちました。雲は、神さまがおられることの中に目に見えるしるしです。ところで、神さまは、完全に純粋な霊でいらっしゃる。霊ですから、人間の目には見えません。しかし、神さまは、雲を御自身が一緒にいらっしゃることに目に見えるしるしとしてくださったのです。それで、神さまが、契約の箱の贖いの座に降ってこられると、雲が幕屋を覆い、神さまの栄光が幕屋に満ちて、モーゼさんは幕屋に入ることができませんでした。そして、イスラエルの人たちも、荒れ野の旅へと出発することができませんでした。雲が幕屋を離れて昇ると、モーゼさんとイスラエルの人たちは出発できたのです。神さまは、イスラエルの人たちから決して離れることなく、昼は雲によって、夜は雲の中の火によって荒れ野の旅を導いてくださいました。

今日の聖書の箇所から教えられること、それは、神さまを礼拝することは、神さまのご命令の通り

に行うことです。人間が考え出すようなものを礼拝に持ち込んではいけないということです。たとえば、先週のお話のように、神さまを金の子牛のような、目に見える形にあらわして、拝んではいけないのです。神さまは命じられました。「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」(出エジプト20:4, 5)。

モーゼさんたちが、神さまのご命令の通りに、礼拝を行うようになったことは、このとき、モーゼさんが、神さまのご命令の通りに、礼拝の場所、「臨在の幕屋」を組み立てたことに示されています。16節にこう書いてあります。「モーゼは主が命じられたとおりにすべてを行った」。

目には見えない神さまを礼拝するには、神さまが命じられた通りに礼拝することです。イエスさまはこう教えてくださいました。「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」(ヨハネ4:24)。それで、今も、わたしたちが、神さまのご命令の通りに礼拝するとき、神さまの栄光が輝いて、神さまのすばらしさがあらわされます。今、わたしたちが、教会学校の礼拝をしていて、モーゼさんのときのように雲がこの部屋を覆うことはありません。でも、聖霊なる神さまがわたしたちと一緒にいてくださいます。そして、御言葉の説教を通して、わたしたちに語りかけてくださいます。

今日、宗教改革記念日にあたって、もう一度、神さまのご命令の通りに礼拝することの大事さをおぼえて、これからも、神さまのすばらしさがあらわれ、神さまが喜んでくださる礼拝をみんなでおさげして行きましょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 40章16節

モーゼは主が命じられたとおりにすべてを行った。

〈ねらい〉

「幕屋建築」を通して、礼拝の大切さ、礼拝によって与えられる恵みを感じる。

〈展開例〉

エジプトを出発したイスラエルの人たちは、40年も旅を続けました。旅の間、人々はテントで生活しました。「出発！」となると、人々はテントをたたんで、次の所まで運んでいきます。礼拝はどうしていたんでしょう？ 旅の先々に教会があったかな？ いえ、荒野の旅でしたから、教会（神殿）はありませんでした。神様は、その代わりに、イスラエルの人たちが礼拝をするために、持ち運びできる幕屋を、神様の指示どおりに作るように命じられました。木で枠を作り、そこに布や動物の皮をかけてつくりました。その中心は、大切な至聖所と聖所です。その外には庭があって、さらに外側は亜麻布と柱とでできた囲いがありました。人々はこの庭のところで、礼拝したんでしょう。旅のときには、幕屋を分解して、皆が力を合わせて運んだんでしょう。皆で幕屋を運ぶ真似をしてみましょう（重い荷物を担ぐ真似をして歩く）。

大変ですね。そんなに大変なのに、どうして、神様は幕屋を作るように命じられたんでしょうか？ それは、礼拝がとっても大切だからです。そして、幕屋は、旅をしていても、神様がイスラエルの人たちと一緒にいてくださることの印でした。神様は、「正しく」礼拝することも、大切なこととして命じられたんですよ。

今は、幕屋の代わりに教会で礼拝をします（運ばないでいいからよかった！）。私たちは、教会で礼拝をささげ、喜んで、神様のみ言葉を聞きま

す。そのとき、私たちの目には見えなくても、イエス様が私たちと一緒にいてくださるんですよ。今日は「宗教改革の記念の日」です。それは、教会が、神様が聖書に教えてくださったように、正しく、喜びに満ちた礼拝をするための運動の始まりでした。

〈工作とお話の続き〉

「幕屋建設」のつもりで、折り紙で箱をつくる。できたら一つを皆の真ん中に置く。

箱を見ながら、荒野にいる間、イスラエルの人たちは、幕屋を中心に生活していたことを、想像する。十二部族は、幕屋を中心に、それぞれに割り当てられた場所に集まって、テントで生活した。

幕屋には昼の間、雲が覆っていた。それは神様がそこにおられることを示す印。（綿のようなものをかけてみる）。夜は、暗いから雲は見えない？

でも、雲の中に火が現れて、ちゃんと見ることができた。不思議！

雲が幕屋から離れたら、出発の合図だった。そして、イスラエルの人たちが移動している間、「昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった」（出エジプト13:22）。

〈お祈り〉

私たちの天のお父さま。今日も私たちを教会に集めてくださって、皆と一緒に礼拝・分級をすることができてありがとうございます。イエス様が、私たちと一緒にいてくださってありがとうございます。イエス様のお名前によって、お祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様が教えてくださった礼拝を守り、従う。

〈はじめに〉

今日は宗教改革記念日です。今の礼拝が当たりまえのようにささげられています。多くの戦いと犠牲を通して与えられたものです。御言葉の教えに従い、神様中心の礼拝が続けられています。子ども礼拝のプログラム、内容を子どもたちと確認しながら、豊かな礼拝がこれからもささげられますよう祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ① モーセさんにお話しをしたのは誰ですか。(1節)
- ② 第一の月の一日、神様はモーセさんに何を建てなさいと言われましたか。(2節)
- ③ 神様はモーセさんにたくさんの命令を出しました。モーセさんは神様の言われたとおりにしましたか。(16節)

〈展開例〉

今、私たちは、教会にいます。もう一度よくこの教会を思い出して見ましょう（実際に子どもたちと歩いてもいいかもしれません）。玄関外には何がありますか？（説教題や集会案内の看板など）玄関には、受付や聖書讃美歌、週報ボックス、掲示板などがあります。礼拝室に入ると何がありますか。イス、机、オルガン、ピアノ、講壇、洗礼鉢、マイク、スピーカー……など。私たちは、大人の人たちに、全部用意していただいて、毎週礼拝が守られていますね。礼拝プログラムはどうでしょう。毎週毎週、同じ方法で礼拝がささげられています。これもちゃんと祈りをもって考えられたプログラムなんですね。偶然にこういうやり

方になっているわけではありません。

ずっと昔のイスラエルの人々にも、神様は神様を礼拝する場所をつくることを命令されました。それまでは、特別な場所はなかったのです。神様を礼拝する場所のことを、このときは「幕屋」と呼びました。イスラエルの人々は旅をしますから、幕屋は組み立て式で持ち運びができるものでした。今の私たちの教会とは違いますね。神様はモーセさんに、細かに、幕屋の大きさや中にどんなものを置いたらいいのか、詳しくお話になりました。そして、人々は、モーセさんの言われるとおり、心から進んで、喜んで、幕屋を作るための材料をささげました。また、ベツアルエルとオホリアブという神様から特別に知恵が与えられた人が一生懸命心を込めて働いて、皆も協力し、幕屋を建てる準備をしました。それから、幕屋が組み立てられ、たくさんの礼拝するための道具が、決められた場所に一つひとつ置かれました。モーセさんは、神様から言われたとおりであることを確認して、とても喜びました。

この幕屋の一番大事なお部屋が「至聖所」と呼ばれる奥の部屋で、そこには、神様がもう一度くださった十戒を書いた板が、契約の箱に入れられました。罪がある人間は入ることができない聖なるお部屋でした。手前の部屋と幕で仕切られ、手前の部屋には、パンを置く机や、明かりをともし金のしょく台、香をたく祭壇がありました。モーセさんは神様が言われたとおりの幕屋を組み立てました。自分で勝手に作ったのでもなく、自分の好みで飾ったのでもありません。神様はこの幕屋をとても喜んでくださったしるしとして、雲で覆い、神様のご栄光で満たされました。

〈お祈り〉

神様、私たちの教会を、礼拝を、神様のご栄光が現れるものとして祝福してください。アーメン。

〈ねらい〉

すべて神さまのご命令どおりに幕屋を建て、礼拝をささげたモーセの神さまに対する姿勢を通し、礼拝が神さまのご命令に従って、神さまの栄光をあらわす為にささげるものであることを学ぶ。

〈ワーク〉

幕屋の絵などを見せながら、聖書を開き下記の問いに取り組みましょう。

【復習】

先週の学びはモーセがなかなか山から下りてこないことにイスラエルの民が不安を覚え、神さまに背き十戒の戒めを破った箇所でした。

1. 神さまは何を見て、イスラエルの民に対してお怒りになりましたか？

(解答例：金の子牛への偶像礼拝)

【1～7節】

2. 神さまはモーセに何を造るように命じられましたか？

(解答例：臨在の幕屋)

【8～11節】

3. 神さまは油を使って幕屋やその中の全てのものをどうするように命じられましたか？

(解答例：全てのものを聖別する)

【12～16節】

4. 神さまはアロンとその子らを何の働きに召されましたか？

(解答例：祭司)

【17～33節】

5. 幕屋の奥の至聖所に十戒が入った契約の箱を置くなど、モーセは全て神さまの命じられたとおりに行いましたか？

(解答例：全て神さまの命じられたとおりに行った)

【34～38節】

6. 幕屋が完成するとどうなりましたか？

○に入る言葉は？

「○は臨在の幕屋を覆い、主の○○が幕屋に満ちた。」

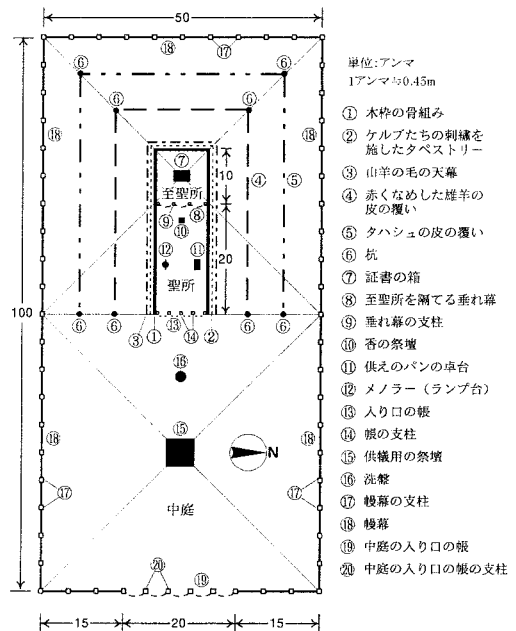
(解答例：雲／栄光)

7. 今のわたしたちにとっての「幕屋」とは何にあたりますか？

(解答例：教会)

〈祈り〉

天の父なる神さま、あなたの尊いお名前を賛美します。モーセがあなたに命じられたとおりに幕屋を建て、神さまの栄光をあらわすために礼拝をささげたことを学びました。私たちも神さまを中心に神さまのために礼拝をささげ、み言葉の恵みに感謝して一週間の歩みが守られますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



(K. Kochによる『旧約新約聖書大辞典』より、一部修正)

9 幕屋と中庭

出典：

岩波書店『旧約聖書Ⅱ 出エジプト記 レビ記』

〈ねらい〉

神様が与えてくださっている礼拝の喜びを見つめ直す。

〈展開例〉

①今日の箇所は、神様がイスラエルに礼拝の場として「幕屋」を造るように求められ、それが実現したことを伝えている。イスラエルに礼拝が与えられた場面と言える。今日の箇所は出エジプト記の最後の部分である。物語の結末、話の最後とは重要なことが書かれている部分。つまり、エジプトから救われた者達にとって「幕屋」がとても大事ということだ。もう少し言うと、神様に救われた者達のストーリーは「礼拝」という結末を迎えるということ。聖書は、それほどに「礼拝は特別なこと」と君達に告げる。

Q. では、皆にとって礼拝とはどんな時間だろうか？「話が長い」「退屈でつまらない」こんな風に感じる時があるかも。反対に「元気がでる」「楽しい」こんなときもあるだろう。礼拝への感想は様々だろうが、「礼拝とは何なのか」と問うなら、その答えは「皆で神様と心を通わせる場所と時間」である。神様は救いだした者達と心を通わせるための場所と時間を求められ、それを実現された。これが「幕屋」。

②「礼拝は大切」と言われて、実感のある人は「ああ、そうだなあ」と思える。でも実感のない人は「そうは言ってもなあ」と思うかもしれない。モノの大切さは、それが無くなったことを考えるとわかりやすい。礼拝が君の生活からなくなるとどうなるのか？礼拝が無くなれば、神様と心通わせる機会がなくなる。すると、神様がいるんだか、いないんだかよくわからなくなってくる。先週、皆は「人生を導くモノがな

いと人は不安になる」と聞いた。そして人は不安が嫌なので自分で「人生を確かにするモノ」を決めてそれを自分の人生の確かな手掛かり、「神」に仕立て上げる。だがこの世界は神様と人間と一緒に生きる未来を目指して進んでいる。まがいモノの神を慕い続ける者に未来の居場所はない。平たく言えば「いつか滅び去る」。短く整理すると「礼拝なし」⇒「不安」⇒「神をねつ造」⇒「滅びる」ということ。生活の中に礼拝があるかどうか君の未来を左右する。反対に礼拝で神様と心通わすことが出来たなら、それは安心となり、神様を造るのではなく神様に自分という人間を造りかえられて、いつまでも続く喜びへと君は至る。

③だが神様と心を通わせるためには相手の思いを知らなくてはならない。人間もそうだが「思い」は「言葉」となって現れる。皆がどれだけ自分の思いを投げかけても、神様の思いを受け取らなくては一方通行。礼拝では説教を通して、君達に神様の思いが投げかけられる。もしそこで言葉がわからなければ礼拝は退屈な場かもしれない。でも、君達は成長著しい中学生である。必ず言葉は少しずつわかっていく。神様の言葉がわかってくると礼拝は少しずつ神様がわかる場所になっていく。礼拝のあるところに神様は必ずおられる。そのハッキリ度は成長期の君達に個人差があるだろう。それぞれ今受けている神様のハッキリ度が、礼拝のある生活の中でますますクッキリ鮮やかにされることを願う。

〈祈り〉

私達と心通わすことを求められる神様。「私達を愛しておられるあなたに確かに祈られる！」とますます、ハッキリわかるようにしてください。アーメン。

〈はじめに〉

イスラエルの民は出エジプトの翌年には、カナン
の南の国境に位置するカデシュ・バルネアに到
着します。本来ならば、その後すぐにも、カナン
に入ることができたのです。神は当初、そのた
めにイスラエルの民をそこに導かれました。けれ
どもこのいちばん大切な時に、イスラエルの民は
主に対して不信仰を示し、主に反逆しました。そ
のためイスラエルの民は、四十年間、荒れ野を放
浪しなければならなくなります。

〈カナンの土地の偵察〉

13章にはモーセが主の命令に従って、十二人
をカナンの土地を偵察させるために遣わしたこと
が記されています。モーセは十二部族の各々の部
族の中から一名ずつ代表を出させました (13:4
-16)。なぜなら、カナンの土地の偵察が特定の
部族や個人の働きではなく、イスラエル共同体全
体の使命であり責任であるからです。

偵察の結果、彼らはカナンの土地が、神が約束
通り「乳と蜜の流れる所」であることを確認しま
した (13:27)。しかし、彼らはその土地の住民が
強そうであったこと、すべての町が高い城壁に囲
まれて堅固であったことから (13:28)、カナンに
土地に上って行くのは不可能であると主張しまし
た (13:31)。また、偵察者たちは「アナク人はネ
フィリムの出なのだ」 (13:33) と言いました。ア
ナク人は背の高い人たちであったようですが、偵
察者たちは彼らをネフィリム (創世記6:4) の子
孫であると誇張しました。当時の人々はネフィリ
ムを恐ろしい巨人であると考えていました。こう
して偵察者たち (カレブとヨシュアを除いて) は、
カナンの土地が素晴らしい約束の地であることを
見たにもかかわらず、カナン人の姿と町を見て恐
れ、主の約束に反する誤った証言をしたのです。

〈民の反逆と神の裁き〉

14章には、偵察者たちの報告を聞いたイスラ
エルの民の神への反逆と、反逆の民に対する神の
裁きが記されています。報告を聞いた民は非常に

落胆し泣き言や不平を言いました。彼らはまたも
や出エジプトの恵みを忘れ、ついには新たな指導
者を立てエジプトに引き返そうとしました (14:1
-4)。こうした状況の中、カレブとヨシュアは
共同体に対して、「主が我々と共におられる。彼
らを恐れてはならない」 (14:9) と語りました。
けれども、共同体全体は二人の言うことを聞くど
ころか、逆に彼らを石で打ち殺そうとしました。
しかし、まさにその時、主の栄光がイスラエルの
人々すべてに現れたのです (14:10)。主は、イス
ラエル共同体を滅ぼし、モーセを強大な国民にし
ようと言われました。モーセの必死の執り成し
(14:13-19) の結果、主はイスラエルを滅ぼす
ことを思い留まられます。しかし、主の約束を信
じようとせず、主に反逆したイスラエルの民 (カ
レブとヨシュアを除いて、戸籍に登録された20
歳以上の者すべて) には、厳しい裁きが宣告され
ました (14:19-30)。すなわち彼らは誰一人約
束の地に入ることができず、四十年間荒れ野を放
浪し、最後には荒れ野で死ななければならぬと
されたのです (14:32-35)。さらに、共同体をモー
セに反逆させるために悪い情報を流した偵察者た
ちは、主の御前で疫病にかかって死んでしまいま
した (14:36-38)。

イスラエルの民は約束の土地カナンに入る一歩
手前まで導かれたにもかかわらず、結局、主の約
束を信じないで、主に反逆することで神の裁きを
招いてしまいました。つまり四十年にわたる荒れ
野の放浪という試練はイスラエル共同体の罪の故
に起こったことです。そして、その根本原因は彼
らが主を畏れるのではなく、人を恐れてしまっ
た点にこそあったのです。人間は主を畏れること
を忘れ、人を恐れる時、主に背いてしまうので
す。しかし、わたしたちはそれでも主がこの荒れ野
の試練を用いて、イスラエルの信仰を成長させ、つ
いには救いを成就されたことを忘れてはなりません。
(弓矢健児)

テキスト 民数記 13～14章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13,14

〔単元のねらい〕

聖書の首尾一貫したメッセージ、「神が我々と共におられる～インマヌエル～」がここにも示されている。このメッセージは、今の時代の子どもたちにとって、切に必要なメッセージであろう。主が共におられることによる平安と勇気が聖霊によって与えられる中で、子どもたちを一週間のこの世での生活へと見送ることができればと願う。

「主と一緒にいてくださるので」

愛する子どもたち、おはようございます。

今日も、モーセさんとイスラエルの人たちのお話をしましょう。

さて、神さまは、エジプトの国で奴隷として働かされていたイスラエルの人たちを愛して下さって、モーセさんをリーダーとなさり、エジプトの国から救い出してくださいました。働き盛りの男の人だけで60万人でしたから、女の人とかお年寄りとか子どもをあわせると、たぶん100万人以上の人たちが、エジプトの国を脱出したと思います。まさに民族の大移動です。それで、神さまは、イスラエルの人たちをどこに導こうとされたのでしょうか？ それが、今、パレスチナと呼ばれているカナンという土地でした。“乳と蜜の流れるカナン”と呼ばれていて、農作物がいっぱい収穫できる、豊かな土地でした。今日のお話は、イスラエルの人たちが、そのカナンにあともう少しのところに導かれたときのことです。

神さまは、モーセさんにお命じになりました。

「何人か、人をやって、カナンという所が、どんな所か、調べさせなさい」。

それで、モーセさんは、神さまのご命令に従って、男の人を十二人選んで、言いました。

「カナンという所に行って、そこがどんな所か、よく見て来なさい。そこに住んでいる人たちが、強いか、弱いかも、よく、見て来なさい」。

早速、十二人の男の人たちは、カナンという所に入って行きました。すると、“乳と蜜の流れる

カナン”と呼ばれているだけあって、そこには、おいしいぶどうとか、いろいろな果物がたくさんなっていました。けれども、大きく強い人たちが住んでいることにも気づきました。それで、男の人たちは、その果物を採って、モーセさんの所に帰って行きました。そして、みんなの前で言いました。

「カナンという所は、とってもすばらしい所です。こんなにおいしい果物がたくさんなっています。けれども、そこに住む人たちは、とても強いのです。もし、戦いをすれば、わたしたちは負けるでしょう」。

これを聞いて、イスラエルの人たちは、とっても恐ろしくなって、言いました。「カナンという所がとっても強い人たちが住んでいるんだったら、そんな所に入って行ったら、その人たちにやつつけられてしまうだろう！」。

だけど、十二人の内、二人の男の人は違ったのです。ヨシュアさんとカレブさんは、みんなの前でこう言いました。「こわがることはありません。神さまがわたしたちといつも一緒にいてくださるので、大丈夫です」。

さて、もし、みんながイスラエルの人たちだったとしたら、二つの報告を聞いてどう思う？

イスラエルの人たちは、ヨシュアさんとカレブさんの言うことは聞きませんでした。カナンの土地に住んでいる人たちは、大きくて強いから、そんなところに行きたくないと思ってしまったので

す。神さまは、イスラエルの人たちに、カナン
の土地に導くと約束して下さったのに、それを
完全に忘れてしまいました。そして、神さまが
いつも一緒にいて守ってくださることも忘れ
てしまいました。それで、カナン土地がすぐ
目の前でしたが、神さまは、すぐには導か
れないで、それから四十年かかって、ずっと
遠回りして、カナン土地へと導くことにな
されたのです。

神さまは、目には見えませんが、御自分
を信じるならば、いつも一緒にいて守って
くださると約束して下さいました。わたした
ちの時代では、主イエスさまがいつも一
緒にいて守って下さいます。主イエスさ
まは、天に昇られるとき、こう

約束して下さいました。「あなたがたに命
じておいたことをすべて守るように教えな
さい。わたしは世の終わりまで、いつもあ
なたがたと共にいる」(マタイ28:20)。

主イエスさまは、御自分がなされた約
束を簡単に破るようなことは決してなさ
しません。ちゃんと守って下さって、目
には見えませんが、いつも一緒にいて守
って下さいます。さあ、今日から始まる
一週間も、イエスさまが、お家でも、学
校でも、いつでもどこでも一緒にいて守
って下さることを信じて、安心して生活
しましょう。

(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] 民数記 14章9節 (後半)

主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。



〈ねらい〉

ヨシュアとカレブの行動を通して、わたしたちは決して強くはないが、主なる神様がわたしたちと共におられるので、恐れることはないということを知らせる。

〈展開例〉

テキストの背景や説教を振り返って、子どもたちと話し合いながら進めてよい。

- ・民数記には何が書いてありますか。
⇒イスラエルがエジプトを出てから、神様がお与えになると約束してくださったカナンの地に入る前までの約40年間の、シナイの荒れ野のできごとが書かれています。
- ・神様は、イスラエルとどんな約束をしてくださいましたか。
⇒13章2節、出エジプト記3章8節などを参照。
- ・乳と蜜の流れる土地と言われるカナンは、どんな所でしょう。
⇒乳（牛、ひつじ、ヤギ、らくだなどのミルク、そしてこれらから作られたヨーグルトやチーズなど）や蜜（蜂蜜やナツメヤシの甘い汁、果汁を煮詰めたものなど）が豊かにある所。ということは、家畜を育てるのに適して、花や果物のなる木がたくさん生えた所だったのでしよう。
- ・何人の人がカナンを調べに行ったでしょう。人数の意味は？ どのようなことが分かったでしょう。イスラエルが来る前に、どのような人たちが、どのように暮らしをしていたのでしょうか。
⇒13章2節、25～29節などを参照。十二部族の代表の人たちが行きました。強そうな人たち（アマレク人、ヘト人、エブス人、アモリ人、カナン人）が、城壁で囲まれた町を作って住んでいました。強いと思うので、巨人のよう

に大きく見えました。

- ・カナンを調べた結果を聞いて、そこへ行くことに、イスラエルの人たちは賛成しましたか。反対しましたか。報告は本当のことばかりでしたか。
⇒反対した人（13:31～33など）、賛成した人（14:6～9など）は誰でしょうか。それぞれの理由やどうしてそうなったのかなど。
- ・イスラエルの人たちは、神様とカナンに住む人たちと、どちらのほうがこわいと思ったのでしょうか。
⇒神様の約束を忘れて、カナンに住む人たちに恐れてしまいました。そのために、カナンを目の前にしながら40年も遠回りすることになってしまいました。
- ・今回のお話から、神様がどのような方であることが分かりますか。
⇒14章11節以下を参照。様々なしるしでイスラエルにご自身を示してくださる方、約束を守ってくださる方、辛抱強く待ってくださる方、共にいて導いてくださる方、それと同時に罪を憎み「罰すべき者を罰せずにはおかれ」ない方、など。

〈お祈り〉

イスラエルの人たちは、神様の約束を忘れ、エジプトから救い出してくださったことも、荒れ野でのどが渴いたときに水をくださったことも、おながすいたときにマナとウズラの肉をお与えくださったことも忘れ、神様に背いてしまいました。しかし、わたしたちは、いつも神様が一緒にいてくださることを信じたいと思います。どうか、毎日恐れずにすごすことができるよう、わたしたちを強めてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

神様は、どんなときにも私たちと共にいてくださいます。

〈はじめに〉

11月に入りました。今年も残り二ヶ月です。子どもたちは今日も元気でしょうか。クリスマスと共に喜び迎えることができるよう、今から礼拝出席を励まし、一人ひとりの存在を、神様は大事に思ってください、この分級の中でも、大事な一人ひとりであることを、いつも確認しあいましょ

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①神様は誰にお話をされましたか。(1節)
- ②神様はモーセさんに、イスラエルの人々をカナンの土地に行き、何をなさいと、言われましたか。(2節)
- ③カナンの土地に行き調べてくることはどんなことでしたか。(18～20節)

〈展開例〉

イスラエルの人々のカナンを目指しての旅はまだ続いています。カナンにだんだんと近づいたある日、神様は、モーセに言われました。「部族ごとに一人ずつ指導者を出して、カナンの土地を偵察させなさい」ということは、12人の男の人たちが、カナンがどんな所なのか、調べてくるということです。モーセさんは12人を選んで、「カナンがどういうところか、そこに住んでいる人たちは、強いかわいかな、たくさんの方が住んでいるのか、良い土地かどうか、城壁があるのか、木がたくさんあるか、そして果物を取ってきなさい」ちゃんと調べてくるように命令を出しました。12人は早速でかけました。

40日たって、12人はモーセとアロンのもとにカナンでとれた立派な果物を持って帰ってきました。そして、報告をしました。「カナンは乳と蜜が流れるすばらしい所でした。でも！そこに住んでいる人たちは強くて、町はしっかりと城壁で囲まれて、大きな巨人もいました。私たちがカナンに上っていくのは無理です」と報告しました。

それを聞いたイスラエルの人々はまたまたたくさん不平を言い始めました。「私たちをどうして、こんなところまで連れてきたのか？エジプトにいたほうが良かった。私たちがここで殺すつもりなのか」といつもと同じ文句です。

そう言って、騒々しくなったとき、12人の中の二人の指導者が立ち上がり、みんなを静めて言いました。その二人の名前は、ヨシュアさんとカレブさんと言います。彼らは言いました。「私たちが見てきたカナンは素晴らしい土地でしたよ。神様のみこころにかなう土地でしたら、必ず、神様が私たちに導き、与えてくださいます。確かに大きな強そうな人がいますが、恐れてはいけません。神様はわたしたちと共にいてくださいます。彼らを恐れてはいけません！」何と、力強い言葉でしょう。でも、残念なことに人々はヨシュアさんとカレブさんの言うことには反対して、残りの10人の指導者たちの言葉に従ってしまいました。

神様は悲しまれました。「私を信頼しないイスラエルの人々は、このまますぐにカナンの土地には入れさせない。」と言って、神様は、イスラエルの人々をまた40年旅を続けさせて、カナンまで導かれました。

〈お祈り〉

神様、私たちはすぐに恐くなったり、疑ったり、心配してしまう弱い者です。神様が共にいてくださることをいつも信じていることができる強い子どもにしてください。アーメン。

〈ねらい〉

イスラエルの民の姿をとおして神さまを信頼し、ゆだねることの大切さを学び取る。神さまが私たちといつも一緒にいてくださることを感謝し、神さまにより頼む者となるよう導く。

〈ワーク〉

聖書地図「2. 出エジプトの道」を見せながら、聖書を聞き下記の問いに取り組みましょう。

【復習】

1. モーセは神さまのご命令に従い「幕屋」を建て礼拝をささげましたが、現代の私たちにとっての「幕屋」は何でしょうか？

(解答例：教会)

【13章17～20節】

2. 神さまに命じられたモーセは、カナン土地のどんな事を偵察させましたか？

A：カナンまで行く道を迷わないように調べさせた

B：カナンに住む人や町の様子、土地が良いか悪いかを調べさせた

【13章27～29節】

3. 偵察に行ったカナンはどんな所でしたか？

A：何も無いひどい所だった

B：良い土地であったが、土地の住民は強そう
で町には城壁があった

【13章31～33節】

4. どうしてイスラエルの民はカナンへ行くことを恐れたのですか？ ○に入る言葉は？

「彼らは我々より○○」

「我々が偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を○○○○○のような土地だ」

(解答例：強い／食い尽くす)

【14章1～4節】

5. 偵察したカナンについて悪い情報を聞いたイスラエルの民はどうしましたか？

A：そのままカナンへ向かった

B：カナンのとなりの町へ行った

C：不平を言いカナンへ行くのをやめエジプトへ帰ろうとした

【14章6～9節】

6. 偵察をした者のうちヨシュアとカレブはどのように言って、カナン人を恐れているイスラエルの民を説得しようとしたか？ ○に入る言葉は？

「○が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない」

(解答例：主)

【14章33～35節】

7. 神さまの約束を信じないで、そむいたイスラエルの民は何年間荒れ野を放浪する試練が与えられましたか？

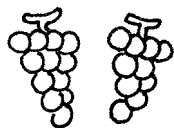
(解答例：40年間)

8. 私たちの時代では目には見えませんが神さまがいつも一緒に守ってくださいます。あなたはそのことを感謝し信じますか？

(解答例：神さまがいつも一緒にいて守ってくださることを感謝し、信じます。)

〈祈り〉

天の父なる神さま、あなたの尊いお名前を賛美します。神さまがいつも私たちとともにいて守ってくださることを感謝します。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様の約束は決断を伴うことを覚え、恐れずに神様を選ぶ信仰を求める。

〈展開例〉

- ①まず、荒筋を振り返る。今日の箇所ではイスラエルは約束の地カナンを目前にしていた。だがイスラエルは先住民を恐れ、カナンに入るのを拒んだ。それどころか、彼らはエジプトに戻るとさえ言いだし、神様の導きに抗い、神様に逆らった。しかし、全員ではない。偵察に遣わされていたヨシュアとカレブは恐れずに約束の地へ向かうようイスラエルに促した。
- ②ここには、約束の地の目前で、脅威を目の当たりに、人が現わした二つの信仰の姿がある。ひとつは、恐怖に支配され神様を見失い、神様の導きを無視し、衝動に駆られ神様の約束を放り投げる姿。彼らはこれまで神様に守られてきた自分も見失い、果てには約束をも失った。代わりに与えられたのは荒れ野で終える人生だった。もうひとつは、共におられる神様に心を支配されて、神様を見つめ、勇気を与えられ神様の約束に堅く立つ姿。彼らは荒れ野での生活を共にするがその後に約束の地へと入れられる。約束の地を目前に神様は最後の試練を与えられた。脅威によって試されたのは「私の約束を信じられるか？」という問いかけである。
- ③すべての人は、神様の約束を前に「私の約束を信じるか？」と問いかけられる。約束を耳にした者はこの問いに何かしらの仕方ではたき。君達もまた神様から「天国」を約束の地として与えられている。君達もまた約束の地を前に「私の約束を信じるか？」と問われる1人だ。「はい。信じます」堂々と答えられる人がいるかもしれ

ない。これは嬉しいこと。「いいえ。信じません」これは約束を拒否する応え方。他に「よくわからないから返事しない」このように約束を無視するのも一つの対応。沈黙によって答えを返すならば、その立場はNOの立場である。

皆はまだまだ、人生の途中。天国に行き着くそのときまで、色々な魂の成長や変化を味わう。今の皆の信仰は様々だが、人生の最後まで、君達は「私の約束を信じるか」という問いと向き合って生きる。

- ④約束を信じきれたヨシュアの言葉に注目したい。「主が我々と共におられる」この信仰の有る無しが、荒れ野で人生を終えるか、荒れ野を越えて約束の地に入るかの明暗を分ける。約束を信じる道を選ぶか、約束を捨てる道を選ぶかを分ける。約束を捨てた人々に、神様は一緒にいてくれなかったのか？ そんなことはない。エジプトからここまで、神様は御自分を現し続けた。海を割って救いを示し、天からマナを降らせ恵みを与え、幕屋を造って礼拝を設けられた。信じるのに十分なシチュエーションがあったのである。そのうえで約束を放り捨てるならば、神様はその人が望むとおり、御自分の約束を取り去られるだろう。
- ⑤君達にも、救い、恵み、礼拝が与えられている。イエス様の十字架の救い、毎日の中にある主の助け、毎日与えられる様々な恵み、そして神様と心通わせる時間。最後のときに神様と共にいることを忘れてしまわないように、これらの中で「神様が共にいること」に目を向け、約束を信じ抜く信仰を堅くされたい。

〈祈り〉

神様、共にいるとわからせて下さい。アーメン。

イスラエルの民は荒れ野での長い放浪の旅を経て、約束の地カナンへの入り口エリコのそばまで来た。その前にヨルダン川が立ちふさがる。エリコ付近のヨルダン川は「アラバの海すなわち塩の海(死海)」(17)まで間もなくの下流域で、川幅があった。さらに時は「第一の月」(ヨシュア4:19)、現代の太陽暦換算で4月であった。雪解け水と春の雨で「ヨルダン川の水は堤を越えんばかりに満ちていた」(15)。ここを乗り越えればエリコであったが、現代のように橋はかかってない。川幅の狭い上流部まで迂回するというのも考えられなくはなかったが、イスラエルの民が大人数の集団であったことを考えるとそれも困難であった。したがって、ただちにこの地点を渡ることは人間的にはとても不可能に見えた。

そんなイスラエルの民に示されたのは、今この所から、主の臨在を示す契約の箱が民の先頭に立ち、川を渡る、というものだった。主は「わたしがモーセと共にいたように、あなた(ヨシュア)と共にいることを、すべての者に知らせ」(7)、「生ける神があなたがたの間におられて、カナン人、……をあなたたちの間から完全に追い払ってくださること」(9)を示そうとされた。さらに、「第一の月」はイスラエルが出エジプトを果たした月であり、その記念として過越祭を行なう時期でもあった(出エジプト12章を参照)。主なる神様の導き、働きにより、葦の海の水がせき止められることで、イスラエルがエジプトでの奴隷状態から脱出するという、人間的には果たし得なかったことが成し遂げられた。ここでも主が先立って導かれることで、約束の地への道を開かれるのである。

祭司が契約の箱をかつぎ、その足がヨルダン川

の水際に浸ると、川上の水は「はるか遠くのツァタレンの隣り町アダムで壁のように立った」(16)。葦の海の「水は彼ら(イスラエル)の右と左に壁のようになった」(出エジプト14:22)出来事を連想させる。「これまで一度も通ったことのない道であるが、あなたたちの行くべき道」(4)は、こうして主によって切り開かれてイスラエルに示され、全イスラエルはすべてヨルダン川を渡ることができた。

エジプトから約束の地へ向かう旅において、イスラエルは葦の海、そしてヨルダン川に行く手を阻まれた。人間は邪魔に思えるもの、障害物に対して、目の前から立ち退いてほしいと思うのであるが、そう簡単に立ち退くものばかりではない。そこでわたしたちは障害物と思えるものを避け迂回することを願うが、それも実現するとは限らない。終末における完成を目指す、わたしたちの人生という旅でも、同様のことが当てはまる。

しかし、主がわたしたちと共にいてくださるとき、人間の目には立ちふさがる壁、障害物にしか見えず、行くべき道と見えなかったところで、主が道を切り開き、わたしたちを約束の地へと至らせてくださる。父なる神様はイエス様の進むべき道として十字架の死を示された。それは「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」とイエス様が願うほどのものであった。しかし父なる神様は十字架の死から栄光の復活への道筋を開き、イエス様を導かれたのである。キリストと結ばれ神様と共に生きる者とされたわたしたちにも、この恵みは与えられる。(吉田 崇)



テキスト ヨシュア記 3章
 参照カテキズム 子どもカテキズム 問13
 ウェストミンスター信仰告白 第7, 10, 14章
 ウェストミンスター小教理 問11, 20, 31

(単元のねらい)

主なる神さまのお約束は必ず成就することを確認する。

主はアブラハムに四百年、奴隷として仕えた後、四代目の者たちが戻ってくることを約束して下さった(創世記15:13-16)。そしてさらに主はモーセを指導者として立てられたときに、イスラエルをエジプトから救い出し、カナンに導き上ることを約束して下さった(出エジプト3:7-10)。ヨルダン川を渡るということは、これらの主の約束が果たされたことを意味する。

同時に、主はイスラエルの民に深い水深を持つヨルダン川を渡ることを求められる。これはイスラエルの信仰を改めて問うておられることを意味する。つまり、主なる神さまの御計画は確かに成就するが、わたしたちは主のご計画に無関心であることは許されない。わたしたちもまた、主なる神さまの救いのご計画に参加するために、主なる神さまの救いのご計画を受け入れ、信じ、主の御言葉に聞き従うことが求められる。こうした大きな主の救いのご計画に、わたしたち一人ひとりも置かれていることを、一緒に確認していただきたい。

「約束を果たしてくださる神さま」

エジプトの国において奴隷であったイスラエルの民に、主なる神さまはモーセをお立てくださり、救い出してくださいました。その後、四十年の時を経て、イスラエルの民は、いよいよ約束の地カナンに入ろうとしています。このとき、四十年前に指導者として立てられたモーセをはじめ、当時、成人であった人々はみな死んでいて、すでにヨシュアが指導者として立てられていました。

主なる神さまは、モーセにイスラエルをエジプトから救い出し、カナンへと導き上ること(出エジプト3:7-10)を約束して下さりましたが、この約束がようやく果たされたのです。しかし、イスラエルの民がカナンに入るということは、もっと昔、主なる神さまがアブラハムに約束して下さっていたことでした。創世記15章13-16節、「主はアブラムに言われた。『よく覚えておくれがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるそ

の国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである』」。

みなさん、主なる神さまに、明日のことをお祈りすることがあるでしょう。「明日、ハイキングに行くから晴れにしてください」って。そして、翌日になって、「神さまが晴れをお与えくださった」、あるいは、たとえ雨であっても、「雨は降って残念だったけれど、神さまがもっと良いことをお与えくださった」と、思うことがあるでしょう。そのように、すぐに神さまのお働きを確認することができることがあります。けれども、主なる神さまは、聖書の時代に約束して下さったことを、何百年、何千年してから約束を果たして下さる、ということもあるのです。

主イエス・キリストは、約2000年前にわたし

たちを救ってくださるために十字架にお架かりくださいました。今はまだ、神の国（天国）は来ていません。しかし、イスラエルの民を約束の地カナンに導き上げてくださった主なる神さまは、わたしたちを救い、神の国に導いてくださる時を、定めていてくださっています。だからこそ、わたしたちは、その時が遅いからといってはならず、神さまの約束を信じるのが求められているのです。

また、もう一つ重要なことを考えていきたいと思えます。約束の地カナンを目の前にしているイスラエルの民には、大きな困難が待ち構えていました。それは目の前にあるヨルダン川です。川を渡るための橋などありません。そして川は大きいのです。また、春先には雪解け水と春の雨のため水の量も多く深くなっています。大勢のイスラエルの民が渡ることなど、簡単に行くことはできません。エジプトを脱出して以来、四十年間にわたって夢見てきた約束の地カナンを目の前にして、イスラエルの民は、「やっとここまで来たのになぜ」と、非常に落胆したのではないのでしょうか。今まで一緒に旅を続けてきた多くの人たちの中には、子どもたちもいました。病気の人や歩くことが大変な人たちもいたことでしょう。リーダーとして立てられていたヨシュアは、「今さら、危険に立ち向かい、冒険してまで、約束の地に向かわなければならないのか？」とも思ったのではないのでしょうか。

エジプトを脱出したときに、葦の海が目の前にあり、後ろからエジプト軍が追ってきたときと同じような状況です。「なぜ同じような苦しみを神さまはお与えになるのだろうか」とも思ったことでしょう。あのときは、神さまによってリーダーとして立てられていたモーセが葦の海を開き、水をせき止めて、イスラエルの民を皆、渡らせてくださいました。そうです。神さまは、いつでもイス

ラエルの民と共にいてくださいます。そしてその後の40年の荒れ野の歩みにおいても、神さまは、日々の食べ物・飲み物を絶えることなくお与えくださいました。

神さまは、今もイスラエルの民と共におられます。祭司たちが担いでいた契約の箱と共に旅を続けていてくださるのです。契約の箱には、十戒の記された二枚の石の板が収められており、生ける神の御臨在のしるしです。

ヨシュアは、四十年前のことを思い浮かべつつ、今も一緒にいてくださる神さまの恵みと約束を信じて行動に出ます。ヨシュアは、まず祭司たちに、「契約の箱を担ぎ、民の先に立って、川を渡れ」と命令し、続けて民たちにも、「その後に続け」と命令しました。主なる神さまの恵みと約束を信じてヨシュアとイスラエルの民が行動したとき、神さまはヨルダン川の水をせき止めてくださり、イスラエルの民は皆、ヨルダン川を渡りきることができたのです。

みんなの毎日の生活においても、ヨルダン川の川のように、大きな壁となる試練や困難が繰り返し訪れます。しかしこうした苦しいときにこそ、わたしたちは今日語られたことを思い浮かべていただきたいのです。神さまはいつでもみんなと一緒にいてくださいます。そして神さまは、イエス・キリストの十字架を信じているみんなを、神の子どもとして、天国に導いてくださる約束をしてくださっています。そしてイエス・キリストが再び来られた時に、わたしたちは天国に入れられます。だからこそ、わたしたちの毎日の生活の中にある苦しみがあったとしても、神さまは、神の子であるわたしたちを必ず助け出してください。苦しみを乗り越える力を与えてくださいます。そのことを信じて、祈ることです。神さまは、いつでもわたしたちを守り導いてくださいます。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙 11章1節

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

〈ねらい〉

神さまは必ず約束を守ってくださる方であること、私たちとも約束をしてくださっていることをおぼえ、感謝したい。

〈展開例〉

みんなはあと40年したらどうなっていると思いますか？ ちょうど〇〇先生と同じくらいの大人のの人になっていますね。

みんなが〇〇先生くらいの大人のの人になるほどの間、イスラエルの人たちは荒れ野を旅していました。大変な旅だったから「もうだめだ」と何度もうきげそうになりながら、それでもがんばって旅を続けてきました。なぜなら、イスラエルの人たちには大きな希望があったからです。

その希望とは、神さまがイスラエルの人たちを約束の地カナンへ連れて行ってくださるというお約束のことです。ところがもうすぐカナンにつくというところで、深く水が多い、とても歩いてわたれない大きな川にぶつかりました。でも、イス

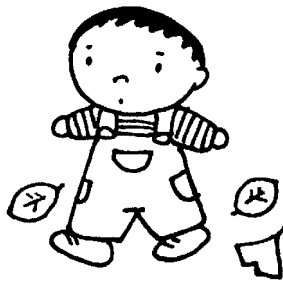
ラエルの人たちは神さまがきつとお約束を守ってくださると信じてまっすぐ進みました。すると神さまは川の水を止めてみんなが川を渡れるようにしてくださいました。

神さまはみんななどの約束を守ってくださり、イスラエルの人たちを守ってカナンへと連れて行ってくださったのです。神さまは私たちとも約束してくださっています。それは神さまの国へ私たちを導いてくださるというお約束です。

イスラエルの人たちとの約束を守ってくださった神様は私たちとの約束もお守りくださいます。どんなときでも一緒にいてくださり私たちを助け神さまの国へと連れて行ってくださるのです。みんなと一緒に喜んで神様についていきましょう。

〈お祈り〉

天のお父さま。あなたの約束に信頼して、あなたのみ言葉に聴き従うことができるように、私たちを強めてください。アーメン。



〈ねらい〉

私たちには難しい、無理だと思ふことがあつても、神様は必ずお約束を実現してくださるお方である。

〈はじめに〉

クリスマスのいろいろな行事の準備が進められていることでしょう。行事をこなすことだけに忙しくなりがちな私たちです。新しい子どもへの伝道もクリスマスは良い機会となりますが、まず、今、目の前に与えられている、神様がこの教会に、このクラスに招いてくださっている子どもを愛し、今日も導かれて、応えて来る事ができた子ども一人ひとりを喜んで、このクラスに暖かく迎えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①朝早く起きたのは誰ですか。(1節)
- ②イスラエルの人々とヨシュアさんは、何と言う川の岸に着きましたか。(1節)
- ③ヨシュアさんは、祭司たちに、どんなことを命令しましたか。(6節)

〈展開例〉

長い長い旅が続いて、いよいよイスラエルの人々は、カナンに到着しようとしています。今、目の前には、ヨルダン川がありました。そこを渡ると、神様のお約束なされた土地、乳と蜜が流れるところカナンです。長い旅の間に、モーセさんは死んで、イスラエルを導くリーダーはヨシュアさんでした。モーセさんはカナンに入ることはできませんでしたが、そこを目指して神様に従って一生懸命旅をしました。そして、それは今ヨシュ

アさんも同じです。もう目の前でゴールです。みんなどんなにうれしかったことでしょう。

でも一つだけ心配なことがありました。それは、このヨルダン川は、お水が一杯で、ゴーゴーと音を立ててすごい勢いでお水が流れているのです。ここを渡らなければカナンに行くことはできません。橋もなければ、船もありません。ぐるりと遠回りすることもできません。みんなは恐くなりました。でも、神様はちゃんとお約束を守られるお方です。神様は素晴らしい方法を持っておられました。ヨシュアさんは「神様が驚くべきことをしてくださいませ」と人々に言いました。

ヨシュアさんが命令しました。まず、契約の箱をかついだ祭司さんたちが、イスラエルの人々の先頭に立って歩きました。その後を決められたとおりの人が歩き始めました。目の前はゴーゴーと音を立てて流れるヨルダン川です。先頭の祭司さんたちが、恐がらず、川の中に自分たちの足をつけると、なんと、今まですごい勢いで流れていた川の水が止まって、川の底が見えて、そこを契約の箱を担いだ祭司さんたちが歩くことができたのです。その後をみんながぞろぞろと歩き、みんな向こう岸に無事に着くことができたのです。イスラエルの人々はずいぶん神様がお約束くださったカナンに着いたのです。

イスラエルの人々は、この驚くべき神様が自分たちにしてくださったことを見て、神様が自分たちといつも共にいてくださることを知り、神様を賛美しました。

〈お祈り〉

神様、私たちといっしょにいつもいてくださってありがとうございます。私たちに神様を信じる信仰と勇気を与えてください。アーメン。



〈ねらい〉

主なる神様のお約束は必ず成就することを確認する。私たちは神様のお約束を信じ御言葉を受け入れることができるよう、求めて祈ること。

〈ワーク〉

- この時代、主が認められたイスラエル人の指導者は誰ですか？（7節）
()
- 約束の地カナンを目の前にして困った事が起こりました。それは何ですか？
()
- 試練を前にしてヨシュアに、どの様にする様言われましたか？
「() を担ぐ祭司たちに、() の水ぎわに着いたら、() の中に立ち止まれと命じなさい」と言われた。（8節）

4. 神様に言われた事を信じ実行した時、何が起こりましたか？
()

5. 今日の聖書の学びを私達はどう受け止めますか？
()

〈祈り〉

神様、今日くださった御言葉をありがとうございます。私たちの毎日の生活にも、困ったことや苦しいことがおこりますが、神様はいつでも私たちを守り、乗り越える力を与えてくださいます。そのことを覚えていつもお祈りすることができますよう、導いてください。

〈暗唱聖句〉

信仰とは、望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認することです。

（ヘブライ人への手紙11章1節）



〈ねらい〉

神様は、私達に先だって道を切り開かれる御方であることに感謝する。

〈展開例〉

- ① 神様はついにイスラエルに約束の地を踏ませる。イスラエルは神様によって切り開かれたヨルダン川を渡り約束の地に入った。今日の分級ではこのとき「主の契約の箱」がイスラエルの先頭を進んで行ったということに目を留めたい。
- ② 「主の契約の箱」とは何なのか、皆は憶えているだろうか？ どんな箱なのかが出エジプト記の25章の10節にある（読みながら描いてみる）。色々、記されているが、特に注意したいのは、箱の中身とその蓋である。まず、箱の中身だが、そこには「掟の板」が納められていた。これは「十戒」の刻まれた石板のこと。十戒は神様とイスラエルが共に生きるための教えであり、この教えに生きるイスラエルは神様にとって特別な民であると神様は約束された。つまり、箱の中には神様の約束が詰まっていると言える。次に蓋。この蓋がどんなカタチかよくはわからないが、「贖いの座」という装飾を施された長方形の板が蓋になっていた。細かいことはともかく、注意したいのは、25章22節の言葉。「わたしは……贖いの座の上からあなたに臨み」とある。「臨む」とは「顔を向かい合わせる」とか「目の前に」という意味。つまり、神様は蓋の上からモーセと面と向かわれる、ということ。大人のお祈りなんかで「神様の御臨在」なんて言葉が使われることがあるが、これは「神様が面と向かっておられる」ということ。言い変えるなら「主が共におられる」ということ。
- ③ ここまでまとめると、「契約の箱」とは「神様

の約束」と「神様が面と向かってここおられる」ことがイスラエルの人にわかるように見えるカタチにされたものである。この「契約の箱」を先頭にして、イスラエルの人達はヨルダン川を渡って行ったわけだ。自分達の目の前に、神様の約束を見据えつつ、約束の実現の邪魔になる川が切り開かれていく。自分達の目の前に、神様がおられることを見据えつつ、神様が約束のとおりにかナンの地へと導いてくださる光景を彼らは目の当たりにした。

Q. 皆は、自分が誰に導かれて、何を目指して一生を過ごすのか、答えることができるだろうか？ 君は神様に導かれて、神様の約束が実現する日を目指して今を生きる。神様の約束とは、今以上にハッキリとし仕方で、神様といつまでも共に愛し合って過ごすという約束。君はそのことを、毎日を過ごす中で味わっているだろうか？ 神様の臨在がわからなくなるとき、神様の約束はぼやけてくる。逆に神様の約束がわからなくなるときに神様の臨在はぼやけて感じる。

④では、神様の約束を味わえ、神様が共におられることを味わえる所とはどこだろう？ 言わせてる感があって申し訳ないが、それが教会であり礼拝だ。神様の臨在がぼやけ、約束がぼやけるとき、皆は人生の色々な流れに流されていってしまう。反対に神様の臨在がハッキリし、神様の約束がハッキリするとき、君は世の中の流れの中で、自分のために神様が道を切り開いていることを知る。様々な流れのある現代で、君のために道を切り開かれる神様に感謝したい。

〈祈り〉

先立って道を切り開いてくださるあなたに感謝します。アーメン。

テキスト ヨシュア記 6章

イスラエルはヨルダン川を渡りエリコの町のそばまで来た。エリコの人々はイスラエルがヨルダン川を渡る前からイスラエルを恐れていた（ヨシュア2章）。イスラエルが主の奇跡によってヨルダン川を渡ったことでその恐れはいっそう強まり、もともと町を城壁で囲んでいたエリコの人々は、城門まで閉ざして立てこもった。

主はヨシュアに、「見よ、わたしはエリコとその王と勇士たちをあなたの手に渡す」（2）と言われた。エリコ攻略は、主なる神がいちばんの主体となって行なわれることを示された。しかも「渡す」という言葉は、聖書原典からの直訳では、新改訳のように「渡した」という完了形になる。エリコがイスラエルのものとなることは主にとってこの時点で既に確定・完了の出来事であった。

そのことがより鮮やかになるために、主は武器をもってエリコの城壁を突破することを求められなかった。主がイスラエルに求められたのは、角笛を吹く七人の祭司の先導のもと、兵士たちが一日一回、神の箱と共に町の周りを回ることで、そして七日目には町を七周した後、角笛の合図のもと民がときの声を挙げることであった（3-5）。普段は神礼拝の場である幕屋に置かれ主なる神の臨在の場と位置づけられた神の箱が登場することで、エリコを攻めることは軍事的行為ではなく、宗教的行為となった。このことは「七」という、聖書全体を通して「完全数」と位置づけられる数字の多用においても示されている。天地創造は「七」日目に完成し（創世記2:3）、旧約祭儀では水、血、油を「七」度ふりかけるよう命じられる箇所がある（レビ4:6、民数28:11ほかを参照）。イエス様は罪を赦す回数として「七を七十倍するまで」

とお答えになり、徹底して罪を赦すよう願われた（マタイ18:22）。

イスラエルの民は主の命じられたとおりにエリコの周りを回った。そして七日目、民のときの声にあわせて主が働かれることで、城壁は崩れ去った。

城壁が崩れるとイスラエルは武器をもってエリコへ攻め込んだが、私利私欲に基づく戦争行為ではなく、主にささげるための行為として行なうよう求められた。そこで主を認め、イスラエルの斥候をかくまった遊女ラハブは助けられ（17）、滅ぼすべきものの一部をかすめ取ることはイスラエル全体の不幸になると戒められ（18）、金、銀、銅器、鉄器は主の宝物倉に納めることになった（19）。

人生においてエリコの城壁のように堅く、高くそびえて、行く手を阻む壁に直面することがある。その時、人間が神様に頼らないで壁を突破しようと試みるなら、強硬な手段、強大な力によって破壊する、ということへと傾く。現代ならダイナマイト、爆弾、ついにはテロすら求めてしまう。その際に本当は壊すべきでないもの、助けるべき味方、何の罪もない人々をも巻き添えにしてしまう。

それに対し主なる神は、本当に壊されるべき壁のみ、つまり人の罪によって築かれた壁だけを、キリストの福音の力によって壊すことができになる。この神様の御手にお委ねするとき、平和のうち壁を乗り越えることが許される。

（吉田 崇）



テキスト ヨシュア記 6章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13,76
ウェストミンスター信仰告白 第5,7,14章

(単元のねらい)

エリコの城壁を見たとき、イスラエルの民は自らの力で戦い勝利することに不安をもったことであろう。しかしエリコの城壁を崩すために必要なのは、イスラエルの民の力ではなく、神の力である。神の民の戦いは、自ら行うことではなく、常に信仰による戦いであり、主による勝利が与えられることを信じることである。わたしたちの日々の生活にあっても、エリコの城壁のような困難・艱難・試練が立ちあはだかることがあろう。しかし御言葉に従い、主に祈りを献げるとき、主による御業がわたしたちに与えられる確信が与えられることを伝えていただきたい。

「信仰による戦い」

先週は、イスラエルの民がヨルダンの深い川を渡り、神さまの約束の地カナンに入ってきたことを見てきました。イスラエルの民は、ヨルダン川の流が真ん中でせき止められたため、乾いた道を歩いて、ヨルダン川を渡ることができました。つまり彼らは神さまの素晴らしい御業を体験したのです。わたしたち人間には不可能なことであっても、主なる神さまは可能になさることがおできになることを確認してきました。

今日の御言葉においても、神さまがイスラエルのために行ってくださいました素晴らしい御業が示されています。

神さまがお与えくださった約束の地カナンには、すでにいくつかの民が住んでいました。それらの民は、まことの神さまに背き、偽りの神々を拝んでいたのです。そのため、イスラエルの民がこの地に入ろうとすると、これらの民をこの場所から退かせ、神々を拝む習慣などを取り除くことが求められました。神さまがお与えくださった場所において、神さまを礼拝し、安らぎを得るためです。

そのためにイスラエルの民は、先にカナンに住んでいた民たちと戦う必要がありました。この戦いは、主なる神さまが求めておられることであり、主なる神さまが戦ってくださいます。

従って、この戦いに挑むにあたり、主なる神さまはイスラエルの民に武器を持つことを求められません。自分たちの力で打ち勝つのではなく、主なる神さまが勝利を遂げてくださったことを、イスラエルの民が知るためです。

ですから主なる神さまがイスラエルの民に求められた命令は、武器を持つことではありません。まず、七人の祭司と神の箱の先導により、エリコの町を一日に一周することを六日間続けることで、たったそれだけです。神さまの命令であることを知らない人たちにとっては、何を無駄なことを行っているのだろうと眺めていたことでしょう。また、エリコの町の人々も壁の内側において、「イスラエルの民は何を行っているのだろう。こんなことでは、エリコの壁を破ることなどできない」と思ったに違いありません。それでもイスラエルの民たちは、主なる神さまの命令どおり行い続けたのです。

七日目に、主なる神さまは、イスラエルの民に、朝早く、夜明けとともに起きて、エリコの町を七周することを求めました。そして、祭司が角笛を吹き鳴らすと、ヨシュアは民に「鬨の声をあげよ」と命じます。イスラエルの民は、主が命じられたとおり、七日目にはエリコの町を七周し、そして祭司の角笛と共に発せられたヨシュアの発した命

令により、民は皆一斉に大声で叫んだのです。するとどうでしょう。エリコの城壁が崩れ落ちて行きました。それと同時に、イスラエルの民はエリコの町に入って行き、イスラエルの民は、あれだけ頑丈な城壁を誇っていたエリコの町を占領することができました。ここに、主なる神さまの御力が注がれたことは、誰の目にも明らかでした。

先週、わたしたちは何を学んだでしょうか。思い出してください。ヨルダン川に差し掛かったイスラエルの民は、契約の箱を先頭に川に入っていく、川の水が左右に開かれ、イスラエルの民は皆、渡っていくことができました。そして、今日の御言葉においては、エリコの城壁が崩れていったのです。ここに共通していることは、主なる神さまの大いなる御業です。

わたしたちの日々の生活の中にあっても、エリ

コの城壁のように大きな壁となって立ちはだかるような苦しみ待ち構えていることがあるでしょう。そんなときに、自分の力でなんとか解決しようと思っても、何もすることができません。しかし、イスラエルと共に契約の箱があり、主なる神さまが臨在されていたように、キリストを十字架にお献げくださった主なる神さまが、わたしたちと共にいてくださいます。わたしたちは自分の力で困難を乗り越えることはできませんが、主なる神さまがその困難を乗り越えさせてくださいます。乗り越える力をお与えくださいます。ですから、わたしたちは、苦しいときに、主なる神さまの大いなる御業を覚えて、神さまを信じて祈り求めることが求められているのです。信じて祈り続けましょう。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] エフェソの信徒への手紙 6章10節 (後半)

主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。



〈ねらい〉

人の目には困難あるいは無理と見えたエリコ攻略であるが、人にはできなくても神様はおできになる。人の力（武力）によるのではなく、ただ単に神の箱をかついで町の周りを一日一回まわる（七日目は七回）という、人の目には一見無意味に見える方法でも、しかし神様の命じられるまま、神様に信頼して行えば難攻不落に見えたエリコもいとも簡単に陥落する。ただひたすら神様を信じてよりのむむことが重要であることを教える。

〈展開例〉

神様のお約束どおり、人々はエリコの町の手前まで来ることができました。そして、川の水がいっぱい流れていたヨルダン川を、神様のふしぎなみわざにより（川の水が壁のようにせき止められ、その間に）ヨルダン川を歩いてわたることができました。

エリコの町は大きな壁が立ちはだかるように立派な城壁に囲まれており、ここを攻めることはとても無理なように見えました。しかし、神様は不思議なことをお命じになりました。「祭司たちはラッパを吹きながら、神の契約の箱の前を進み、また兵士たちも、声を出さないようにして神の箱とともに一日一回エリコの町を回り、それを六日間続けなさい。そして七日目はそれを七回繰り返しなさい」と命じられました。「そして、その後、関の声を上げなさい」と命じられました。

すると、エリコの町を外敵から守っていた城壁

はたちどころに崩れ、エリコはイスラエルの人々の手に渡されました。兵士たちは武器を取って戦うこともなく、ただ神様がお命じになったとおりにしただけでした。普通に考えると、そんなことで戦いに勝てるはずはありません。しかし、神様のご命令どおりに行うと、不思議なことにエリコの町は滅びてしまいました。

人の目にはとてもできそうにないことでも、ただ神様を信じて神様のご命令に従う人々をお救いくださるのです。ただひたすら神様を信じ、神様によりたのむことで、イスラエルの人々はエリコを滅ぼし、カナンに入ることができたのです。

〈やってみよう〉

ラッパを描いてみよう。また紙を丸めて筒を作り、一方を他方より少し太くしてラッパのような形にして声を出してみよう。

〈歌ってみよう〉

詩編歌150編をうたってみよう。いろいろな楽器が出てくるよ。どれだけ知っているかな。

いろいろな楽器を使って（もちろん人の声で歌うこともわすれずに）神様をほめたたえよう。

〈お祈り〉

神様。神様は神様を信じて神様に従う人々を必ず守り、救ってくださいます。どうか私たちも神様を信じて歩むことができるようにしてください。アーメン。



〈ねらい〉

困ったこと、難しいこと、悲しいこと、私たちには乗り越える力はないけれど、私たちを助けて出してくださる神様が、いつも共におられる。

〈はじめに〉

だんだんと寒くなってきました。風邪は流行っていませんか。クラスのお部屋の温度、湿度などは快適ですか。子どもたちが安心していられるお部屋の環境にも配慮しましょう。短い時間ですが、お部屋の雰囲気にも工夫がでできるとクラスも楽しいですね。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①神様は誰にお話をされましたか。(1節)
- ②エリコの町の周りを兵士が一周することを何日間続けなさいと言われましたか。(3節)
- ③七日目にはどうしなさいと言われましたか。(4節)
- ④祭司さんたちが角笛を吹いて、みんなが大きな声を出すと、町の城壁はとなると言いましたか。(5節)

〈展開例〉

イスラエルの人々があのゴーゴーと水が流れるヨルダン川を渡ってきたという知らせを聞いて、エリコの人々は恐くなって、町の門をしっかりと閉じていました。エリコの町の人々は、神様を信じていないで悪いことをしている人が多かったので、

神様はこのエリコの町を滅ぼそうとっていました。神様は、ヨシュアさんに言いました。「これから、エリコの町の周りを一周回りなさい。それを六日間続けなさい。そして、七日目には、七回回ってから角笛を吹いて、それを聞いたならみんな大きな声で叫びなさい。そしたら、エリコの町の城壁は壊れてしまうでしょう」

ヨシュアさんは、神様からの言葉をみんなに伝えました。そして、従いました。誰もしゃべらずに、ザックザックと行進を始めました。兵隊たちは、町の周りを一周して、それだけで帰ってきました。それを六日間続けました。そして七日目。同じように一周して、そして二周、三周、四周……七周目を回りました。そして止まりました。と同時に、祭司たちがいっせいに角笛を吹いたとき、みんなは大声でさけびました。すると、神様の言われたとおり、エリコの町の頑丈な城壁は、崩れ落ちてしまいました。イスラエルの兵隊たちは、崩れた壁から、いっせいに町に攻め込んで、町にあるもの全てを滅ぼしつくしました。

神様の力を信じて、従った時、どんな強い敵にもどんなに難しいと思われることでも、必ず勝つことができることを、必ず解決が与えられることを、イスラエルの人々は体験することができました。

〈お祈り〉

神様、どんな時にも神様に従って歩むことができますように。神様の力を信じて、困ったときには、すぐに神様に助けを求めることができますように。アーメン。



〈ねらい〉

神の民の戦いは、自ら行うのではなく、信仰によって主による勝利が与えられることを信じてのことである。私たちは苦しい時こそ、主なる神様の大きい御業を覚えて信じ、祈り求めることを伝える。

〈ワーク〉

1. エリコの町の側まで来た時、町はどの様になっていましたか？（1節）

（ ）

2. それを見てイスラエルの民は、どう思ったでしょうか？

（ ）

3. その時神様はヨシュアに何と言われましたか？（2～5節）

「七人の祭司と神の箱の先導により、エリコの町を一日に 周し、それを 日間続けなさい。

そして 日目には、町を 週しなさい。

祭司たちの角笛が聞こえたら民は

を上げなさい。そうすれば、町の成壁は崩れ落ちる。」

4. 神の大きい御業がおこり、エリコの町を滅ぼす時、いくつかの注意点が与えられました。それは何でしたか？

（ ）

5. 今日の聖書の学びを私達はどうか受け止めますか？

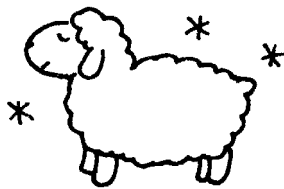
（ ）

〈祈り〉

神様、今日くださった御言葉をありがとうございました。私たちの毎日の生活にも、エリコの城壁のように大きな壁が立ちはだかることがあります。私たちの力は弱いのですが、どんなときも神様は共にいて乗り越える力を与えてくださいませ。神様の大きい御業を覚えて、これからも歩ませてください。

〈暗唱聖句〉

主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。（エフェソの信徒への手紙6章10節）



〈ねらい〉

エリコの城壁を崩す神様の力と、黙って従うイスラエルを覚える。

〈展開例〉

①今日の箇所で、イスラエルはカナンの地を手に入れるための戦いへと駆り出される。神様が選ばれた約束の土地には、本当の神様を信じない人々が住んでおり、神様の嫌がられる習慣に埋め尽くされていたからである。でもそれはイスラエルの思いつきではなく、神様御自身の命令だった。その初陣が、堅い城壁に閉ざされた町、エリコであった。イスラエルはこのエリコの戦いから長い間、カナン周辺の民族と戦うこととなる。長く続く戦いの初めに、神様は「私の言葉に従うときに勝利は与えられるのだ」ということをイスラエルに教えられた。

②イスラエルへの命令は、戦いという目線から見るならめっちゃくちゃな命令だ。先頭に武装兵。その後角笛を吹く7人の祭司と契約の箱を担ぐ祭司達。その後ろに武装兵。後は、どこを進んだかわからないが、民が城壁の周りをぞろぞろ回る。だがその結果だけは「町の城壁は崩れ落ちる」とハッキリ約束されていた。なぜ角笛を吹いたら城壁が崩れるのか？なぜ、城壁の周りを歩き回ったら戦いに勝利できるのか？理屈で説明できる人は誰ひとりいないだろう。それでもイスラエルは神様が言われるがまま従った。

Q. 皆は「神様の約束が実現するには壁があるなあ。聖書はいろいろ言うけどなあ。」こんな思いを持ったことはあるか？神様の約束の実現といっても色々な面がある。「神様は信じた者を救うと言うが、そんな簡単に神様のことを信じられるわけがない」「神様は毎日を祝福し

てくれると言うが、私の問題はそんな簡単な問題じゃない」「神様は私を少しずつ神様の思いに適う人間に造り変えると言うが、私はそんな簡単には変わらない」「神様は伝道するのを助けてくれるのが、私の友達は簡単には来てくれない」神様の約束が実現するために壁と感じる問題がときにはある。だが神様は今日の箇所をおして君にこう訴えられる。「あなたの先には壁があるかもしれない。しかし、あなた達の行く手を阻むどんな壁があってもそれは私が崩しさる。あなたは、私にその力があり、言ったことを必ず果たすということ信じなさい」イスラエルの行く手には壁があった。だが神様はそれを簡単に崩し去られた。壁の厚みに心を奪われるのではなく、それを崩す力ある神様に心を奪われたい。

③イスラエルの人々は大きな城壁を前に、しゃべることを禁じられた。しゃべれない中で、彼らは神様の命令と自分の迷いの入りの乱れる時間を過ごしたかもしれない。「おいおい、こんなで大丈夫か。こんなことやって意味あんのか？……でも神様の命令だしな。今までも神様は言ったことを果たしてこられたしな」黙って、神様の命令と向かいの中で、徐々に神様を信頼した人がいたことだろう。また、「こんな壁、どうしてことない。なんたってヨルダン川を切り開く主が共にいるんだから」不安の無い人もいたことだろう。色々な思いはあってもイスラエルは文字通り黙って従った。そして、神様はそのように真剣に御自分の命令を守ろうとする者を決して裏切らない。神様の命令に難癖をつけて、やらない者ではなく、不思議さはあっても神様の言葉に従う者とされたい。

〈祈り〉

あなたの命令に従えますように。アーメン。

テキスト 創世記 15章1～6節

創世記第12章からアブラハムの物語が始まります。彼らの祝福への旅路は、神の約束の言葉だけに支えられたものであり（創世12:1-4）、妻サラの不孕を克服して下さるといふ希望をも与えるものでした。しかし、依然として子どもは与えず、次第にアブラハムの中で、神の約束が虚しく響き始めようとしていたのです。

〈アブラハムの訴え〉

幻の中でアブラハムに神の言葉が臨みました。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」（1）。「あなたの受ける報いは大きい」と言われる、その報いとは、数えきれないほどの子孫があなたに与えられ、地は見渡す限り子孫のものとなるという報いです（創世13:14-17）。しかし、現実には、アブラハムにはまだ一人の子どもも与えられていません。彼が旅立ったのは七十五歳ですから、この時はもっと歳をとっていたことでしょう。人間の常識ではもはや子どもを得る望みなどなくっているのです。それゆえに、しもべの一人エリエゼルが遺産を継ぐことになろうとしています（3）。そのような現実にもかかわらず、あなたはいったい何をくださるといふのですかと、神に訴えるのです。

〈満天の星空のもとで〉

しかし、神は嘆き訴えるアブラハムに声を掛けて、励ましてくださいました（4）。わたしたちの希望は、決して自分の気持ちを切り替えることによって生まれるものではありません。また、自分自身の中から聞こえてくる言葉によってでもありません。いつも外から聞こえてくる主の言葉の中にだけに、まことの希望があるのです。だから、主は、アブラハムを「外」に連れ出し、希望のしるしを見せてくださるのです。「あなたから生まれる者が跡を継ぐ……。天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。……あな

たの子孫はこのようになる」（4,5）。

アブラハムは、この主の言葉を信じました（6）。「信じた」と訳されている「アマー」^{amēn}という言葉は、「確かさ」を意味する言葉です。わたしたちが祈りや賛美の時に、口にしている「アーメン」（真実です、そのとおりです）という言葉は、ここから生まれました。アブラハムはこの時、神の言葉の確かさに自分を委ねることを言い表したのです。今までは、自分が置かれている現実から神の恵みを理解しようとしていました。しかし、今回の出来事をとおして、神の言葉から自分たちの現実を見ることを教えられ、まことの信仰へと導かれたのです。

〈義と認められる〉

主はそれを義と認めてくださいました。聖書において、「義」とは神との関係が正常であるということです。それは、わたしたちが立派な行いをしたり、神から与えられる条件を満たすことによって生まれるものではありません。アブラハムは、何もできず、主の言葉に「アーメン」と口にできないほどの疑いと不信の中にあつたのです。しかし、神は満天の星空を示し、人間とは違う圧倒的なスケールの中に再び招いてくださった時、アブラハムは自分の思いによって御言葉をはかることを捨てて、ただ主の約束にすべてを委ねて信じたのです。ここに神と人との正しい関係が生まれたのです。

ローマの信徒への手紙第4章で、使徒パウロはアブラハムのこの物語について言及しつつ、救いの急所である「信仰によって義とされる」ことを語ります（ガラテヤ3:6、ヤコブ2:23）。やがて、アブラハムの子孫として、クリスマスにお生まれになった主イエス・キリストのみ業において、神の義は成就されました。このお方を、救い主として信じて受け入れるとき、わたしたちは神の御前に義とされるのです。（藤井 真）

テキスト 創世記 15章1～6節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22, 66, 67

〔単元のねらい〕

「アブラハムへの約束はキリストによってわたしたちにも及ぶ。その幸いを知ろう」。なんと壮大な目標だろう。救済史の発端から、十字架の影越しに、教会の幸いを見渡す。そのような神の目をいただくなければ果たせまい。創世記12章にある「祝福の源となるように」との約束が、アブラハムとその子孫にどのように実現していったのか。神の御子イエスによって成就された約束が、どのような祝福を我々に及ぼすのか。まさに救済史の全貌を語らねばなるまい。

「祝福の源となる御子」

「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい』」。この出来事から始まる創世記第12章は、新たなる旅立ちの章です。人類史上まれに見る、おびたしい子孫を残し、今なお生みだし続ける人物アブラムの旅立ちです。それは同時に、全人類を救おうと願ってやまない唯一まことの神、天地の造り主の旅立ちでもあります。

「わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにおいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現われ」（使徒7:2）しました。他に並ぶものがない神の栄光、否定しようのない神の臨在を示す出来事が、アブラムの生まれ故郷メソポタミア、「カルデアのウル」（創世記11:31）で起こりました。紀元前1800年代のことと言われます。そのときすでに、アブラムは七十歳前後、妻サライも六十歳前後、ふたりに子どもはありませんでした。静かに先細ってゆく人生がそこにポツンとありました。

よりによって、そんな彼に「自分の土地と親族を離れよ」（使徒7:3）などと、神はなぜお命じになったのでしょうか。その理由を、神御自身が、後の時代に明らかになさいます。「あなたたちの先祖は、アブラハムとナホルの父テラを含めて、昔ユーフラテス川の向こう岸に住み、他の神々を拝んでいた。しかしわたしはあなたたちの先祖アブラハムを川向こうから連れ出した」（ヨシュア

24:2）と。古代文明の栄えたウルでは、月の神への礼拝が盛んでした。他に種々雑多な偶像崇拜がありました。そんな土地や親族のしがらみと決別せよ。神の御言葉は、羊や牛のいる牧草地に、アブラムの日常の真っ只中に、とどろき渡りました。

「信仰によってアブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発した」（ヘブライ11:8）。アブラムは、妻サライと身内を連れて旅立ちます。ウルから北西一千キロ、ハランに着きます。しかし主の示す地がどこなのか、まったく知らされませんでした。ただ神の約束だけが頼りでした。

「わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める」（創世記12:2a）。国民と呼ばれるだけの子孫に恵まれる。名誉を得るだけの財産にも恵まれる。この約束を信じての旅立ちでした。牧草地の移動を繰り返すほかない、さすらいの遊牧民だったアブラムには、安定した定住生活を期待させる約束でした。アブラムの旅立ちには、地上での祝福を約束してくださる神を自分の人生の主（あるじ）とする、彼の信仰の旅立ちでした。

「祝福の源となるように」（創世記12:2b）。「あなたは祝福となれ」。主はしもべにそう命令なさいました。アブラムへの祝福は、彼が受けるだけにとどまらない、神はそう仰せでした。「あなた

を祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」(創世記12:3)。主の祝福は、しもべアブラムを源として、彼の周囲に、子々孫々に伝わってゆく。神の約束はすべての民族へと広がってゆく。背きのゆえに呪われたアダム(創世記3:17)の子孫が、高ぶりゆえに散らされたバベル(創世記11:8)の民が、アブラムによって神の祝福へと回復されてゆく。神の祝福のご計画は、アブラムの想像をはるかに越えるものでした。

チグリス川とユーフラテス川に囲まれた土地ハラン。そこもメソポタミア文明によって栄えた豊かな町でした。しばらく滞在したものの、やがてアブラムの父テラが亡くなります。七十五歳になったアブラムは、父に別れを告げ、父の国メソポタミアにも別れを告げ、旅立ちます。メソポタミアとエジプトを結ぶ大きな街道を、ひたすら南へ五百キロ、険しい山道を越えて、乾いた痩せた土地カナンに入ります。

そのとき、主はアブラムに現われました。あのときと同じように、他に並ぶものないご栄光、否定しようのないご臨在を示す出来事が、そこカナンので起こったのです。「あなたの子孫にこの土地を与える」(創世記12:7)。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える」(創世記13:14)。「恐れるな、アブラムよ。……天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」(創世記15:5)。

主が御言葉を語られるたびに、アブラムはその約束を信じて旅をしてきました。そして遂に、アブラムは「主を信じた」(創世記15:6)のです。「主は必ず約束を果たしてくださる」「約束を本当にその通り実現なさる神こそわたしの主である」。そう信じたのです。その信仰を、主は「よし」とされました。「アブラムは恵みにふさわしい人」

と認めてくださったのです。やがて、約束は実現してゆきます。百歳のアブラムに九十歳の妻サラが男の子を産むのです。不可能を可能となさる主こそ、アブラムの神、イサクの神、ヤコブ(イスラエル)の神です。

アブラムは一人の普通の人間でしたが、自分の受けた祝福を他の人々へ後の世代へ取り次ぐ役目に召されたのです。アブラムの信仰と旅立ちによって、彼の子孫と周囲の人々は、祝福という言葉のうちに自分たちの今を見出し、人生をその祝福に結びつけることができたのです。後にモーセは、アブラム・イサク・ヤコブの神・主に召し出されると、エジプトに遣わされアブラムの子孫を奴隷の身分から解放する、祝福の源となりました。後にダビデは、預言者サムエルによって油を注がれると、イスラエルの指導者に立てられ、約束の地を平定し王国を揺るぎないものにする、祝福の源となりました。後にイザヤは、エルサレム神殿で万軍の主にまみえると、罪赦されて王国の民の元に遣わされアブラムの末裔に神の御心を告げ知らせる、祝福の源となりました。

やがて時は満ち、いよいよ神の国が近づくと、アブラムの子、ダビデの子、イエス・キリストが神の御子として世に遣わされ、十字架の死による贖いを成し遂げ、罪の赦しと神との和解を及ぼす、全世界の祝福の源とされました。この福音を、主のしもべパウロは宣べ伝えました。「信仰によって生きる人々こそ、アブラムの子であるとわきまえなさい。信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラムと共に祝福されています」(ガラテヤ3:7-9)。イエスを死者の中から復活させた神を信じる者は誰でも、信仰の父アブラムの祝福に連なる神の民です。「祝福の源となるように」と召し出され、命の恵みをいただける約束の地へと招き入れられます。わたしたちも旅立ちましょう。アブラムの神なる主を信じて旅立ちましょう。(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] ガラテヤの信徒への手紙 3章7節

だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラムの子であるとわきまえなさい。

〈ねらい〉

アブラハムがすべてを委ねて、神さまの約束を信じ、義とされたように、子どもたちも、神さまの約束を信じること、また、イエス・キリストを信じる信仰によって義とされるということを学びたい。

〈展開例〉

- みなさんは、誰かと約束をしたことがありますか。そして、その約束をしっかりと守ることができたでしょうか。お母さんと、「晩ご飯のときは、テレビをみません」と約束したのに、すぐに観たくなって、その約束を破ってしまったということがありませんか。人間は、約束を守りたいと思っても、なかなか自分の力では守ることができませんね。でも、私たちの神さまは、約束なされたことは必ず守って実行してくださるお方です。その神さまがアブラハムさんとした約束から学びましょう。
- アブラハムさんは、主の約束だけを頼りに旅をし、カナンの地に入ります。そこで、神さまは、「見えるかぎりの土地すべてをあなたとあなたの子孫に与えよう。天の星を数えてみなさい。あなたの子孫はこのようになる」と祝福の約束をしてくださりました。そのとき、アブラハムさんと妻サライさんは年を取っていたので、とても男の子が与えられるとは思えない状況でした。しかし、アブラハムさんは、「神さ

まは必ず約束を守って果たしてくださる」ということを信じました。そして、神さまは、このアブラハムの信仰を「よし」とされて、アブラハムさんは義と認められたのです。

- アブラハムさんって、すごいね。神さまのおっしゃった約束を信じて、すべてをおまかせしたんだね。ここから、神さまの私たち人間に対する祝福がはじまりました。
- アブラハムさんとサライさんに男の子が与えられ、それから子孫がどんどん増えていきました。そして、みんなが信じているイエスさままでいきます。イエスさまは、祝福の源と呼ばれるアブラハムさんの子孫なんですよ。
- アブラハムさんが神さまの約束をただ信じて義とされたように、私たちも、主イエスさまを救い主として信じる時、神さまのまえに義とされ、イエスさまと一緒に歩んでくださいます。

〈お祈り〉

神さま、私たちが神さまから離れそうになるとき、そばにいて離れないように助けてください。そしてどんなときでも、まことの神さまを信じて従って歩むことができますようにお守りください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様を通して、私たちに与えられた祝福の大きさを知る。

〈はじめに〉

今日から待降節・アドヴェントを迎えます。それぞれの教会にとって、子どもたちにとってうれしい季節です。この時期をみんなで心を合わせて同じ思いとなって過ごしたいと思います。一つの参考として、アドヴェントリースのろうそくを灯す時の方法をこれから四週間記します。

テーマ「約束」

全員：イエスは言われました。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（ヨハネ8:12）

リーダー：なぜ、私たちは、このろうそくに灯を灯すのですか？（一本目のろうそくに火をつける）

子ども：このろうそくは、世界に、平和と愛をもって、救い主・メシアが来れるという、預言者によって伝えられた「約束」を、私たちに思い出させるためです。

全員：「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」（イザヤ9:2）

（“Sunday School that Really Works, Faith Alive”, Grand Rapids, Michigan 109ページ引用）

〈展開例〉

教会のカレンダーでは、今日から新しい歩みが始まります。今日からイエス様がお生まれになることを待ち望む、「待降節・アドヴェント」という季節をこれからクリスマスの日まで、みんなで過ごします。アドヴェントカレンダーや、クリスマスツリーの飾り付けや、クリスマス劇の練習や、何だか忙しくなりますね。でも、日曜学校の礼拝やこのクラスでは、神様がイエス様を私たちにお

与えになった神様の大きな愛を、今年も皆さんと一緒に味わいたいと思います。

今日は、アブラハムさんのお話です。今年の春にアブラハムさんのお話を聞きました。なぜ、アドヴェントにアブラハムさんのお話なの？と思いますね。イエス様がお生まれになるずっとずっと前のお話です。アブラハムさんは神様を心から信じる人でした。神様のお言葉を信じて、今まで住んでいたところも離れて旅をした人でした。そのアブラハムさんを神様はたくさん祝福してくださるお約束をくださいました。「星の数を数えることができるなら、数えてみなさい。あなたの子孫はこのようになる」と言われました。アブラハムさんにはまだ子どもがいまいませんでしたが、神様のこのお約束を信じました。

この後、イサク、ヤコブ、もっと後にダビデ、そして、どんどんとアブラハムさんの子孫は続いて、とうとうイエス様がお生まれになりました。イエス様がお生まれになるずっと前から、神様はアブラハムさんを選び、その子孫を祝福し、この世にイエス様をお送りくださいました。神様の大きなご計画、お約束が実現したのです。

人はつまずいたり、忘れてしまったり、自分勝手になって、神様に従えないことばかりですが、神様は私たちを救う救い主をお与えになると言うお約束を本当のものにしてくださいました。今、私たちはこの神様を信じる子どもです。アブラハムが信じた同じ神様、イサク、ヤコブが信じた同じ神様に私たちもつながっています。イエス様を通して、この神様を信じることができるのです。神様の大きな救いのご計画の中に、私たち一人ひとりも入れられていることを覚えましょう。

〈お祈り〉

神様、今日から待降節を迎えました。一本のろうそくの光をお与えくださってありがとうございます。イエス様をお迎える準備の毎日を祝福してください。アーメン。

〈ねらい〉

アブラハムは神様のお言葉、お約束を信じました。神様はそのアブラハムの信仰を義と認めてくださいました。その祝福がアブラハムの子孫としてお生まれになった、イエスキリストの十字架によるあがないによって、私たちにもその恵みが広がり、信じ受け入れるなら義と認められることを確認しましょう。

〈ワーク〉

聖書 創世記15章1～6節

1. 幻の中で神様はアブラハムになんとおっしゃいましたか。(1節)
()
2. そのお言葉に対するアブラハムの反応はどのようなものでしたか。(2節)
()
3. アブラハムはだれが家の跡継ぎになると思っていましたか。(3節)
()
4. しかし神様のお言葉は違っていました。()
() から生まれるものが跡を継ぐ。神様はアブラハムを()に連れ出し、()を仰いで()を数えて見るがよい、あなた

の子孫はこのようになるとおっしゃいました。(4,5節)

アブラハムは()を信じました。神様はそれを()と認めてくださいました。(6節)

5. アブラハムは神様のお言葉に()といえないような疑いと不信の中にあつたようなときにもただ主の()を信じました。
6. アブラハムの子孫としてお生まれになったイエス様を通してイエス様を救い主として受け入れるなら、()も神様が義と認めてくださることを感謝します。

〈祈り〉

天のお父さま、アブラハムが神様のお言葉を信じてしたがったように わたしもイエス様のお言葉を信じ従うことができるようにしてください。イエス様が私のために十字架にかかってくださつたことを感謝します。アーメン。

〈答え〉

1. から4. までは聖書を見て確認しましょう。
5. アーメン、お言葉
6. 「私」や自分の名前をいれてみましょう。



〈ねらい〉

アブラハムへの約束を完成させられるキリストを待ち望む（文級では創世記の文脈ではなく待降節の文脈からテキストを読む）。

〈展開例〉

①今年もあと一ヵ月。そして、あと4週間でクリスマスだ。教会ではこの時期をアドベントといたりする。漢字で書くと「待降節」。降るのを待つ季節。何が降るのを待つのかというと、それはクリスマスに天から地上に降られたイエス様。そんなわけで、クリスマスを待つこの時期をアドベントという。もう少し、噛み砕こう。クリスマスというのは、約束されていた救い主イエス様が来られた日。だから、クリスマスを待つとは「救い主が来るという約束の実現を待ち望む」ということ。今週は「約束を信じて待つ」ということを考えよう。

②今日の箇所には、約束を与える神様と約束を信じるアブラハムが描かれている。ここで言われている約束の中心は「数えきれないほどの子孫が与えられる」というもの。神様は3つ手前の12章1～3節で、アブラハムの血族から国が誕生すると言われた。それもただの子孫達ではない。神様から特別に祝福を受ける子孫達。太陽の光を映して暗い夜にピカピカと光る星のように、世界を光で飾る子孫達である。それから、15章までどれくらいの月日が流れたのかはわからないが、アブラハムにまだ子供はいない。それでも、神様の約束は変わらない。「私はお前の子孫を星の数ほどにする」と言われる。

③初めの約束を受けた時、アブラハムは75歳であった。普通なら「約束はありがたい。それが本当ならどんなに良いことだろう。でも、ちょっ

と話がうますぎやしませんか？」こう思っても仕方がない、現実とギャップのあるスケールのでかい約束である。しかし、アブラハムは神様を信じた。そして、自分に子供が与えられるまで何年もの期間、神様を信じて待ち続けた。

④旧約聖書はその後、約束が引き継がれ、それを信じた様々な人々によって実現していく様子を描く。イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、ヨシュアを経て、イスラエルはダビデの時代に一つの王国となる。新約聖書はさらに、この王国がイエス・キリストを経て天の国に連なるすべての教会へと広がることを告げる。イエス様もまた、アブラハムの約束の先に生まれた方だった。アブラハムへの約束であった「闇夜を埋め尽くして光る、数えきれない神様の民が生きる世界」はこのようにして実現していく。約束実現のカギとなったのは「約束を待ち望んで生きる、神様を信じる人々」であった。

⑤信じられないスケールのでかい約束が与えられているのは君達も一緒。イエス様は君達が生きる教会の未来にも約束をくださった。「神様の子供たちは世界中に増え広がる」と。この神様の約束も人間を無視しては実現されない。神様の約束を信じて待ち望む君達が、毎日を生きるところに実現される。自分の目に映る世界とギャップのある約束も、アブラハムへの約束を実現されてきた神様の目線から考え直すとき、信用に足る約束だということがわかる。与えられている約束の確かさを信じつつ、アドベントのときを過ごしたい。

〈祈り〉

アブラハムへの約束を私たちにまで届けてくださったあなたの確かさに感謝します。アーメン。

テキスト イザヤ書 11章1～10節

紀元前722年に北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされますが、預言者イザヤが活動する南ユダはまだ健在でした。しかし、ダビデ王朝の現実の王は神に背き続けています。このことに失望したイザヤが、主の霊に満たされた理想の王がダビデの子孫から生まれることを語ります。

〈エッサイの株〉

「エッサイの株」(1)と「エッサイの根」(10)は、ダビデ王朝を指す言葉です。エッサイとは、ダビデの父の名前で、「若枝」はメシアを表わすシンボルです。神は、ダビデの子孫からまことのメシアが生まれるという契約を結ばれました(サム下7章)。このダビデ王朝が、「株」「根」と表現されていますから、一度、木は切り倒されている状態であることがわかります。これは当時、南ユダ王国の王の背信に対してくだされた神の裁きを意味します。このように、ダビデ王朝はいったん倒れてしまうのですが、根の残った株から若枝が生え出るように、よみがえるのだとイザヤは預言するのです。

〈まことの王〉

メシアがダビデの子であるということは、もうひとつの象徴的な意味があります。それは「王」であるということです。神に背く民を治めるまことの王を神は与えてくださいます。このまことの王は、「逆らう者を死に至らせる」(4)ほど、他者に対して絶対的な力を持っています。そして、この力は「主の霊がとどまること」(2)によって任務を執行することができます。主の霊の根本は、「主を知り、畏れ敬う霊」ですから(3)、王は人の思いではなく、神の思いに従って行動することになります。

〈まことの平和〉

このまことの王によってもたらされた新しく秩序ある世界は、平和の世界です。その時、狼と小

羊、豹と子山羊が同じところに住み、子牛が若獅子と一緒に育って、小さい子どもがそれを導きます。さらに幼子が蝮の穴に手を入れても噛まれないのです。そこにおいては、何ものも他に害を加えることもありません。大地が主を知る知識で満たされるからです(6-9)。

とても微笑ましい光景ですが、このような平和が本当に存在するのでしょうか。わたしたちは、この世界が弱肉強食の競争社会であることを知っています。何としてでも強くなって勝ち残ろうとする戦いが続いています。動物の世界においても強い者が弱い者を殺して食べるのが自然の定めであり、当然のこととして受け入れられています。だから、イザヤが語る平和の世界は、夢物語にしか聞こえないかもしれません。

しかし、神は人間の目からすれば、夢にしか思えない現実の中に、わたしたちが生きるべき祝福された世界を再び造り出してくださいませ。このことは、8節の中にも見ることができます。「蛇」の誘惑によって、人類は罪に陥り、祝福された世界を自ら破壊してしまいましたが、神はそれに対して「敵意を置く」(創世3:15)と告げてくださいました。この福音の響きの中で、まことの王がやって来られるのです。

〈キリストこそまことの王〉

このイザヤの預言は、第7章、9章に続くメシア預言です。この世に遣わされたイエス・キリストによって、わたしたちは心から主を「わたしの神」として知ることができます。まことの王であるキリストは、「しもべ」として仕えられることに御力を注がれました。その頂点が十字架です。わたしたちの罪を裁くのではなく、ご自分が背負うことによって、まことの平和をもたらしてくださいませ。わたしたちは、もう一度この世界に来てくださり、救いの完成を約束してくださいませ。再臨の主を待ち望みます。(藤井 真)

テキスト イザヤ書 11章1～10節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22,27

〔単元のねらい〕

クリスマスを前にして、イザヤが預言した平和の王としてのイエス様のことを子どもたちと共に覚えたい。イザヤの預言した時代は、地上的な王がいろいろと勢力争いをしてきた時代だった。そんな中で、イザヤは、来るべき平和の王の姿を預言した。それが、イエス様であることを覚えたい。そのイザヤの預言を通して、イエス様が王様であるというのはどういう意味なのか、どういう姿なのかを学び、イエス様がわたしたちの王様となってくださるすばらしさを感謝し、賛美したい。あらためて、心の中心に、生活の中心に、イエス様をお迎えすることを勧めたい。

「王様であるイエス様」

12月の最初の日曜日になりました。もう町やデパートやいろいろなところでは、クリスマスの飾りや音楽で、クリスマスムードにあふれています。みんなクリスマスが待ち遠しいことでしょう。クリスマスは、何よりもイエス様のお誕生をお祝いする日ですね。今日は、そのイエス様が王様であるというお話をしましょう。イエス様が救い主ということは聞いたことがあるかもしれませんが。イエス様が神様ということも聞いたことがあるかもしれませんが。でもそれだけではなく、イエス様は王様でもあるんです。

皆さんは、王様というときどういう姿やどういう人を思い浮かべますか？ 長いマントを着て頭に冠をかぶった姿？ 立派な馬に乗ってたくさんの家来たちを従えている姿？ 戦争で敵をやっつける強い姿？ イエス様がお生まれになったユダヤの国でも、昔は王様のことをそんなふうに思っていたようです。でも、イエス様は、そういう姿の王様ではありませんでした。では、どういう王様なのでしょう。それが、今日読んだイザヤ書に書いてあるのです。

イザヤ書というのは、イエス様がお生まれになるずっと前の、昔のユダヤの国のことが書いてある預言書です。イエス様がお生まれになるずっと前の、昔のユダヤの国にも王様がいました。そのころは、ユダヤの国の周りにもいろいろな国が

あって、いろいろな王様がいました。王様たちは、あっちでもこっちでも戦争をしていました。

ユダヤの国も戦争にまきこまれてしまいます。ユダヤの国の近くには、アッシリアという強い国がありました。そのアッシリアがユダヤの国に攻めてきたのです。そんなときには、ユダヤの国の王様は神様にお祈りしなければなりません。神様に助けていただかなければなりません。けれども、ユダヤの王様は、神様のことを忘れてしまいました。神様にお祈りしませんでした。かえって外国の間違った神様を拝むことさえしたのです。それではいけませんね。そういうことでは、やがてユダヤの国も滅ぼされてしまうことになります。それで、預言者イザヤが、将来ちゃんとした立派な王様が現れると教えてくださったのです。でも、イザヤが教えた王様は、今までの王様とはずいぶん違っていました。実はそれがイエス様のことだったんですね。さあ、それではイエス様がどんな王様なのか、見てみましょう。

イザヤは教えました。エッサイの子孫に生まれますよ。エッサイはダビデ王のお父さんです。ですから、エッサイの子孫は、ダビデ王の子孫です。確かにイエス様は、エッサイの子孫、ダビデ王の子孫としてお生まれになりました。やっぱりイザヤの言ったとおりですね。イエス様はエッサイの子のダビデ王の子孫なので、ダビデの子と呼

ばれています。

イザヤは教えました。その王様は、神様の霊で満たされると。神様の霊で満たされて、知恵も知識も勇気もあります、神様のこともよく知っています。確かにイエス様は、神様の霊に満たされていますね。神様を忘れてしまうような王様とは違いますね。神様のことをよく知っている、神様の子です。ですから、イエス様を信じると、神様のことがよく分かります。神様と一緒にいることができます。

イザヤは教えました。その王様は、弱い人や苦しんでいる人を助ける王様です、守ってくれる王様ですと。その通り、イエス様は弱い人、苦しんでいる人を助けてくださいました。いつも守ってくださいました。今でもイエス様を信じると、弱いわたしたち、いろいろと苦しむわたしたちを助けてくださいます。王様として、守ってくださいます。

イザヤは教えました。その王様は、昔の国の王様のように、武器をつかって戦争をするような王様ではありません。人々を教えたり、導いたりする王様です。言葉の力を持った王様です。その通り、イエス様は武器を使う王様ではありません。教えたり、導いたりする王様です。神様の言葉を語る王様です。今でも、イエス様はわたしたちに神様の言葉を語ってくださいます。

イザヤは教えました。その王様が来ると、世界が平和になっていきます。確かにそうです。イエス様は、戦争をする王様ではなく、平和の王様です。神様を知らない人たちが、神様と仲良くなれるようにしてくださいます。神様と人々を平和にすることができます。また、イエス様が王様になってくださると、人々の世界にも平和が来るようになります。神様の造られた世界も平和になってい

きます。イエス様は、わたしたちも、神様と平和になれるようにしてくださいます。人々と平和になるようにしてくださいます。

イザヤは教えました。その王様は、一つの国の人たちだけの王様ではなく、いろいろな国の人たちの王様になります。ほんとうにそうです。イエス様は、全世界の王様です。わたしたちは、ユダヤ人ではなく日本人です。外国の人もいるかもしれませんが、イエス様はわたしたちの王様になってくださいます。世界の王様です。ですから、クリスマスも世界中の人たちがお祝いするのですね。

やっぱりイザヤが教えた王様は、イエス様のことだったんですね。イエス様は、イザヤが教えた王様だったんですね。ずっと昔から約束されていた王様だったんですね。イエス様は、ほんとうにすばらしい王様です。平和の王様です。クリスマスは、すばらしい王様であるイエス様がお生まれになったことをお祝いする日です。

王様のイエス様は、神様の力でわたしたちを守ってくださいます。いつも神様と一緒にいられるようにしてくださいます。神様と平和になれるようにしてくださいます。他の人たちとも平和になれるようにしてくださいます。それからイエス様は、世界を平和にすることのできる全世界の王様です。

イエス様を王様としてお迎えしましょう。王様ですから、一番大切にお迎えしましょう。教会の真ん中にお迎えしましょう。わたしたちの心の真ん中にお迎えしましょう。みんなの生活の真ん中にお迎えしましょう。すばらしい王様がきてくださった。やっぱりクリスマスは、すばらしいですね。

(川杉安美)

[今週の暗唱聖句]

イザヤ書 11章1~2節 (前半)

エッセイの株からひとつの芽が萌えいで

その根からひとつの若枝が育ち

その上に主の霊がとどまる。

〈ねらい〉

救い主であり、神様であるイエス様は、平和をもたらす王様です。そのことを、弱肉強食の自然界さえも平和にさせるお方であることを聖書の中に出てくる動物を使って話をする。そして、イエス様が再び来られる日を待ち望む気持ちへと高めていく。

〈展開例〉

イエス様が生まれるずっと前に、私たちのために救い主が来られることを、イザヤさんは預言していました。そのお方は、ダビデ王の子孫として生まれたので王様です。

どのような王様なのでしょうか？

- ・神様の霊で満たされている王様。
- ・弱い人や苦しんでいる人を助け、守ってくれる王様。
- ・昔の国の王様のように武器を使って戦争をするような王様ではなく、人々を教えたり導いたりする王様。
- ・世界が平和になる王様。
- ・一つの国だけでなく、色々な国の人たちの王様。

★このお方がイエス様です。

今日のお話の中でいくつかの動物が出てきました。狼、豹、若獅子、熊、虻は、強い動物です。小羊、子山羊、子牛、牛は弱い動物です。みなさんは小羊、子山羊、子牛と仲良くすることはできます。しかし、狼、豹、若獅子、熊、虻と仲良くすることはできません。食べられてしまうからです。強い動物の餌になってしまいます。

動物は生き残る為に力で相手を倒すのです。ですから、弱い動物は強い動物と仲良くはできないのです。いつ襲ってくるか、いつ食べられるかとびくびくしているのです。

弱い動物に強い動物から守ってくれるリーダーがいたらどんなに心強いでしょ。そのリーダーが強い動物のリーダーでもあったら争いなどないですね。

そのリーダーがイエス様です。平和をもたらす王様であるイエス様は、私たちの周りにはいる人と仲良くできるようにして下さいます。周りにはいる人だけでなく、世界にはいる人たちがご飯を食べられなくて死んでいたり、病気で死んでいたり、争いに巻き込まれて死んでいたりすることのないようにして下さいます。悲しんだり、苦しんだりする人が一人もないようにして下さいます。

私たちの罪の身代わりとして十字架にかかって死に、三日目に蘇り、天に昇っていかれたイエス様は、再び私たちのところに来て下さいます。

本当の平和をつくるために、素晴らしい世界をつくるために救い主イエス様が来て下さいます。

イエス様がいつ来られてもお迎えできるように、心の備えをしていきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、神様の一人子であるイエスさまを与えてくださりありがとうございます。神様のお約束を信じて、イエス様がお生まれになったクリスマスを中心に待ち望むことができるようにして下さい。アーメン。



〈ねらい〉

平和の王様としてこの世に来られたイエス様を覚えましょう。

〈はじめに〉**テーマ「平和」**

全員：イエスは言われました。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ8:12)

リーダー：なぜ、私たちは、このろうそくに灯を灯すのですか？(一本目二本目のろうそくに火をつける)

子ども：一本目のろうそくはメシアの約束を私たちに思い出させるためです。二本目のろうそくは神様と私たちの間に平和をつくるためにイエス様が来てくださったことを、私たちに思い出させるためです。

全員：「高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く」(ルカ1:78~79)

(“Sunday School that Really Works, Faith Alive”, Grand Rapids, Michigan 109ページ引用)

〈展開例〉

「王様」と聞くと何を思い出しますか？ 絵本の中のお話に出てきますね。王様は何をする人でしょう。国の中で一番偉い人、王様が決めたことはみんな守らなくていけない、きれいな服を着ている人、おいしいごちそうをいつも食べてる人、お手伝いさんが回りに一杯いて自分は何もしない人、命令を出す人。いろんな王様のことが浮かんできますね。

それでは、イエス様というと、どんなお方ですか？ 優しい人、病気を治す人、十字架にかけられた人、復活した人、神様のひとり子、奇跡を起こす人、私たちにとって、イエス様とはどんなお

方なのでしょう？

今日は、イエス様は王様です、というお話をしましょう。預言者のイザヤさんという人が、イエス様が生まれるずっと前にいました。預言者イザヤさんは、神様からの大事なメッセージを人々に伝える大事なお仕事をしていました。今日読んだイザヤ書はそのことを書いています。

イザヤさんは、これから先に、王様が与えられます、と言うことみんなに伝えました。その王様は、エッサイの子孫から生まれますと言いました。エッサイはダビデのお父さんです。先週学んだように、イエス様はダビデの子孫ですね。イザヤさんの預言はその通りになりました。このイエス様は、国の中で一番偉かったり、おいしいもの食べてたり、戦争していたり、きれいな服を着ているような王様としてではなく、イエス様は、みんなにお仕えする王様として働かれると伝えます。困った人を助け、争いのあるところに平和をもたらすお方。神様なんかいないと言っている人に、神様ごめんなさいと言えるように、神様と人を平和な関係にしてくださる、イエス様は、世界中の平和の王様として来てくださると言いました。

平和の王様であるイエス様を思い出しましょう。けんか、いじめ、無視、悪口、うそ、私たちの中にも周りにもたくさん、神様を悲しませる出来事、心の思いがあります。神様ごめんなさいといつでも言うことができるように、イエス様はそのために来てくださいました。私たちが神様と平和に過ごすことができるように、イエス様は来てくださいました。

平和の王様であるイエス様と一緒にこの一週間を歩みましょう。

〈お祈り〉

神様、平和の王様イエス様をお与えくださってありがとうございます。このイエス様を喜ぶ子どもにしてください。アーメン。

〈ねらい〉

イエス様がお生まれになるずっと以前にイザヤによって平和の王、救いの君イエス様の預言がなされていました。イエス様が王さまであられることの素晴らしさを知り、まことの王であられるイエス様を私の心の中心にお迎えしましょう。

〈ワーク〉

（聖書 イザヤ書11章1～10節）

1. イザヤは神様から与えられた預言を通してまことの王様がどんなに素晴らしい王様であるかをつたえました。

エッサイの子とは（ ）のこと。一節のエッサイの株、根はその人をさしているんですね。若枝とは（ ）のこと。

2. まことの王様は（ ）で満たされています。（2節）

（ ）（ ）（ ）

（ ）

（ ）（ ）があり神様の事を良く知っています。

3. まことの王様はどのような人を助けてくれま

すか。（4節）

（ ）人や（ ）人を助けてくれる王様です。

4. イザヤが預言したまことの王様とはどなたですか。

（ ）

5. あなたにとってイエス様は心の王様ですか？

（ ）

6. 先生やお友達とイエス様を心の王様にお迎えしたら、どんな平和があるか話し合しましょう。

〈祈り〉

天のお父さま、イエス様が私たちの心に平和をあたえてくださる王様であることを知りました。イエス様を信じていつも平安なところをもつことができるようにしてください。

〈答え〉

1. から3. までは聖書を見て確認しましょう。

4. 主イエス・キリスト

5. と6. はまだイエスさまを心にお迎えしていない子どもに配慮して話し合ってください。



〈ねらい〉

イザヤが預言した王、イエス様を待ち望む。

〈展開例〉

- ①今日はイザヤの預言からエッサイの株＝「ダビデの子」である王としてのイエス様の姿を教えられた。第一に神様の思いに従う王。第二に人々を守る王。第三に御言葉で戦われる王。第四に平和を実現させる王。第五に全世界の王。これが「ダビデの子」として約束されていた救い主の姿であった。神様が私達のために王を与えてくださったということは、私達に王という存在が必要ということである。イエス様の王としての働きは君と無関係なことではない。なぜ君に王が必要なのかを考えてみたい。たまにやっているが、必要を知るときには「無い場合」を考えるのがもっと早い。
- ②まず、神様の思いに従う王が必要なのは、君が自分の力では神様の思いに従えないから。これは教会に通う君が胸に手をおいてみればわかることだろう。君が自分勝手に生きるとき、そこには君の罪が顔を出す。神様の思いをわからせてくれる誰かがいなければ、君の一生は罪の誘惑に陥っためっちゃくちゃなモノになるだろう。
- ③罪＝君の身勝手さは神様を無視した恐ろしい欲望の毎日を生み出す。君の身勝手さは、弱い人を食べ物にし、君のせいで苦しみ、悲しむ人を毎日に造り出す。反対に罪は君を加害者にするだけでなく被害者にもする。誰かの身勝手さが君を食べ物にして、弱らせ苦しめる。罪の身勝手さによって弱り傷つく君と君の周りの人々を誰かが癒して、守ってくれなければ君の毎日はボロボロになっていくだろう。
- ③それぞれが「罪によって身勝手に振舞う自分の

在り方」に気付かされて変わることなしに悲しい毎日は変わりようがない。そして罪の身勝手さで起こる被害者、加害者の悲しい関係は無理矢理な強制力や暴力では解決されない。君が心から納得できるように言葉によって教えて成長させてくれる誰かがいなければ、君と君の周りの被害は増していくばかりだろう。

- ④だが、神様を知らない人達の生きるこの世のルールは弱肉強食のルールである。君が強ければ弱い人は餌食となり、君が弱ければ君が誰かの餌食となる。神様がくれる言葉は世の中と反対の掟を与えてくれる。それは強い者が弱い者を支えるという掟。被害者、加害者が生まれるのは「神様の言葉なんか認めない！」と言って神様の思いとケンカする「神様との争い」が原因だ。もし、神様との争いを治めてくれる誰かがいなければ君の毎日に平和は訪れないだろう。
- ⑤神様と争い身勝手に生きて生み出される悲しい世界は君の日常にだけあるのではない。日本中で、神様と争う人間の自己中心さが人間関係をズタボロにしている。神様の思いに従って悲惨な世界を言葉によって平和に導く誰かを世界全体が必要としている。この「誰か」を聖書はイエス・キリストであると明言する。神様の約束された救い主の来られることを待ち望むアドベントに、王であるイエス様が自分に本当に必要だと強く覚えたい。そしていつか、この世界に戻られるイエス様を心から待ち望みたい。

〈祈り〉

全世界の王であるイエス様、自己中心な私とこの世界には、あなたが必要です。どうか一緒にいて助けてください。アーメン。

テキスト イザヤ書 40章1～11節

イザヤ書第40章～55章は、紀元前6世紀後半の捕囚時代末期に、捕囚地バビロンで活動した預言者（第二イザヤ）によって記されたとされています。彼は、神がアッシリアのキュロス王を遣わして、捕囚の民を解放し、まことの神に立ち帰らせることを預言しました。

〈捕囚からの解放〉

「苦役の時」「彼女の咎」(2)とは、バビロン捕囚のことを指しています。紀元前587年に、南ユダ王国はバビロニアとの戦いに敗れます。神殿は焼き払われ、国を失った彼らは、故郷エルサレムを離れ、バビロンに連行されていきました。神に選ばれ、祝福されている民であるにもかかわらず、それとは程遠い現実の中を、70年もの長い間、生きなければいけなかったのです。しかし、捕囚という苦しみは「彼女の咎」とあるように、自らの咎と罪が引き起こした出来事であることを忘れてはいけません。神は彼らの罪に対して裁きをくだされたのです。しかし、神は、今、「慰めよ、わたしの民を慰めよ」と叫ばれます。苦しみの時は終わり、慰めの時が始まると宣言されるのです。

〈主のために、道備えを〉

神が告げられたとおり、紀元前539年、キュロス王によって捕囚の民は、エルサレムの地に帰還することができるようになります。「主のために、荒れ野に道を備え わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ」(3)とありますが、この時の「道」というのは、エルサレムに帰還するための道です。また、「主のために」、とあるように、神に通じる道でもあるということにも心を留める必要があるでしょう。エルサレムへの帰還は、単に場所的な移動を表わしているのではなく、神のもとに立ち帰ることを意味しているのです。これまで、まことの神を礼拝せず、偶像の神々を崇めていた民が、方向転換をして、もう一度まことの神のもとに帰っていくのです。その時、荒れ野の

ような人間の心は慰めを得、神の栄光が現われます。

待降節は、クリスマスに来てくださったイエス・キリストに感謝するだけでなく、悔い改めをもって備える時でもあります。洗礼者ヨハネも、わたしたちが来るべき救い主を迎える準備をするために、悔い改めるようにと語りました（マルコ1:1-8）。キリストの光の中で、自分の中にある闇を深く見つめることができるならば、わたしたちは、クリスマスの本当の喜びを見出すことができます。

〈神の言葉はとこしえに立つ〉

6～8節は天使と預言者の対話の場面です。第二イザヤは、捕囚の民に解放の知らせを一刻も早く告げなければいけません。しかし、その内容があまりにも驚くべき知らせであるがゆえに、何と呼びかけてよいのか分からなくなります。たとえ呼びかけたとしても、肉なる者である人間（の言葉）は、野の花や草のようにはかないものですから、信じてもらえるかどうか不安になるのです。しかし、天使は言います。「草は枯れ、花はしぼむが わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」(8, 55:8-11)。神の言葉は人の言葉と異なり、必ず出来事となるのです。何も信じることができない虚しさに囚われている民に、御言葉の確かさを告げています。

9節以下では、主が御言葉の約束どおりやって来られることを語ります。主は、御力をもって統治される方であると共に、羊飼いのように弱い者を憐れみ、ふところに抱く優しさをもったお方です。罪の奴隷から解放してくださった力強い主は、良き羊飼いとしてわたしたちを導いてくださいます。ここに救い主イエス・キリストのお姿を見ることができるでしょう。主のものでされたわたしたちは、この「良い知らせ」を宣べ伝えることに召されているのです。（藤井 真）

12月12日 「待降節・捕囚からの解放」 説教展開例

テキスト イザヤ書 40章1～11節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22,23,24

〔単元のねらい〕

クリスマスを前にして、イエス様のお誕生は大きな慰めであることを覚えたい。ユダヤの民たちは、その背信のゆえに神様の裁きとしてバビロン捕囚という目にあってしまった。本来ならばそれで終わってしまってもおかしくはない。けれども、神様は背信の民たちをなお憐れんでくださり、イザヤを通して赦しと帰国を約束してくださり、慰めを与えてくださった。本当の慰めは、罪の赦しとインマヌエルの恵みであることを覚えたい。イエス様の誕生は、同じようにわたしたちの罪の赦しと、神様が共にいてくださるといふ大きな慰めであることを覚えたい。それを覚えて、クリスマスを迎える心を整えたい。

「ほんとうの慰め」

だんだんクリスマスが近づいてきました。とても待ち遠しいですね。クリスマスは、イエス様のお誕生をお祝いする日です。そのイエス様のお誕生は、わたしたちにとって大きな慰めでもあるんです。今日はそういうお話をしましょう。

イエス様がお生まれになるよりずっと昔のユダヤの国のお話から始めます。イエス様がお生まれになるよりずっと昔、ユダヤの国にはいろいろな王様がありました。神様のことをちゃんと信じる王様もいましたが、そうではない王様もいました。神様のことをちゃんと信じないどころか、悪いことをしたり、間違った神様を拝んだり、そんなことをする王様もたくさんいました。ユダヤの国の人たちも、そういう悪い王様に見習ってしまい、本当の神様ではない、間違った神様を拝むようになってしまいました。偶像礼拝をしてしまったんですね。十戒では、他の神を拝んだり、偶像礼拝をしたりしてはいけないと、はっきり教えていましたね。

本当の神様は、たいへん悲しみましたし、お怒りになりました。何とかしてユダヤの人たちに悪いことを止めさせて、本当の神様のところに立ち帰るようにさせようと思いました。神様のお言葉を伝える預言者を送って、本当の神様を信じるようにと、何度も何度も教えられました。それでも、ユダヤの国の人たちは、偶像礼拝をやめません。

残念なことですが、そのためにとうとうユダヤの国は、神様の裁きにあってしまいます。ユダヤの国は、大きなバビロンという強い国によって滅ぼされてしまいます。ユダヤの人たちも奴隷として、バビロンという国に連れていかれてしまいます。それは、偶像礼拝をするユダヤの人たちに対する神様の裁きだったのです。自分の国が滅ぼされてしまい、家も町もなくなってしまい、奴隷として外国に連れて行かれてしまう、とても辛かったことでしょう。でも、仕方ありません。偶像礼拝という罪を犯し、本当の神様を捨ててしまったんですから。そうやって初めてユダヤの人たちは、自分たちがたいへんな罪を犯してしまった、そのために神様の裁きがあって、こんな目にあってしまった、そんなふうに思ったかもしれません。

では、神様はそれでもうユダヤの人たちを見捨ててしまわれたのでしょうか。いいえ、そうではなかったのです。不思議なことが起こります。神様の言葉を伝える預言者の一人にイザヤという人がいました。神様はそのイザヤに言います。「わたしの民を慰めなさい」。

神様は、神様を捨ててしまったユダヤの人たちを、まだ神様の民と呼んでくださっています。神様はユダヤの人たちを見捨ててはいなかったのです。ユダヤの人たちは神様を捨ててしまったのに、神様はユダヤの人たちを捨ててはいませんでしたし

た。そして、神様の民であるユダヤの人たちを慰めなさいとおっしゃるのです。確かにユダヤの人たちは大きな罪を犯して、神様の裁きを受けてしまいました。でも、その罪がつぐなわれて、神様がゆるしてくださる、というのです。そうしてまた、ユダヤの国に帰ることができるというのです。ユダヤの国に帰る準備をするようにと教えています。なんとということでしょう。なんと、神様はあわれみ深いお方なのでしょう。

大きな罪を犯してしまったのに、神様がゆるしてくださる、慰めてくださる、これは驚くべきことです。あまりにもすばらしいことなので、もしかしたらユダヤの人たちは、「ほんとうだろうか。そんないいことがあるのだろうか」と思ってしまうかもしれません。でも、今度こそちゃんと神様の言葉を信じなければなりません。受け入れなければなりません。神様の言葉は絶対に確かなことです。本当のことです。そのことを教えるために、神様はイザヤに教えました。「草は枯れ、花はしぼむが わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」。神様の言葉は絶対に本当です、永遠に変わりません、ということです。

神様を捨てて、罪を犯してしまったのに、神様の方は見捨てないで、罪をゆるしてくださる、慰めてくださる、これはほんとうの慰めです。ユダヤの人たちだけの話ではありません。わたしたちのことも、神様は見捨てないで、罪をゆるしてくださるというのです。神様が一緒にいて、守って

くださるというのです。

これが一番大きな、本当の慰めです。人にいじめられたときに、お友だちが慰めてくれるということもあるかもしれません。病気やけがのときに、お父さん、お母さんが慰めてくれることもあるかもしれません。失敗したときに、先生が慰めてくれることもあるかもしれません。確かにそういうことも、大切な慰めですね。でも、一番大きな、ほんとうの慰めは、神様が罪をゆるしてくださるということです。神様がわたしたちを見捨てないということです。神様がいつも一緒にいて、守ってくださるということです。

実は、イエス様はそのためにお生まれになりました。イエス様はわたしたちの罪がゆるされるために、十字架におかかりになりました。イエス様は、わたしたちがいつも神様と一緒にいることができるようにしてくださいました。ですから、イエス様のことをインマヌエルと呼ぶことがあります。インマヌエルというのは、神様が一緒にいてくださる、という意味です。イエス様のお誕生が、わたしたちにとって大きな慰めであるということが、だんだんわかってきましたか？

今、お話したことは、聖書のお話ですから、本当のことです。絶対に確かなことです。すなおに信じる心を持ちましょう。来週は、いよいよクリスマスの礼拝になりますね。本当の慰めであるイエス様のお誕生をお祝いしましょう。(川杉安美)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書 40章1節

慰めよ、わたしの民を慰めよと
あなたたちの神は言われる。



〈ねらい〉

バビロン捕囚からの救いを通して、神さまの本当の慰めを知り、イエス様のお誕生が今の私たちにとっての大きな慰めであることを学ぶ。

〈展開例〉

神さまは、私たちが本当の神さまを礼拝すると喜んでくださいますが、もし間違った神さま、人間が勝手に作りだしたり考え出した神さまを礼拝したりすると、とても悲しまれ、怒られます。

昔、ユダヤの国の王様とその国の人たちは間違った神さまを礼拝するようになってしまいました。それを見られた神さまは悲しくなり、怒られました。神さまのみ言葉を伝える預言者さんをその王様のところへ遣わして、何度も「間違った神さまを礼拝しないで、本当の真の神さまを礼拝する」ように伝えました。でも、王様はちっともそれを聞きませんでした。それで、とうとう神さまはその王様とその国の人々に罰を与えられました。近くの強い国バビロニアという国との戦いにユダヤは負けて、人々は奴隷としてバビロニアに連れて行かれてしまいました。

ユダヤの人々は何年も何年も（70年間）奴隷として働かされました。神さまは「ユダヤの人たちが間違った神さまを礼拝し続けたから悪いのだ。わたしは知らない。放っておこう」と思われたのでしょうか。いいえ、神さまはユダヤの人々

を愛しておられたので、ユダヤの国へ帰れるようにしていただきました。

ユダヤの人たちは神さまのおっしゃることを聞かないで悪いことをしてしまいました。でも、神さまはその人たちに「悪いことをしたのだから、もう知らない」とは言われず、その悪いこと（罪）をゆるして下さり、やさしくしてくだり、元気にして（慰めて）いただきました。神さまは私たちのこともいつも見ていて下さり、悪い心（罪）をゆるして下さり、守ってくださいます。これはとても素晴らしいことですね。

神さまは私たちが大好きで、わたしたちの悪い心（罪）をゆるして下さるために、イエスさまを私たちのところに送ってくださったのです。もうすぐイエスさまのお誕生をお祝いするクリスマスがやってきます。イエスさまのお誕生を神さまからの大きな本当の贈り物（慰め）として、イエスさまのお誕生をお祝いしましょう。

〈お祈り〉

神さま、いつも私たちを愛し、守ってくださりありがとうございます。わたしたちの悪い心をゆるして下さるために、イエスさまをおくってくださりありがとうございます。来週はここから感謝して、イエスさまのお誕生をお祝いできるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

イエス様のお誕生は、私たちにとって大きな慰めであることを知る。

〈はじめに〉

テーマ：希望

全員：イエスは言われました。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（ヨハネ8:12）

リーダー：なぜ、私たちは、このろうそくに灯を灯すのですか？（一本目二本目三本目のろうそくに火をつける）

子ども：最初のろうそくはメシアの約束を、二本目はイエス様が平和をもたらすということを、私たちに思い出させるためです。そして三本目は、イエス様がこの世界の希望であることを私たちに思い出させます。

全員：「王の名がとこしえに続き、太陽のある限り、その名が栄えますように。国々の民は皆、彼によって祝福を受け、彼を幸いな人と呼びますように」（詩編72:17）

（“Sunday School that Really Works, Faith Alive”, Grand Rapids, Michigan 109ページ引用）

〈展開例〉

イエス様がお生まれる前のずっと昔、ユダヤのいう国に王様がいましたが、この王様は本当の神様を礼拝しないで、人間がつくったいろんなものを神様にしてしまって、拝んでいました。このことを「偶像礼拝」といいますね。王様だけでなく、その国のたくさんの方が偶像礼拝やめることはありませんでした。

それを見た、本当の神様は悲しまれました。ですから、何度も何度も預言者をこの国に送って、偶像礼拝はやめなさい。本当の神様を信頼して礼拝しなさいということを行いました。とうと

う、神様はこのユダヤの国を滅ぼすことにしました。ユダヤはバビロンという強い国に滅ぼされてしまいます。ユダヤの国の人々は奴隷にされて、バビロンに連れて行かれてしまいました。奴隷になって、苦しい毎日お仕事や、おなかが減ってもおなか一杯にご飯が食べられないことや、いろんな大変な目にあって、ようやく、みんなは、自分たちが、何度も神様の言葉に従わないで、勝手に人間がつくったものを神様にして礼拝していた間違いに気づいたのです。苦しい思いや、悲しみや後悔を一杯一杯して、やっとこの大事なことに気づかされたのでした。

こんな様子を、神様はどのように思われたでしょう。自分のいうことを全然聞かなかったんだから、苦しんで当然だ、もっともっと苦しみなさいと思われたのでしょうか。違いますね。神様はこのユダヤの人々を心から悲しまれました。そして、預言者イザヤさんを送って、心から慰めました。見捨てないでずっと、ユダヤの人々を心配して見ていてくださったのです。神様は、慰めの言葉をイザヤさんを通して告げてくださいました。神様は赦してくださる、もうすぐしたら自分の国のユダヤに帰れますからその準備をしなさい、と。

神様は罪を赦し、慰めてくださるお方です。イエス様はそのためにお生まれくださいました。私たちの罪を赦して神様を共にいけることができるために十字架にかかって死んでくださったのです。そのためにお生まれくださったのがイエス様です。

このイエス様がいつも私たちとともにいてくださることが私たちの一番の慰めであり、希望です。

〈お祈り〉

神様、罪を赦してください大きな慰めと希望をくださってありがとうございます。いつでも一緒にいてくださって、ありがとうございます。アーメン。

〈ねらい〉

待降節は、クリスマスに来てくださったイエス・キリストに感謝するだけでなく、悔い改めを持って備える時でもある。偶像礼拝をしてしまったユダヤの人たちを主が赦してくださり、またユダヤの人たちも主の言葉を信じて従ったことを通して、真の神様だけを信じることの大切さを教える。そして、日々罪を犯す私たちを主は見捨てず罪を赦し、慰めを与えてくださることを伝えたい。

〈ワーク〉

子どもたちと一緒にメッセージを思い出しながら聖書を開き以下の問題に取り組んで下さい。

1. 今日のお話はイエスさまが生まれるずっと前のことですか、ずっと後のことですか。
()
2. 神様を信じている良い王様もいましたが悪い王様もいました。悪い王様はどうして悪かったのですか
()
3. ユダヤの人たちが本当の神様を信じるように神様はある人をユダヤに送りました。
ある人とは誰ですか (ひとつえらぶ)
(・預言者 ・悪魔 ・子供)
4. そして、ユダヤの人たちは 神様がしてはいけないと言った偶像礼拝をやめましたか
()
5. 偶像礼拝をやめなかったユダヤの人たちはどうなりましたか (○をうめる)
・自分の○○がほろぼされた

- ・○○も無くなった
- ・○○○として外国へ連れて行かれた

でも、神様はユダヤの人たちを見捨てずに預言者イザヤに「私の民 (ユダヤの人) をなぐさめなさい」と言いました。そして、神様はユダヤの人たちにユダヤの国に帰るように言いました。

6. ユダヤの人たちは神様の言葉を信じましたか。
()
7. 罪をおかしたユダヤの人たちをゆるしてくださった神様をあなたは信じますか。そして、神様にしたいがたいと思いますか
()

〈祈り〉

神様、わたしは時々お友だちや兄弟のことを悪く思うことがあります。またお母さんのいうことをききたくないときがあります。でも神様は私をゆるして、いつも守ってくださることを感謝します。これからも神様を信じて神様にしがって行くことができますように。このお祈りをイエス様のお名前をとおしてお祈りします。アーメン。

〈答え〉

1. ずっと前のこと
2. 間違った神様を拝んでいた
3. 預言者
4. やめなかった
5. くに・いえ・どれい
6. 信じた



〈ねらい〉

自分をカづけてくれる救い主を待ち望む。

〈展開例〉

①いよいよ来週はクリスマス。救い主イエス様の誕生を祝うポルテージを上げていこう。今日は聖書から自分達の罪のせいで国を失い奴隷となったイスラエルの話と、神様はイスラエルを見捨てなかったこと、そして、罪を赦して再び神様と一緒にになれるために、イエス様はお生まれになられたということを聞いた。イエス様を君は「救い主」と呼ぶが、それはイエス様が、罪のせいで神様と一緒に生きていけない人生から君を救い出してくださる御方だからである。

②「救う」という言葉は「助ける」という意味。漢字で「助」は「且（シヨ）」に「力」と書く。「且」は重ねるという意味。助という字は「力を重ねる」というつくりで出来ている。君という存在に力を重ねてくださる方がイエス様である。人間は力、エネルギーをもらわなくては生きていけない。食べ物、水、外から何かの力をもらって君達の体は生命を維持する。人の心も同じだ。人の心も力を受けることなしにはやっていけない。人は心のエネルギーとして色々なモノから受ける満足感を心に注ぎこむ。「お金」「趣味」「食べ物」「ファッション」「人間関係」。こういうのも一応、心のエネルギー。でも、不純物も多い。食べ物でも飲料でも悪い成分があれば体を壊す。心も同じ。君が壊れてしまわないように、心にも正しいエネルギーが必要である。人に必要な正しい安全なエネルギー。それは神様からしか頂けない。しかし、テーブルにつかなくては、食事は食べられない。ホースを突っ込まなく給油は不可能である。心の力は神様と君が触れ合うことなしに補給されない。

③ところが困ったことに人には神様から離れていこうとする「罪」がある。神様の方は人を生かそうと思われるのに、受け取るほうが神様を拒む。恵みを断り続け、さらには逆らおうとする。その末路が神様の怒りを受けての滅びであることは今日のイスラエルの話に明らかだった。自分たちでは生きる力を得られない人間のために、神様は「罪」という壁を壊して神様と人を結びつけようと、御自分と同じ神である独り子を助け主としてこの世界に遣わされた。神の御子であるイエス様も、今度こそ人が神様と触れ合って共に生きられるようにと、その身を惜しまずにこの世界に来て下さった。そして、神様と人を結びつけるために採られた方法とは、神様の怒りをその身に受けて君の代わりに十字架で命を落とすという方法だった。このイエス様の十字架の死があればこそ、今、君達は教会で神様から生きる力を受けることができる。力を求めて祈ることができる。イエス様が一緒にいてくださることによって、君の人生に神様と触れ合っけカづけを受ける毎日が与えられた。

④心が「カづけられる」ことを聖書では「慰め」とか「励まし」という。イエス様は神様だけが持っている、人が生きるための力を君に与えてくれる御方である。君が弱って神様の前から消え去ることを不憫で可哀想に思われたイエス様は、君のために十字架にかかり、いつまでも君と共にいようと言われる。このイエス様が世界に來られたクリスマスを感謝の気持ちをもって待ち望みたい。

〈祈り〉

私達が神様と共に生きていくため十字架についてくださったイエス様。そして御子をくださった父なる神様。その愛に感謝します。アーメン。

テキスト ルカによる福音書 2章8～21節

待ちに待った救い主が誕生しました。ルカによる福音書で、救い主誕生の喜ばしい知らせが最初に知らされたのは、羊飼いたち。この羊飼いたちとは、皇帝アウグストゥスが住民登録の勅令を出しているのに野宿したままだったという、社会の敷に数えられない人々でした。すなわち社会的弱者です。また、羊飼いは安息日にも仕事をしなければならず、人々から安息日規定に反する者と見なされて、汚れた者・罪人とされていました。

しかし、神は、権力や富などの世的な力を持つ者ではなく、羊飼いたちのような存在を選んでクリスマスの訪れを知らせました。皇帝の勅令が届けられないような場所であっても、神は救い主誕生という喜ばしい知らせを届けてくださいました。しかも、その知らせは救い主に会おうとすれば会える具体的なものでした。そして、救い主に出会った羊飼いたちは、神をあがめ賛美する者にされていきました。

羊飼いたちは、羊と遠方へ行くと、たびたび野宿をしました。御子の誕生の夜に天使たちが来ました。この時の季節は不明です。神の栄光があたりを照らし、羊飼いは恐れ戸惑います。主の栄光は、旧約聖書では色々な現象として記されていますが、輝くものとしても記されています。羊飼いたちはこの神の栄光の輝きによって、それが神によるものだと悟りました。

天使は、「民全体」への大きな喜びを知らせます。「民全体」とは、14節の「御心に適う人」と同じです。この人々へ、救い主の誕生という大きな喜びが知らされます。この救い主こそ、人々を罪の苦しみから解放してくださる方です。

聖書には、多くの罪が如実に描かれています。信仰の偉人（アブラハム、ダビデ、その他）でさえも例外ではなく、皆が罪に苦しみ、あるいは罪を楽しみ、罪から自由な人は誰もいません。けれ

ども、罪のない御子が人としてお生まれになり、今や御子こそがわたしたちを罪から救い出してくださるのです。

神から遣わされた天使は、御子の誕生を知らせ、羊飼いたちが救い主に合わせてその方だとわかるように、乳飲み子は飼い葉桶の中に寝ていることを知らせました。

続いて、天使に天の大軍が加わり神を賛美します。天使たちはバラバラではなく、大勢の天使たちが皆そろって神を賛美しました。それに続いて、地上に生きる人々に同じように賛美させられていくのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ」とは、救い主誕生という偉大な業をなされた神を賛美する言葉。「いと高きところ」とは神のおられるところという意味です。一方、「地には平和、御心に適う人にあれ」とは、イエス・キリストによってまことの平和が築かれていくのであり、この平和とは、神がご支配くださる平和、すなわち神との平和であり、御子イエス・キリストを救い主と信じる者は、この平和を得ることができる、ということなのです。

羊飼いたちが神をあがめ賛美した態度は、この平和を喜び、イエス様に従う者の態度、イエス様に出会った者の姿です。

皇帝は救い主とも呼ばれました。しかし、まことの救い主はイエス・キリストです。イエス・キリストは人々の只中で生き、また飼い葉桶という悲惨なところで生まれました。それは、ご自身が罪の悲惨を背負って生きていく証しなのです。

まことの救い主の証しとして、ここでは、神の栄光の顕現、天使たちによる証言、ベツレヘムでの誕生、飼い葉桶での誕生、処女マリアからの誕生が記されています。いずれの証しも、神が根拠です。（酒井啓介）

12月19日 「降誕祭・主イエスの降誕」 説教展開例

テキスト ルカによる福音書 2章8～21節
参照カテキズム ハイデルベルク信仰問答 問1, 36, 47

〔単元のねらい〕

2009年12月のクリスマスに、滋賀摂理伝道所のクリスマス礼拝の中で行った子ども説教を、メモを手がかりに、再現したものです。小学校低学年から幼稚園・保育園生に向けた説教でしたから、多くのことは語らず、天使によって羊飼いに知らされた「大きな喜び」にポイントを絞りました。その喜びは、贖い主であるイエス・キリストを与えられたということです。キリストは、まったくその価値がないのに、罪と悲惨からご自身の血を代価としてわたしたちを買い取ってくださいました。それは、わたしたちをご自身のものとしてくださり、世の終わりまでいつも共にいてくださるためでした。キリストを与えられた喜びは、もっと豊かなものですが、この側面に光を当てて、子どもたちと共に「大きな喜び」を味わいたいと思います。

「クリスマスの『大きな喜び』」

〈起〉

クリスマス、おめでとうございます。

クリスマスは、何の日だか知っていますか？

——イエス様のお生まれになった日です。

先生は今、みんなに向かって「クリスマス、おめでとうございます」と言いましたけれど、これはちょっと変だと思いませんか？

——クリスマスはイエス様がお生まれになった日なのだから、イエス様に「お誕生日おめでとうございます」と言うなら分かるけれど、みんなに向かって「おめでとうございます」と言うのは、おかしいよね……。

でも、これは、間違いではないのです。みんなにとっても嬉しい日、神様からのとっても大きな、大切なプレゼントをもらった日だからです。

〈承〉

イエス様がお生まれになったとき、最初にそのことを知らされたのは誰だったのでしょうか？

今日、あとでみんながやってくれる劇には、残念ながら出てきませんが、「羊飼い」です。

羊飼いたちは、夜、外で、羊たちの番をしていました。そこに神様の天使が現れて、神様の「栄光」が照らしたそうです。どんな様子だったの

でしょうね。夜なのに、急に明るくなって、白い服を着た人が現れたのかもしれない。

羊飼いたちは、ただ事ではないと思いました。普通ではありえないようなことが起こっている！と思って、驚いて、震え上がってしまいました。

本当に、そのとおり。神様が、御自身の「栄光」で照らされたのですから、それは、人間にできるようなことではありませんでした。ただ、明るいライトで照らすのとは違うのです。だから、驚いて、震え上がってしまったのです。

そして、今日、みんなに特におぼえてもらいたい言葉は、そのときに天使が言った言葉です。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。」

驚いて、震え上がっている羊飼いたちに、「大きな喜び」を伝えに来たのですよ！と、天使は言うのです。

それは、羊飼いたちだけのことではありません。あなたたち、みんなに、「喜び」が与えられたのですよ！この「喜び」は、あなたたちみんなのものなのですよ！

〈転〉

この「大きな喜び」が、ここにいる、みんなに

も、与えられた。だから、みんなに「クリスマス、おめでとうございます」と言うのです！

この「大きな喜び」というのは、何のことですか……？

——イエス様がお生まれになったということですよ。

イエス様がお生まれになったということが、わたしたちの「大きな喜び」なのです。

なぜならば、イエス様は、わたしたちを決して見捨てない救い主だからです。わたしたちから、決して離れてしまわない。世界が終わるときまで一緒にいるよと、約束してくださっている方だからです。

友だちとケンカしてしまったときも、先生やお父さん・お母さんにしかられたときも、いじめられて嫌な気持ちになってしまっているときも、悪いことをしてしまっ、「ああ悪いことをしちゃったなあ」と思っているときも、イエス様は、決して、わたしたちを見捨てない。

みんなのために、命を失ってもいいと言ってくくださる方です。

〈結〉

クリスマスには、こんなに素晴らしい方が、わたしたちのところに来てくださいました。

だから、みんな、お互いに「クリスマス、おめでとう」と言いましょ。

この「大きな喜び」、素晴らしいイエス様と与えられた喜びをお祝いしたいと思います。

〈祈り〉

イエス様。

クリスマスに、わたしたちの住む世界に来てくださって、ありがとうございます。

あなたは、わたしたちの「大きな喜び」です。どんなときにも、誰もわたしのことなんて考えてくれないと思えるときでも、あなたはわたしたちと一緒にいてくださいます。決して裏切らない、決して見捨てない、あなたの約束を感謝します。

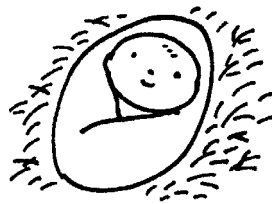
どうぞ、わたしたちが、そのことを、いつも思い出すことができますように。

イエス様のお名前でお祈りします。アーメン。

(大西良嗣)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 2章10節 (後半)

恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。



〈ねらい〉

救い主の誕生が、なぜ、真っ先に野宿をして羊の番をしていた羊飼いたちに知らされたのか、そのことについて分級で子どもたちと一緒に考えてみたい。

〈展開例〉

救い主イエス様がお生まれになったことを、いちばん最初に知らされたのは、誰でしたか？ そうですね。羊飼いたちでしたね。羊飼いたちというのは、夜中でも、外にいて、眠らないで羊の番をしなければならない人たちでした。なぜなら、もし、羊飼いたちが眠ってしまうと、羊がどこかに行ってしまう子になってしまうからです。それに、羊を狙う狼たちがいつやってくるかもわかりません。だから、夜でも交代で、羊の番をするのです。

ちょうど、そのときでした。一人の天使が突然現れて、神様の「栄光」があたり一面を照らしたのです。夜だったのに、急に明るくなって、白い服を着た人が自分たちに近づいてきたのですから、羊飼いたちは、もうびっくりして、震え上がってしまいました。でも、その天使は、そこで「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」と、羊飼いたちに告げたのです。

羊飼いたちは、「あなたがたのために救い主がお生まれになった」という、その天使の言葉を信じました。「あなたがたのために」とその天使から言われたとき、羊飼いたちは、まさに今日、「自分たちのために」に救い主がお生まれになったんだ、と本当に喜びました。なぜなら、羊飼いたちこそ、救い主が来てくださることを本当にずっとずっと待ち望んでいた人たちだったからです。神さまはそのことをよくご存じでした。

イエス様の時代には、羊飼というお仕事は、

人々から軽蔑されていました。実際のところ、決まった家もないし、ずっと野宿をしながら、羊と一緒に暮らすのです。だから、安息日、つまり今でいう日曜日の礼拝にも、羊飼のお仕事があるので、みんなのように来ることができませんでした。そのような羊飼いたちに、神様の方から、天使を遣わし、真っ先に救い主イエス様の誕生を知らせたのです。そして、どこに行けばその救い主に会えるのかも、教えてくださいました。

羊飼いたちは、出かけて行って、その場所をすぐに探し当てました。そこには、お父さんのヨセフと、おかあさんのマリアと共に、布にくるまって飼葉桶のなかに寝ている生まれたばかりの赤ちゃんがいました。そこは、馬小屋でした。きっと、真っ暗で、汚くて、臭かったかも知れません。しかし、本来ならば、神様のこどもであり、救い主であるイエス様が、王様の住むような立派な宮殿ではなく、貧しい馬小屋で生まれてくださったのです。それは、決まった家もなく、人々から蔑まれながら羊の世話をしていた羊飼いたちにとって、どれほど慰めに満ちていたことかと思います。自分たちのために生まれてくださった救い主は、自分たちとこんなに近いところにいてくださるお方であるということが、どれほど大きな喜びだったことでしょう。

羊飼いたちは、このあと、周りの人々に、救い主がお生まれになったというこの大きな喜びを告げ知らせる者となっていきました。

〈お祈り〉

天の父なる神様。御子イエス様を、わたしたちのところに送ってください、ありがとうございます。羊飼いたちが、その誕生を喜んだように、私たちもイエス様の誕生を心から喜ぶことができますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

主イエス様がお生まれになったことを、自分の喜びとなりますように

〈はじめに〉

テーマ：喜び

全員：イエスは言われました。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ8:12)

リーダー：なぜ、私たちは、このろうそくに灯を灯すのですか？(全部のろうそくに火をつける)

子ども：最初のろうそくは、メシアの約束、二本目はイエス様が平和をもたらすこと、三本目はイエス様が世界の希望であることを私たちに思い出させるためです。そして四本目は、私たちが、喜ぶことができる者であることを思い出させるためです。それは、イエス様が私たちの救い主だからです。

全員：「主にほめ歌を歌え。主は威厳を示された。全世界にその御業を示せ。シオンに住む者よ 叫び声を上げ、喜び歌え。イスラエルの聖なる方は、あなたたちのただ中にいます大なる方。」(イザヤ12:5~6)

(“Sunday School that Really Works, Faith Alive”, Grand Rapids, Michigan 109ページ引用)

〈展開例〉

クリスマスおめでとうございます。こうして、皆さんと一緒に「クリスマスおめでとうございます」と顔と顔を合わせてごあいさつできる事を本当にうれしく思います。病気で今日来ることができなかったお友だち、用事があったこれなかったお友だち、しばらく日曜学校をお休みしているお友だち、今ここにいないお友だちのことも思います。神様が一人ひとりを祝福してくださるようにお祈りしましょう。

これまで、イエス様がどういうお方であるか聖書のことばを通して知らされました。今の私たちは聖書があるので、また聖書を教えてくださる親や教会の先生がいるので、イエス様のことを知ることができます。

でも、ずっとずっと昔、この世で一番最初にイエス様のお誕生を知らされた人たちがいるんですね。誰でしょう？ それは、羊飼いさんたちだったのです。羊飼いさんはもちろん、羊のお世話をするのがお仕事です。昼は草を食べさせ、夜は、他の動物に食べられないように羊を守るのがお仕事でした。ある夜、羊の番をしている羊飼いさんたちに、突然天使が現れて「恐がらないでください。大きな喜びを伝えにきましたよ。あなた方のために救い主がお生まれになりましたよ。その方はずっとあなた方と共におられる救い主ですよ」と言ったのです。羊飼いさんたちは、どんなに驚いたことでしょうか。どんな大きな喜びだったでしょう。

私たちはどんなことがあっても、イエス様が共にいてくださいますから、喜ぶことができます。どんなに悲しい時でも、困った時でも、一人ぼっちで寂しい時も、悔しい時も、腹がたつ時も、こんなことして神様はゆるしてくださらないかもしれないと心配になる時さえ、共にいてくださり、赦しと慰めと希望と喜びをくださいます。

羊飼いさんたちと同じ喜びが今日の私たちにも与えられているのです。

〈お祈り〉

神様、私たちにイエス様をくださってありがとうございます。この喜びをひとりでも多くの人に伝えることができますように。



〈ねらい〉

クリスマスの大きな喜びを伝える。イエス様はどんな人のところにも来てくださり、私たちを罪の苦しみから解放してくださり、世の終わりまで、共にいてくださるということ、そしてイエス様を受け入れて救い主と信じる者は、真の平和を得ることができることを伝える。

〈ワーク〉

子どもたちと一緒にメッセージを思い出しながら聖書を開き以下の質問に取り組んでください。

1. クリスマスは何の日ですか。
()
2. イエス様がお生まれになったとき最初にそのことを知らされたのは誰ですか (8節)
()
3. 羊飼いたちが羊の番をしている時にそこに何かが現れました。何ですか。(9節)
(○○の○○し)
4. 主の天使は羊飼いたちに何と言いましたか。
(10節)
(おそれるな、わたしは○○全体に与えられる○○きな○○○○を告げる。)
5. そして天使は今日ダビデの町で救い主がお生まれになったと言いました。この救い主は何だと言っていますか。(11節)
(この方こそ、主○○ヤである)
6. そして、羊飼いたちは天使たちが離れて天に去ったとき、みんなでどこへ行こうと言いましたか。
(○○○○ム)

7. そして、ひつじかいたちはベツレヘムの馬小屋でヨセフさんとマリヤさんと赤ちゃんを見つめます。この赤ちゃんは誰ですか。
()
8. イエスさまは私たちの何をゆるすために来られたのですか
()
9. あなたは、このイエスさまが神様からのおくりものでいつもあなたと一緒にいてくださることを信じますか。
()

〈祈り〉

神様。クリスマスに私たちにイエスさまを送ってくださりありがとうございます。この大きな喜びを感謝します。私がかまっているときにもお友だちや兄弟とけんかをしてしまったときも、いつもそばにいてくださりありがとうございます。これからもずっとイエスさまを信じていくことができますように。イエスさまのお名前をとおしてお祈りします。アーメン。

〈答え〉

1. イエス様がお生まれになった日
2. 羊飼い
3. 主の天使
4. 民、よろこび
5. メシヤ
6. ベツレヘム
7. イエス様
8. 罪をゆるすため



〈ねらい〉

救い主と出会った羊飼いの喜びに共感する。

〈展開例〉

①世界で初めてのクリスマス、この世界に誕生されたイエス様とは「民全体に与えられる大きな喜び」であり、それが本当であることの「しるし」つまり証拠だった。今日の箇所はこの喜びの知らせを受け取った羊飼いが登場する。では「羊飼い」とはどんな人達だったのか？ 彼らは羊とともに町の外で生活をしていた。アウトドアキャンプ経験者ならわかると思うが、一年中外で暮らせば、汚れや匂いが身について、町の人からよく思われなかったに違いない。また生き物の世話も生活を不規則にする。ユダヤ人たちは安息日を守らない生活の羊飼いを罪人扱いしていた。華やかな町で暮らす人達からは「お前はダサイ！ 汚い！ 臭い！」と毛嫌いされ、仲間からは「お前は、なんて生活をしているんだ！ お前の生活は神様が嫌う生活だ！ このダメ人間め！」と敬遠される。これが羊飼いであった。

Q. 皆は自分のライフスタイルを馬鹿にされ、生き方を否定されたことがあるか？ ひょっとしたら、仲間の中で「あいつダサイよな」こんな言葉にビクビクしている人がいるかもしれない。学校や家で「お前の生活態度はなんだ！ そんなじゃお前はダメだ！」自分を否定されるような言葉を受けたことがあるかもしれない。

今日の箇所は、そんな人のところであっても救いは届けられると教えてくれる。良い暮らし、良い仕事、こうしたものは神様にとってどうでもよいこと。イエス様誕生の知らせは、救いを必要としている弱い人々に与えられた。

②羊飼いたちは天使から約束を受け、天使の大軍

と遭遇する。普通なら腰を抜かして病院にでも搬送されそうなものだ。しかも、救い主は生まれたての赤ん坊が動物のエサ箱の中という異様な姿で寝ている、と言う。それを聞いた彼らは「急いで」出ていった。つまり心から約束を信じたのだ。そして彼らは一生懸命に探したに違いない。自分を否定する世界から自分達を助けてくださる方がいると彼らは信じ、人でごったがえすベツレヘムの町中を探し回った。自分達を毛嫌いし、自分達をダメ人間扱いする町の中で彼らは遂に天使のお告げのとおり赤ん坊を目の当たりにした。神様は約束を信じ、イエス様との出会いを求めて駆けずり回る人を無視されない。仲間や学校、家庭や塾、世間がどれだけ君を否定しようが、神様に助けを求める君に、神様は確かに助け主との出会いをくださる。

③羊飼いたちは言われたとおりのあり得ない状況の赤ん坊を見て、天使の言葉の全てを確信したことだろう。「神様からの救い主は確かにこの世界に来られた！ そして、私は確かにその方にお会いした！」彼らは喜びを撒き散らして帰って行った。私達は今、顔を突き合わせてイエス様と出会うことはない。だが神様の約束を信じてその言葉に救いの望みをかける人の心にイエス様はかならず御自分の姿を刻みつけてくださる。そして、未来。イエス様は見えるカタチでこの世界に来られると約束された。今、この心に共にいることをわからせてくださる天のイエス様に感謝しつつ、いつの日か共に顔を合わせて御会いするときを心待ちにしたい。

〈祈り〉

神様の救いを求める者に出会ってくださるイエス様、あなたと共にいる喜びをいつまでも増し加えてくださいますように。アーメン。



〈赤子のイエス・キリスト奉獻〉

ここでは、イエス・キリストが、人生の初めから神の律法を十分に満たしていったことが記されています。イエス・キリストの職務として、生涯、律法を満たして生きることが必要不可欠でした。罪なき者が死ななければ、贖いの業は成立しません。キリストの職務の中心は十字架の贖いの業であり、これを果たすために罪を犯さないことが必要なのです。

21節で、割礼を受けること、22節から、清めの期間（レビ記12章）を持つことが記されています。男子出産後、四十日間は、母は不浄の期に服し、また、長男の規定（出エジプト13:2, 12）に従っていけにえをささげています。いけにえは一歳の子羊一頭と家鳩の雛か山鳩一羽でしたが、貧しい人は「山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽」でよいとされていました（レビ12:68）。ここから、両親が貧しかったということがわかります。

イエス・キリストはご自分で判断できないような赤ちゃんのときも、聖霊が両親に働いて、律法を守らせてくださいました。この部分から、赤子から成長し、少年、青年になっても罪を犯さず、律法を守って生きていったことが暗示されています。イエス・キリストの贖いの業が確かに始まりました。わたしたちが完全に罪赦されるように、イエス・キリストは律法を一つひとつ守っていかれたのでした。

〈神の約束の時の到来〉

さて、両親がエルサレムの神殿についたとき、老シメオンに出会い、彼から祝福を受けました。古代イスラエルの習慣では、幼児を老祭司やラビに抱いてもらって祝福を受けるために神殿に上ることがあったようです。

重要なことは、一つには、ファリサイ派や律法学者たちでなく、聖霊に導かれた老預言者シメオンが語っていることでしょう。世の権力によらず、まさに神に導かれた人によって神がたたえられま

した。

もう一つには、老シメオンの語った言葉です。救い主イエス・キリストを見つけて、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます……」と言います。これは、26節の、「メシアに会うまでは決して死なない」という言葉と関係しています。イエス様がメシア、すなわち救い主であることを証言したものです。また、「異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」と言って、神をたたえます。救い主到来の約束が成就したことを改めて語っています。約束の成就是、老シメオンに続いて、女預言者アンナの様子からも証しされています。

老シメオンの語ったことは、習慣的な言葉に留まるものではなく、それを大きく超えて偉大なことを語っていたことは、33節の両親の驚きから、知ることができます。

34節では、イエス・キリストの働きについて、「イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりする」、審判者としての働きが語られました。また、「反対を受ける」受難のメシア救い主であることが語られています。皇帝アウグストゥスのように宮廷で守られている者とは異なり、受難の救い主こそ、まことの救い主なのです。このイエス・キリストこそ、神の御前にまことの正しい生き方をなさいました。それゆえに、イエス・キリストを見るときに、わたしたちの「心にある思い」が正しいのかどうか、「あらわにされ」ます。

老シメオンの様子は喜びに満ちています。「わたしはこの目であなたの救いを見たからです」（30）。「この目であなたの救いを見た」とは、この後、イエス・キリストを信じて救いに加えられる人々の先駆けでした。まさに、救い主がすでに生まれた「今日」、「今」、ユダヤ人を越えて「異邦人を照らす啓示の光」として、世界中の信仰者は、イエス・キリストにあって神の救いを見ているのです。

（酒井啓介）

テキスト ルカによる福音書 2章22～35節
 参照カテキズム ハイデルベルク教理問答 問1,36
 ウェストミンスター小教理問答 問20
 ウェストミンスター信仰告白 第8章4節

〔単元のねらい〕

救済史の中で、この箇所を欠かすことができないのは、ここに約束のメシアを待ち望んでいた一人の人物のことが記されているからです。旧約聖書を通して、真の信仰を養っていたシメオンには、この幼子こそ、「救い」であり、「異邦人を照らす啓示の光」であることを悟ります。さらには、母マリアに、十字架の苦しみを示唆する預言さえ告げます。シメオンという一人の敬虔な人物を記録することを通して、旧約から新約へと通じる太い道筋をルカ福音書は明らかにします。

『もう死んでも良い』ほどの喜び

〈序〉

一人の、おじいさんがいました。神様のことを心から愛していて、いつも、神殿に行って、神様を礼拝していました。名前をシメオンとっていました。

シメオンさんは、旧約聖書の言葉をよく読んで（まだ新約聖書はありませんから）、その中で神様が約束してくださっているメシア、救い主が現れるのを、いつかいつかと、待ち望んでいました。

実は、神様が、シメオンさんに約束してくださっていました。「メシアに会うまでは、決して死なない。」聖霊なる神様が、そのように知らせてくださっていました。

〈1〉

その日、シメオンさんは、聖霊なる神様から特別な導きを受けて、神殿にやって来ました。「今日は、何か特別なことがあるかもしれない」。そんな予感を、神様からいただいていたようです。

シメオンさんが神殿に入っていくと、赤ちゃんを抱いた若い夫婦が、目に留まりました。

旧約聖書の律法には、その家で最初に生まれた男の子は、神様に献げなければならないと書かれています。実際には、その子の代わりに、献金をささげました。それから、その子を産んだお母さ

んのためにも、献げ物をするように決められていました。

シメオンさんが目を留めた若い夫婦は、こういうふうには律法で神様が命じられた献げ物をするために神殿にやってきた、イエス様のお父さんとお母さんだったのでした。

そして、二人が連れていた赤ちゃんこそ、わたしたちの救い主、イエス様でした。

〈2〉

シメオンさんは、この若い夫婦が連れていた赤ちゃんを腕に抱き上げました。そして、本当に嬉しくなって、神様のことを賛美しました。

「神様、本当に素晴らしいです。もうわたしは、死んでしまってもかまいません。あなたは、約束してくださった通りに、この目であなたの救いを見させてくださったからです。この救いは、世界中の人たちのための救いです。あなたの民であるイスラエルが誇るべきものです」。

シメオンさんは、まだ赤ちゃんだったイエス様を抱いて、そんなふうと言って、神様をほめたたえました。まだ赤ちゃんなのに、この方こそ、神様が与えてくださった救い主だと分かったのです。それで、嬉しくなって、神様を賛美する言葉が、口をついて出てきたのでしょう。もう死んで

しまってもかまわないと言うほどに、喜びに満たされてきました。

イエス様のお父さんとお母さんは、それを聞いて、ビックリしてしまいます。これまでも、マリアさんのところに天使が現れて、イエス様のこと知らされました。そして、今、ここでも、一人のおじいさんがやって来て、イエス様のことを見て「わたしはこの目で神様の救いを見た」と言って、「もう死んでもかまいません」と言うほどに喜んでいきます。

〈3〉

シメオンさんは、さらにマリアさんに言いました。

「この子は、多くの人を倒したり立ち上がらせたりします」。この子を信じない人たちは、倒れることになります。この子を信じる人たちは、新しい命に生きる、立ち上がることになります。けれども、あなたは、信じない人たちのために、「心が刺し貫かれる」ような悲しい経験をします。

イエス様は、やがて十字架にかけられて死なれることになります。マリアさんは、それを目にして、どれほど悲しむことになるでしょうか。シメオンさんは、そのことを伝えようとしたのだと思

います。

〈結〉

けれども、イエス様が十字架で死んでくださることによって、イエス様を信じるわたしたちには「救い」が与えられました。イエス様が三日目に復活してくださることによって、わたしたちも死に勝利して「立ち上がり」（「復活する」という意味で使われる語）、永遠の命に生きることができるようになりました。

イエス様は、シメオンさんが、神様を賛美しながら言った通りに、わたしたちの「救い」を実現してくださいました。

イエス様がこういう救い主だと知るということは、本当に素晴らしいことなのですね。シメオンさんが「もう、死んでしまってもかまいません」と神様に感謝するほどに、素晴らしいことです。神様は、旧約聖書で、ずっと約束してくださっていたことを、ついにイエス様を送ってくださって、実現してくださいました。

ですからわたしたちも、「神様、ありがとうございます。イエス様をありがとうございます」。そんなふうには、イエス様を喜んで歩みたいと思います。（大西良嗣）

〔今週の暗唱聖句〕

ルカによる福音書 2章30～32節

わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

これは万民のために整えてくださった救いで、

異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。



〈ねらい〉

先週はクリスマスについて学びました。キリストがこの世に来てくれた意味を今一度思い起こし、その喜びをもって一年の最後の分級とすることができたらと思います。キリストの降誕が、2000年前の出来事というだけでなく、今を生きる子どもたちにとっても大きな出来事であるということを共に分かち合いましょ。

〈展開例〉

- ①先週は、クリスマスについて学びました。今日はその続きです。赤ちゃんイエス様ができてきます。イエス様が生まれた時代、お父さんとお母さんは初めての赤ちゃんが生まれたら神殿に行って、神様に献げ物をしました。本当は子どもを献げ物にするんですけど、子どもを献げる代わりに、鳥や羊を献げます。そういう決まりがあったんですね。神様に献げ物をして神様への信仰をあらわしました。そして、「生まれたばかりの子どもも神様のお守りと祝福の中で過ごせますように！」とお祈りしたんです。
- ②イエス様のお父さんのヨセフさんとお母さんのマリアさんも、赤ちゃんイエス様をつれて神殿に行きました。神殿では、たくさんの方がお祈りをしていました。そうした人々は、この地上に救い主であるお方が来るのを今か今かと待ち望んでいたんです。神様がそのように約束してくださったのを、心から信じていたんです。
- ③神殿の中に、シメオンというおじいさんがいました。長い間神様のために働いてきたおじいさんです。シメオンさんは、聖霊なる神様から「救い主に会うまで死ぬことはありませんよ」といわれたことがありました。その日からシメオンさんは救い主があらわれるのをまだかまだかと待っていたのです。
- ④シメオンさんがいつものように神殿へ行くと、マリアさんとヨセフさんがイエス様のために献げ物をしていました。そのときに、聖霊なる神様がシメオンさんにあの赤ちゃんが救い主ですよ、と教えてくれたのです！ シメオンさんは

思わずマリアさんとヨセフさんのところに行って、イエス様をだっこしました。自分がずーっと会いたかった人に会えた喜びはとっても大きなものでした。

- ⑤みなさんも、冬休みが終わって幼稚園や保育園の友だちと久しぶりに会うときはとってもうれしいと思います。会いたかったお友だちや遠くに住んでいる親戚のお兄ちゃんやお姉ちゃんに会うのってうれしいですよ。シメオンさんも、ずーっとずーっと会いたいなぁと思っていたイエス様に会えて、とってもうれしかったんです。
- ⑥シメオンさんはどうしてイエス様に会うことがそんなにうれしかったのでしょうか。シメオンさんにとってイエス様はただの人ではないんです。「救い主」なんです。この地上に、本当の平和と喜びをもたらしてくれる救い主なんです。その救い主がこの世界に来てくださった。ここに、シメオンさんの喜びがあったんです。イスラエルの人たちが長い間ずーっと待っていた救い主、イエス・キリストが今、目の前にいる。それまでの苦しい時代は終わって、神様が人々といつもいてくれる、そのような時代がやってきた。シメオンさんの喜びは、当時の神様を信じる人みんなの喜びでした。
- ⑦今を生きる私たちもシメオンさんと同じように、イエス様がこの世界にきてくださったことを喜びましょ。私たちのために命をささげてくださいましたイエス様が、聖霊なる神様を通して、いつも一緒にいてくれるのです。今日は、今年最後の分級ですね。この一年間、色々なことがあったと思います。みんなが、いつ、どこにいてもイエス様はいつも一緒にいてくれました。来年も同じです。私たちは、一人のときも決して一人ではなく、イエス様がいつも一緒にいてくれるのです。

〈お祈り〉

今年最後の分級です。今年一年を振り返って、一人ひとり、神様に感謝の祈りをささげましょ。

〈ねらい〉

救い主が与えられることを信じ、待ち望んでいたシメオンの喜びを知る。

〈はじめに〉

クリスマスの教会のいろいろな行事は無事に終わったでしょうか。新しく導かれた子どもはいるでしょうか。久しぶりに日曜学校に出席できた子どもはいるでしょうか。続けてきている子どもたちはクリスマスの喜びで満たされているでしょうか。冬休みを迎え、お正月もありますから、クリスマスはもう終わり、クリスマスツリーも飾りつけもお片づけ、という感覚になりやすいのですが、実はクリスマスという期間はまだ続いているというのが、教会暦です。シメオンの生き様を今年最後のこのクラスでともに味わいましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①おじいさんの名前はなんと言いますか。(25節)
- ②このおじいさんのシメオンさんはどんな人ですか。(25節)
- ③シメオンさんは、神様のお約束をいただきました。どういうお約束でしたか。(26節)

〈展開例〉

馬小屋で生まれたイエス様は、その後、マリアさんとヨセフさんに連れられて、神殿にやってきました。神様のご命令どおり、マリアさんとヨセフさんは、ささげ物を持って、礼拝をするために神殿にやってきました。イエス様は、まだ小さな小さな生まれたての赤ちゃんですね。マリアさんに優しく抱かれていたことでしょう。

神殿で礼拝をしていた時、それを見た、ひとりのおじいさんがいました。そのおじいさんは、すぐに、ピーンと分かったのです。「この赤ちゃんこそ、このお方こそ、あなたがお約束くださった救い主だ！」このおじいさんの名前が、シメオンさんでした。

シメオンさんはなぜ、赤ちゃんを見ただけでイエス様だとわかったのでしょうか。それは、毎日毎日神様を礼拝して、よく聖書も読んで、いつもメシアが現れる日を待ち望みながら、神様に従って生きていたからです。だから、この日、神殿に行ったとき、すぐに「この赤ちゃんが神様が約束されていた救い主だ」ということがわかったのです。ずっと待っていた方を目の前にする、どんな驚きと喜びだったでしょう。シメオンさんはイエス様を抱いて、心から神様を賛美しました。声に出して、「神様ありがとう、神様は素晴らしい、私はこの目であなたの救いを見ました、私はおじいさんですから、もう死んでもかまいません！」と言いました。この大きな喜びは、私たちにも与えられる喜びですね。待ちに待ったイエス様がお生まれになったことを全世界の人と一緒に祝いするクリスマスを先週は過ごしました。そして、今、私たちは、イエスさまを通して、シメオンさんのように神様のお約束の救いが本当になったことを喜ぶことができます。

〈お祈り〉

神様、この一年も今日までお守りくださりありがとうございます。私たちに変わることをない喜びをくださってありがとうございます。この喜びが新しい一年を覆ってくださいますように。アーメン。



〈ねらい〉

クリスマスを祝った喜び・恵みが、生徒たちの生涯にわたるもの—シメオンのように老人となるまで—であることを学ぶ。またイエス様は、御生涯の始めから最後の十字架に至るまで、律法に服し律法を成就してくださり、私たちの救いを勝ち取ってくださったことを学ぶ。

〈展開〉

クリスマスの感動・喜びをふりかえりながら、以下のQ&Aを展開し、聖書の記事を確認しつつ、生徒たちに神様の恵みを考えさせる。

〈ワーク〉

- 先週は多くの教会でクリスマスを祝い、礼拝をささげたことでしょう。舞台はベツレヘムから、
() の () へと移りました。
さてそこにはだれが登場してきますか。(22節、25節)
()、()、()
)。
- マリアとヨセフはなんのために神殿へ行きましたか。()。
そこでは何がささげられましたか。
() と
()
- シメオンという人が登場します。彼はどのような人でしたか。25節、26節
()、()、()、()、()、()

- 29節、30節の意味はなんでしょうか。
()
- シメオンは、イエス様がもたらして下さる救いのことをどのように考えていましたか。(31節、32節)
()、()、()、()
- 29節から32節のシメオンの言葉は、長いあいだ神様がイスラエルに約束されていたことでした。
しかし救いはイスラエルだけでなく、()、()にも与えられるものでした。
- 4節、35節の意味について話しあってみましょう。

〈答え(参考に)〉

- エルサレム、神殿。イエス様と両親(ヨセフとマリア)
- イエス様を主にささげ、またいけにえをささげるため
イエス様御自身と山鳩一つがいと、家鳩の雛二羽
- 正しい人。信仰があつい人。イスラエルの慰められるのを待ち望む人。聖霊がとどまっていた人
メシアに会うまで死なないとお告げを聖霊から受けていた人
- この世を去り神様のみもとに召されること。
イエス様こそ、神様が約束された救い主であること
- 万民……救い、異邦人……光、あなたの民……誉れ
- 万民、異邦人



〈ねらい〉

シメオンの平安を共有する。

〈展開例〉

Q. 今日は今年最後の日曜日。一年間いろんなことがあったと思う。満足な一年だったか？ それとも物足りない一年だったか？ 勉強や部活、友達や恋愛に夢中になったことを振り返れば「来年も楽しみだなあ」希望をもって一年を終えられる。でもいいことばかりじゃなかっただろう。部活や受験勉強、人間関係での悩み、挫折、苦しみを振り返れば「来年は大丈夫か」不安な思いで一年の終わりを迎えることになる。

①今日登場した老人シメオンもある終わりを目の前にしていた。それは人生の終わり。シメオンは人生の終わりに何を振り返っていたのだろうか？ この時期イスラエルは神様を無視し続けた罰として、国を失いローマ帝国の奴隷となっていた。「神様の民である私達が、本当の神様を知らない人達の言いなりだ。神様から愛され、神様を愛すべき私達がなんたる様だ。この先私達はどうなるんだろう」不安があっただろう。「でも神様は私達をいつか慰めてくださると聖書で約束されている」希望もあったに違いない。「神様、あなたの約束の救い主を私達に与えてください！」救いを待ち望み願い続けたことだろう。不安、希望、願い色々な思いを抱え、シメオンは人生の終わりのときを過ごしていた。

②そんなシメオンがイエス様と出会う。シメオンは「安らかさ」に満たされた。「この先どうなるんだろう」という不安は消え、心は安心で一杯。「神様は私達を救ってくださるだろう」という希望は「神様は私達を救ってくれる！」という確信に。「救い主をください！」という願いは「神様は奴隷となったイスラエルを救うだ

けでなく、世界中のための救い主をイスラエルから生まれさせてくださった！なんと誇らしいことか！」讚美に変えられた。色々な思いで心ざわつく人生の最後にシメオンは安心を与えられた。

③シメオンを安心させた救いとはどんな救いだったのか？ シメオンは救い主をこう語った「イスラエルを倒したり、たち上がらせたりする者」神様を知らないローマ帝国の世界で生きている人々。救い主は彼らに対して「神様から遠のいて倒されるか？ 神様に戻って起き上がるのか？」こうした問いで人を招き、神様のもとに多くの人々を取り戻す方だと言われている。シメオンは信仰の厚い正しい人であった。「今度こそ神様が私達と一緒に生きてくださる。私達を力づけてくださる！ 今度こそ、私達は神様を無視する民から、神様を中心にした民となれる！」人生の終りに与えられたシメオンの安心は、こうした救いを覚えたときに与えられた。この救いへの思いを呼び起こしたのはイエス様である。

④君達の人生の終りは先のこと。でも人生を刻む一年の最後に、不安を安心に変えられて来年に向かいたい。安心はイエス様と触れ合うことで与えられる。イエス様を覚え、神様中心に生きる未来を描くときに与えられる。シメオンの腕の中のイエス様は、今、君の心の中にいてくださる。今日、神様のもとに集められた君達を、神様は来年も奮い立たせてくださる。この救い主に目を向けて今年最後の週を過ごしたい。

〈祈り〉

イエス様、あなたを見つめて一年の終わりを過ごせることに感謝します。イエス様、来年も私を神様のもとに導いてください。アーメン。

2010年度カリキュラム (2011年1～3月分)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月2日 新年	ヨハネと主イエスの受洗	マタイ3:13-17	マタイ3:17
	わたしたちの友となるために来られ、洗礼を受けた主イエスをほめたたえよう		
1月9日	荒れ野の主イエス	マタイ4:1-11	ヘブライ2:18
	わたしたちのために誘惑を受け、しかも勝利された主イエスの恵みを知ろう		
1月16日	漁師を弟子にする	マタイ4:18-22	マタイ4:19
	主イエスに召されて弟子とされたわたしたちは、主イエスに従っていこう		
1月23日	神の国の幸いの説教	マタイ5:3-12	マタイ5:3
	神の国（天の国）に生きる者とされたことを喜び、主イエスと共に歩もう		
1月30日	律法の完成者キリスト	マタイ5:17-20	マタイ5:17
	律法を完成されたキリストの義によって神の国に入れられることを喜ぼう		
2月6日 (11信教の自由)	地の塩・世の光	マタイ5:13-16	マタイ5:14a
	この世界に神の国を映し出すために、地の塩・世の光として生きていこう		
2月13日	完全な人イエス	マタイ5:43-48	創世記17:1b
	神の完全な愛をいただいて、罪を赦し、愛に生きることができていることを喜ぼう		
2月20日	天に富を積む	マタイ6:19-21, 24	マタイ5:3
	わたしたちの心はどこにあるのだろうか。心をまっすぐに神さまに向けよう		
2月27日	神の国と神の義	マタイ6:25-34	マタイ6:33
	神を第一として、神に信頼し、思い悩まず、神の国の豊かさに生きていこう		
3月6日 (9-レント)	神の国の法則	マタイ7:7-12	マタイ7:12a
	神によって憐れまれて、憐れむ者として生かされる。その喜びを分かちあおう		
3月13日 レント	権威ある者の教え	マタイ7:24-29	ヤコブ1:22
	権威あるお方である主イエスに聴き従い、岩を土台とする人生を生きよう		
3月20日 レント	病人をいやすメシア	マタイ8:5-13	マタイ8:8b
	神の国のみわざが主イエスによって始められた。人を生かすメシアを仰ごう		
3月27日 レント	嵐をしずめるメシア	マタイ8:23-27	マタイ8:26
	神の国を映し出して、自然界をも支配しておられる主イエスをあがめよう		

2010年度 年間カリキュラム

(2010年4月～2011年3月)

二年サイクル聖書物語の第一年

	月 日	教会暦・行事	主 題
2010年 第37号	4月4日	進級式・復活祭	復活のキリスト
	4月11日		創造主なる神
	4月18日		被造物の祝福、環境（土地・生物）
	4月25日		神の栄光の舞台、歴史の主
	5月2日		人間の創造、人生の目的と文化命令
	5月9日	母の日	人間の創造、男と女の創造
	5月16日		罪と墮落
	5月23日	聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会
	5月30日		救いの約束（原福音）
	6月6日		カインとアベル
	6月13日	花の日	ノアの箱舟
	6月20日	父の日	ノアの契約
	6月27日		バベルの塔
第38号	7月4日		アブラハムの召命
	7月11日		アブラハムへの約束
	7月18日		ソドムの滅亡
	7月25日		イサクの誕生
	8月1日		イサクを献げる
	8月8日		ヤコブとエサウ
	8月15日	(平和)	平和の主
	8月22日		売られたヨセフ
	8月29日		総理大臣になったヨセフ
	9月5日		摂理の主の勝利
	9月12日		モーセの誕生
	9月19日	(20敬老の日)	モーセの召命
	9月26日		十の災いと過ぎ越し

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題
第39号	10月3日		葦の海を渡る
	10月10日		天からのパン
	10月17日		十戒を授かる
	10月24日		金の子牛の事件
	10月31日	宗教改革記念日	幕屋の建設
	11月7日		荒れ野の放浪
	11月14日		ヨルダン川を渡る
	11月21日		約束の地カナンへ
	11月28日	アドベント	待降・アブラハムの子
	12月5日	アドベント	待降・ダビデの子
	12月12日	アドベント	待降・捕囚からの解放
	12月19日	クリスマス	降誕・主イエスの降誕
	12月26日	年末	神殿で献げられる
2011年 第40号	1月2日	新年	ヨハネと主イエスの受洗
	1月9日		荒れ野の主イエス
	1月16日		漁師を弟子にする
	1月23日		神の国の幸いの説教
	1月30日		律法の完成者キリスト
	2月6日	(11信教の自由)	地の塩・世の光
	2月13日		完全な人イエス
	2月20日		天に富を積む
	2月27日		神の国と神の義
	3月6日	(9- レント)	神の国の法則
	3月13日	レント	権威ある者の教え
	3月20日	レント	病人をいやすメシア
	3月27日	レント	嵐をしずめるメシア

〈執筆よりひとこと〉

- 教師の皆様の祈りと尊い準備が祝福されて、集う子ども達一人ひとりの信仰の成長のために用いられますように。足りない内容をどうか補ってください。(芦田順子)
- CS教師たち七名が、分級展開例を二回分ずつ担当しました。多少不揃いのところがあるかと思えます。「聖書研究」、「説教展開例」との重複を避けて、Q&A方式で書きました。(那加教会牧師・中根汎信)
- 教会の宝である各地の子どもたちの成長を心よりお祈りいたします。(山中恵一)
- 弊誌、そして『リジョイス』の「いのちのパン」のために、祈りのご支援をよろしく願っています。教師と子ら、親と子らの祈りの場が、豊かに祝福されますように！(相馬伸郎)
- 子どもたちが、神様による救いの歴史の中で恵み豊かに生かされていることをおぼえて、神様に感謝する毎日でありますように。そのような感謝の生活のために教案誌が役立てられますように。(長谷川潤)

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第32号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。
- 申し込みの受け付けと送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼』のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

〈あとがき〉

- 特集「信仰の継承」の後編を掲載しました。子どもの目線からです。信仰の継承はバトンリレーに似ています。信仰は、親とされている者が子どもに与えることのできる最大で最高の遺産です。大切な信仰のバトンを受け継いでいくことを祈り求めて参りましょう。
- 今号も「教会学校教案誌」をお届けできますことを、神様と読者の皆さまに心から感謝申し上げます。届けられた封を破り、最新号を手にしてくださるその時、そこに至るまでの数々の奉仕者の労苦に思いをはせてくださるならば幸いです。まず、執筆者の犠牲的な奉仕なしに弊誌はあり得ません。とりわけ分級展開例は、読者であり、現場の奉仕者である教会学校教師による執筆であることが、弊誌の特徴の一つです。どうぞ、編集部までお声を掛けてください。また、こちらから声を掛けさせていただいたときは、どうぞ、祈りの内にお引き受け下さい……！
- 日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。「いのちのパン」は教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの家庭で、また教会で、祈りの場が祝福されるよう願って取り組んでいます。
- 様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しく願い致します。
- Soli Deo Gloria!

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき

二宮 創 (太田伝道所宣教教師)

巻頭説教

相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)

教会学校・日曜学校訪問

吉永肇子 (東仙台教会教会学校校長)

特別寄稿

牧野信成 (神戸改革派神学校教授)

特集「信仰の継承」

梶浦和城 (豊明教会牧師)

草野 誠 (恵那教会牧師)

町野義也 (恵那教会執事)

コラム

相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)

聖書研究

後藤公子 (元インドネシア派遣女性宣教教師)

国方敏治 (宝塚教会牧師)

弓矢健児 (千里山教会牧師)

吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)

藤井 真 (堺みくに教会牧師)

酒井啓介 (宿毛伝道所宣教教師)

説教展開例

望月 信 (高蔵寺教会牧師)

木下裕也 (名古屋教会牧師)

長谷川潤 (四日市教会牧師)

辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)

二宮 創 (太田伝道所宣教教師)

川杉安美 (網島教会牧師)

大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)

分級展開例

幼稚科

神港教会聖書学校教師会

小学科下級

芦田順子 (新浦安伝道所日曜学校教師)

小学科上級

那加教会教会学校教師会

中学科

山中恵一 (板宿教会定住伝道者)

イラスト作画

表紙 田口裕美 (尾張旭教会)

本文 岡野美佳 (青葉台教会)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長) 名古屋岩の上传道所宣教教師

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

長谷川潤 四日市教会牧師

望月 信 高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2010年10・11・12月号 (季刊)

第39号

2010年8月29日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎
	〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
	Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
